昭和５６年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書

中条遺跡群 III　権現山古墳・常光院東遺跡

１９８２

熊谷市教育委員会

熊谷市社会教育課

序文

熊谷市上中条は、市域の北東部に位置し、多くの古墳、条里跡、集落跡が存在することが知られています。

当地区では、昭和52年度から荒川左岸地区農村基盤総合整備パイロット事業が継続して実施されています。本市教育委員会では、昭和52年から56年までの5ヵ年計画で、この事業に伴った発掘調査を実施しております。昭和55年度調査は、県指定史跡となっています中条氏館跡の東側部分と、稚子塚・権現山両古墳の推定地を対象として実施しました。

これらの遺跡は、貴重な文化遺産として、後世に残すことが第一に計られるべきですが、工事の性格上やむをえず、記録保存の方策をとることとなったものです。

本書は昭和55年度発掘調査した両地区の成果を同56年度にまとめて報告するものです。

本書が郷土の歴史を語るうえで、また、学術研究等にも資するものであるならば幸に思います。

最後になりましたが、県文化財保護課、深谷土地改良事務所、中条星宮土地改良事務所、地元中条・大塚・中島地区住民の方々から御指導・御協力いただきましたことに、深く感謝の意を表します。

昭和57年3月

熊谷市教育委員会
教育長　関根幸夫

例　　言

1．本書は熊谷市上中条に所在する、中条遺跡群のうち、同字竹之内1165－1他の常光院東地区および、同字女体1720他の権現山地区の発掘調査報告書である。

2．本調査は、昭和55年度荒川左岸地区農村基盤総合整備パイロット事業に伴い、国庫、県費および、市費、農政負担金によって実施された。

3．本調査は、昭和55年9月26日～昭和56年2月28日まで実施した。

4．本調査および報告書作成は熊谷市教育委員会寺社下博が担当した。

5．出土遺物は、熊谷市教育委員会で保管している。

6．出土遺物の実測図における中心線は、遺物を回転させずに実測したものは実線、180 度回転させたものは一点鎖線、任意に回転させたものは破線を用いて区別した。

7．写真図版、図版に用いる遺構名は、権現山地区にはG、常光院東地区にはJを頭に付し、住居址はH、溝址はD、井戸はW、土坑はP、墓址はG、竪穴はSを用いた。例えば、権現山1号溝はG1Dとなる。

8．本書の作成にあたって、埼玉県埋蔵文化財調査事業団水村孝行、酒井清治両氏に助言協力を受けた。記して感謝します。

9．調査組織は次のとおりである。

発掘主体者……熊谷市教育委員会教育長				関根幸夫
発掘担当者……	〃	社会教育課主事		寺社下博
事業局……	〃	社会教育課課長		並木良輔
	〃	〃	課長補佐	里見昌夫
	〃	〃	係長	岡田伸洋
	〃	〃	主事	金子正之
	〃	〃	〃	金井葉子

目　次

序文……I
例言……II
目次……III
図版目次……IV
写真図版目次……VI
I　調査の経過……1
II　遺跡の立地と環境……1
III　権現山地区の調査……3
1．住居址……6
2．権現山古墳……13
3．溝址……18
4．土坑……25
IV　常光院東地区の調査……28
1．住居址……28
2．土坑……45
3．竪穴状遺構……53
4．溝址……58
5．井戸址……66
6．周辺出土土器……73
V　考察……75
1．出土遺物……75
2．まとめ……85

図 版 目 次

Fig

1．遺跡の位置と周辺の遺跡…… 2
2．周辺地形および発掘区域…… 4
3．権現山地区遺構配置図…… 5
4．1号住居址…… 7
5．1号住居址出土遺物（1）…… 9
6．1号住居址出土遺物（2）……11
7．1号住居址出土遺物（3）……13
8．権現山古墳……14
9．権現山古墳出土遺物（1）……16
10．権現山古墳出土遺物（2）……17
11．1号溝、1、2、3号土坑……18
12．1号溝遺物出土状況および土層……19
13．1号溝出土遺物（1）……20
14．1号溝出土遺物（2）……21
15．2、3、4号溝……23
16．4号溝墓址……24
17．4号溝出土遺物……25
18．4号土坑……25
19．4号土坑出土遺物……26
20．5号土坑……27
21．常光院東地区遺構配置図……29
22．1、2、3号住居址……30
23．1号住居址出土遺物（1）……32
24．1号住居址出土遺物（2）……34
25．2、3号住居址出土遺物……38
26．4号住居址……40
27．4号住居址出土遺物……41
28．5号住居址……43
29．5号住居址出土遺物……44
30．6号住居址……44
31．6号住居址、6、7、8号土坑出土遺物……45
32．1号柱列（3、4、5、9、10号土坑）……46

33．１号柱列出土遺物……48
34．１、２、６、７号土坑……50
35．２号土坑出土遺物……51
36．１号竪穴……54
37．２号竪穴……55
38．３号竪穴……57
39．１、２、３号竪穴出土遺物……59
40．１号溝……60
41．２号溝……61
42．３号溝、８号土坑……62
43．４号溝……64
44．溝址出土遺物……65
45．１号井戸址（１）平面、土層……66
46．１号井戸址（２）上段・北面・立面（左)、同北面徐去後立面(右）……67
47．１号井戸址出土遺物……68
48．２号井戸址……69
49．２号井戸址出土遺物……71
50．遺跡周辺出土の遺物……74
51．出土古銭拓影……74
52．延享二年古図……87
53．中条氏館址北掘試掘坑配置及び溝址復元図……87

写真図版目次

PL.
1．航空写真
2．G1H（上・全景、下・東壁焼土）
3．G1H（上・南半遺物出土状況、下・同拡大）
4．G1H（上・中・下・炭化材及び焼土出土状況）
5．GM・全景
6．GM周溝（上・北面、下・西南面）
7．GM（上・主体部、下・須恵器大甕出土状況）
8．G1D（左上・全景、右上・中・下・遺物出土状況）
9．上・G2－3D、G1－2P、下・G4D、G5P
10．上・G5P、下・G4DG
11．G4P（上・全景、下・遺物出土状況）
12．調査区全景（上・稚児塚、下・常光院東）
13．上・J1、3H、下・J1H遺物出土状況
14．上・J2H（左全景、右遺物出土状況）下・J3Hカマド
15．J4H（上・全景、中・貯蔵穴内遺物出土状況）下・遺物出土状況
16．上・J5H、下・J1P
17．J2P（上・土層、下・全景）
18．J3P（上・土層、下・全景）
19．上・J5P、下・7P
20．J3S（上・全景、中・下・遺物出土状況）
21．上・J1W土坑、下・J2W全景
22．J1W（上・上面全景、下・上面井戸側）
23．J1W横桟組方
24．上・J1D・J1S、下・J2D
25．上・J3D、中・同遺物出土状況、下・J4D
26．土師器甕（1）
27．土師器甕（2）
28．土師器甕（3）
29．土師器甕（4）
30．土師器杯
31．土師器杯底面及び内黒杯
32．土師器高杯（1）

33．土師器高杯（２）

34．須恵器甕

35．須恵器杯（１）

36．須恵器杯（２）

37．須恵器杯（３）

38．須恵器Ⅲ Ｊ１Ｈ－16～32・Ｊ４Ｈ－９

39．須恵器椀

40．須恵器高台椀（１）Ｊ１Ｈ

41．須恵器高台椀（２）Ｊ１Ｈ

42．須恵器高台椀（３）

43．須恵器高台椀（４）

44．須恵器高台椀（５）

45．須恵器高台椀（６）

46．灰釉陶器・須恵器蓋

47．かわらけⅡ－Ａ・Ｂ・Ｃ、Ⅲ－Ａ・Ｂ類

48．かわらけⅣ－Ａ・Ｂ・Ｃ、Ⅴ－Ａ類

49．かわらけⅤ－Ｂ、Ⅵ－Ａ・Ｂ、Ⅶ類

50．かわらけ底面（１）

51．かわらけ底面（２）

52．かわらけの整形技法（左・見込み周辺、右・外面）

53．中世陶器

54．周辺出土遺物及び漆器

I. 調 査 の 経 過

中条遺跡群の調査は、荒川左岸地区農村基盤総合整備パイロット事業に伴い、昭和52年度から継続して実施したものである。

昭和52年度は大塚東沢遺跡（13）、53年度は中島遺跡（16）、54年度は鎧塚古墳を初めとした6基の古墳址（4）をそれぞれ調査し、昭和55年度は、権現山古墳・常光院東遺跡を調査した。また、昭和56年度は、54年度調査の鎧塚古墳の西に位置する女塚古墳を調査し、57年度に報告書を刊行する予定である。

昭和55年度調査については、昭和55年7月15日付、深地第 685号をもって埼玉県深谷土地改良事務所長より協議書が提出され、同7月28日付教文 429号で、埼玉県教育委員会より調査を実施する旨回答があった。これを受けて、市教育委員会では、昭和55年7月31日付熊教社発第 570号をもって権現山古墳地区の発掘調査通知書を、また、同10月29日付熊教社発第 912号をもって常光院東地区の発掘調査通知書を提出し、調査を実施していった。

権現山古墳地区は、昭和55年9月26日から同12月25日まで発掘調査を実施した。調査は稚子塚古墳、権現山古墳の推定地に掘削予定されている水路部分を中心として、その存在確認と規模の調査、周辺に存在する遺構の調査を実施した。

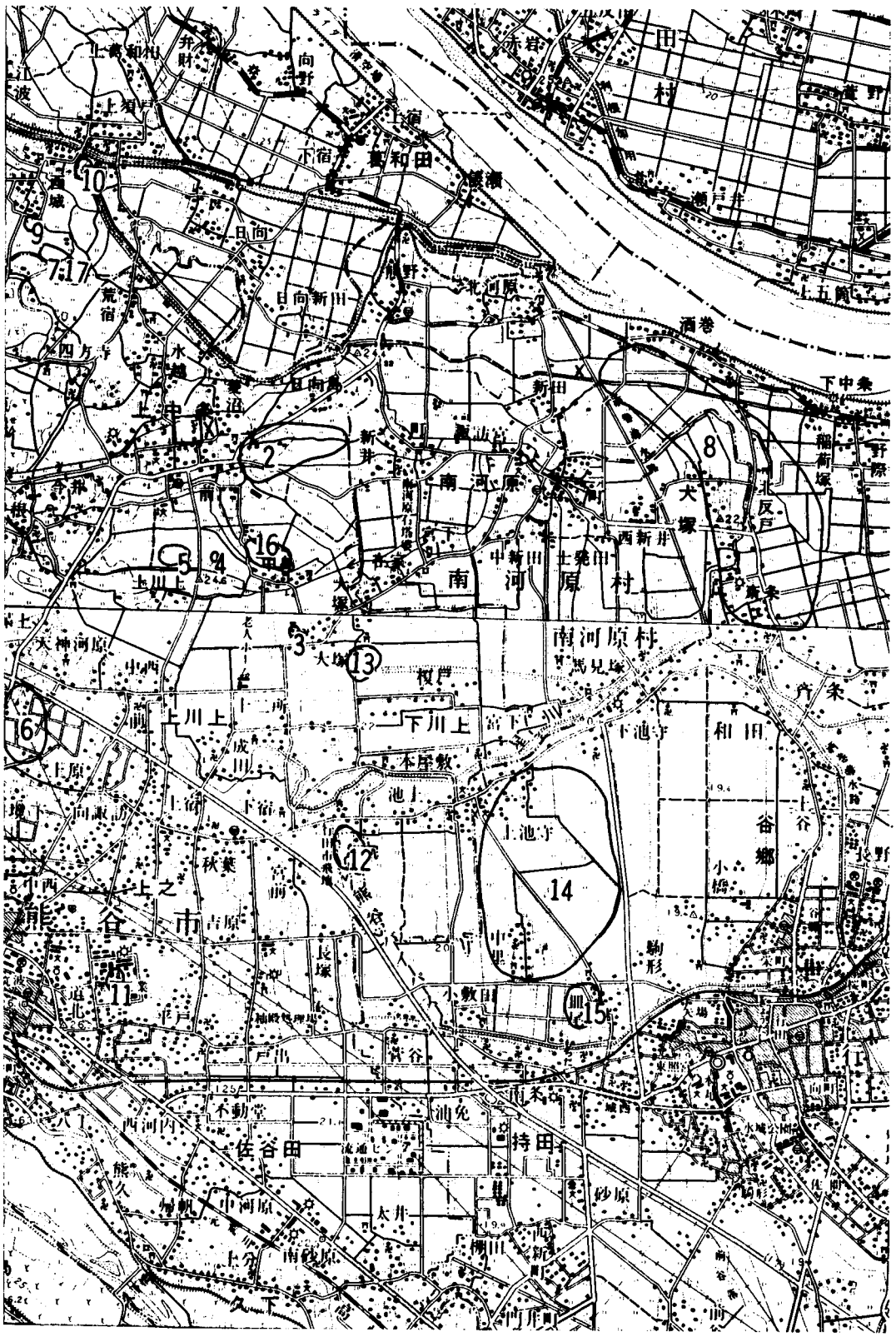
常光院東地区は、昭和56年1月6日から同2月28日まで発掘調査を実施した。調査は埼玉県指定史跡の中条氏館跡（現常光院）の東隣地であり、南北に掘削される水路部分を調査対象とした。当初の予定では水路の他に田畑表土を削平して、現在より低いレベルで全面水田化される予定であったが、トレンチ調査の結果、地表下わずか10cmで遺構検出面となることが判明したので、この予定を変更してもらい、逆に盛土をして畑として残してもらった部分が多い。

その他、昭和55年度整備事業地区内には周知の遺跡は存在していないが、水路掘削、道路脇パイプ埋設に伴う掘削工事に随時立合い、土層観察によって遺跡の存在を確認する調査を実施していった。その結果、ちょうど、両地区を結んだ線と正三角形を呈する位置のさすなべ排水路内に完形土器を見い出したが、層位が全く攪乱しており遺構に伴うものでないことが判明している。

II. 遺跡の立地と環境

遺跡の所在する熊谷市上中条は、市の北東部にあって、利根川と荒川の最も近接する地帯であり、北部は利根川によって形成された自然提防と後背湿地のいわゆる妻沼低地、南部は荒川によって形成された熊谷低地である。標高は25mである。

今回調査された遺跡は、県指定史跡・中条氏館跡（1）の東隣接地と、中条古墳群（2）の一部である。中条古墳群は、武人・馬形埴輪の出土した鹿那祇東古墳を始めとして鹿那祇西、雷電塚、屯倉塚、鍋塚、行人塚、丸塚等の円墳と、今回調査の稚子塚、権現山両古墳を含み、その他無名の



第 1 図　遺跡の位置と周辺の遺跡

円墳から成る。また東南の大塚古墳（３）、54年度調査の鎧塚古墳（４）、56年度調査の女塚古墳群（５）も、広義の中条古墳群に含まれるものである。このうち、鎧塚古墳、女塚１号墳は帆立貝式前方後円墳であり、他は円墳である。

西南の熊谷市肥塚には11基の円墳から成る肥塚古墳群があり、凝灰岩の石棺をもつもの、軽石を四面加工した胴張りの横穴式石室をもつもの等が知られている（６）。妻沼町西城字長安寺には古墳址が所在する（７）が、形態等定かでない。南河原村犬塚から行田市酒巻・斉条にかけては、とやま古墳を含む、酒巻・斉条古墳群（８）が所在する。とやま古墳は全長69ｍの前方後円墳であり、三本凸帯の大形円筒埴輪、鉄鈴の出土が知られている。また、酒巻１号墳は全長49ｍの前方後円墳で、三本凸帯で第一段の極端に長くなった円筒埴輪が出土している。とやま古墳のもつ古い様相から酒巻１号墳のもつ新しい様相へと長い存在を思わせる古墳群である。

城館址では、妻沼町西城の西城址（９）、同上須戸の東城（10）等が近在している。

また、周辺には弥生時代中期の熊谷市平戸の理研工業内遺跡（11）同池上遺跡（12）等から、木器類を出土した東沢遺跡（13）、池守遺跡（14）さらには、古墳時代後期から平安時代の集落址として皿尾遺跡（15）、中島遺跡（16）、長安寺所在遺跡（７）等が所在する。また、中条古墳群が存在する地域は、これより広い範囲で、古墳～平安～中世までの集落が存在することが知られている。

Ⅲ．権現山地区の調査

調査区は、南北・東西に掘削される排水路の部分を中心に設定した。

権現山地区は、県道熊谷―館林線をはさんで、北に権現山古墳、南に稚子塚古墳が所在するとされており、権現山古墳の推定地は三角形の畑地、他は一面水田となっていた。

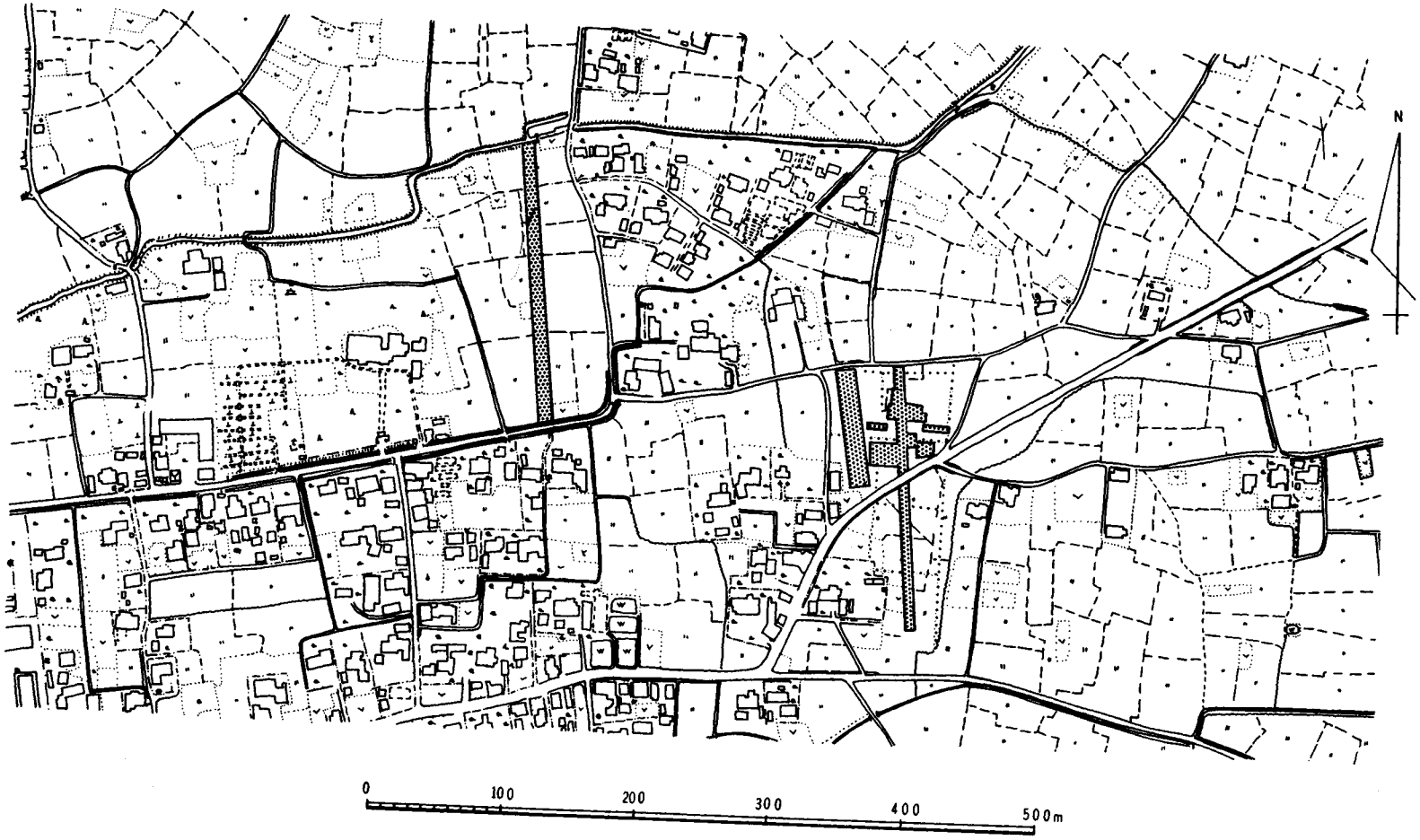
調査区は、トレンチとグリットを併用し、全体の層位を把握しようとした。当初の工事計画に沿って、南北排水路部分にＩライントレンチを設定、それを５ｍ間隔で区切り、１ｍ×３ｍのグリッドとして４～32まで配した。Ｉライントレンチを中心にして、東西トレンチ、４ライン、12ライン、20ライン、28ラインを40ｍ間隔で配した。また、Ｉラインに併行して、Ｅライン、Ｑラインを配した。

その結果、県道南側の稚子塚古墳推定地では、遺構はもちろん、遺物もほとんど出土せず、稀に出土する遺物も摩耗がはげしく、実測可能なものは皆無であった。

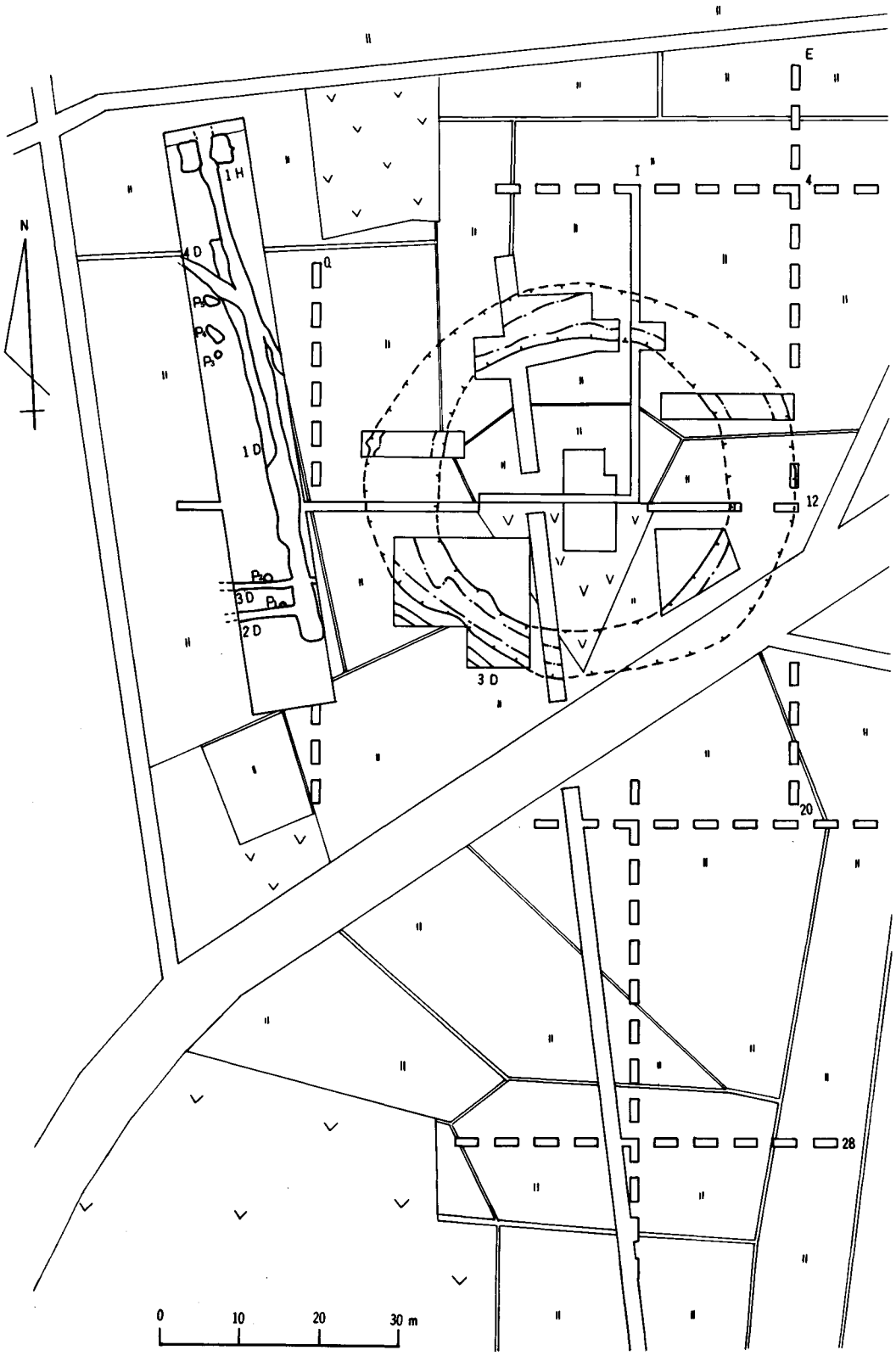
一方、県道北側の権現山古墳推定地では、Ｉ―６～８、Ｅ―12～Ｆ―12、Ｍ―12～０―12各区に溝を検出し、Ｊ―12区では小礫がみられ、古墳址の存在が確認された。周溝南東部の一部は県道にかかるものと思われた。また、Ｑ―12区では南北走する溝址（１号溝）が確認された。

その後、工事計画に変更が生じ、南北排水路の設置方位が西へふれることとなった。その為、さらに南北のトレンチを設定し、権現山古墳の調査区とした。

また、１号溝の調査区を南北に拡張し、北端で１号住居址を検出した。さらに、１号溝の南端部



第 2 図　周辺地形および発掘区域



第 3 図　権現山地区遺構配置図

でこれと交叉する２号溝、３号溝の南端部で４号溝を検出した。２号溝・１号溝・４号溝で囲まれた部分では五ヶ所の土坑が検出され、南から１号、２号、３号、４号、５号土坑とした。

権現山古墳の周溝調査に伴っては、西南部で二本の溝址が検出され、それぞれが北西から南東へ連続し、各々５号、６号溝とした。その後、各溝址の覆土を検討した結果、３号溝と５号溝、４号溝と６号溝が連続すると判断し、各々を若い番号をとって３号溝、４号溝とした。

１号住居址は、その北半が東西走する溝に切断されていたが、溝址については調査区域外の為未調査である。

１．権現山１号住居址（ＧＩＨ）

本住居址は調査区の北西隅に位置し、北半を東西にわたる溝（調査区域外の為未調査）に、中央を南北に走る１号溝によって切断されている。

東西 6.3ｍを計り、西壁3.７ｍ、東壁3.４ｍが残存している。主軸方位はＮ－ 90°－Ｅを示す。壁は35～50㎝の高さで残存しており、東壁の北半、南壁の西半はほぼ垂直であるが、西壁および東壁の南半、南壁の東半はやや緩やかになっている。

床面はほぼ水平であり、全面に固く踏みしめられていた。西南隅付近には径30×36㎝でほぼ円形を呈し、深さ15㎝を計るピットが穿たれていたが柱穴かどうかは不明である。

貯蔵穴は上径95×92㎝で不整円形を呈し、底径は55×40㎝で長円形を呈する。深さは30㎝を計る。貯蔵穴内には最下層に淡黄色を呈する粘土層（Ⅵ層）が全体に見られ、上層は東壁側に焼土層（Ⅳ層）、床面側に焼土粒と灰の混在層（Ⅴ層）が堆積している。これらの上層は、東壁側に焼土粒と灰白色を呈する灰の混在層（Ⅱ層）、床面側は木炭と焼土粒の混在層（Ⅲ層）が堆積している。これらの上層は本住居址の覆土である黒褐色土・焼土粒を含有する淡黄褐色土が乗る。

住居址覆土内には焼土・木炭・灰が多量に検出された。多くは各々が平面的に並ぶ位置をとるが、焼土と木炭が重なる場合は、必ず、焼土が上層となり木炭が下層となっている。又、木炭は壁から竪穴中央に向けての方向性をもって検出される場合が多い。灰も木炭と同様な位置をとるが、ほとんど焼土粒を混在さしている。これらは、壁付近では下層を厚くしたがえているが、中央付近ではほとんど床面との間に層をはさまない。

このような状況の中で東壁下に、厚く、しっかりした焼土層が検出された。周辺部にはわずかに淡黄色を呈する粘土層がみられた。この粘土層は貯蔵穴底面にはかなり厚く堆積していた。これらの層の基を集約していくと、東壁の一部に集結する。この位置の壁は、幅14㎝、奥行26㎝の範囲で焼土化していた。

本住居址で壁がこのように焼けた場所は他では見られない（先述したように、壁近くでは下層を厚くもつ）。このように、壁が強く焼土化している点、周辺に焼土・粘土層が拡がっている点、それらの位置が貯蔵穴のすぐ脇である点などからカマドの存在がうかがえる。しかし、①壁にみられる焼土自体が何ら面を成していないこと、②検出された灰が火床を示すものであるか不明瞭であること、③①②の点については本住居址が火災を被っており、その位置に見られる焼土・灰等が火災によるものか、カマドにおける火の使用によって生じたものか判然としない点等の問題点もある。

第 4 図　1 号 住 居 址

本址の出土遺物は全て焼土炭火材および第一次埋没土中からの出土である。特に西壁下に集中して出土している。床面からの出土は6図18の高杯および、同8の壺のみである。

出 土 遺 物

1．土師器甕。口径19.4、底径 7.8、高さ28.9cmを計る。外傾して比較的短い口縁から中央部に最大径を有する胴部へ移行し、さらに脹らみをもって底部に収束する。底部は若干上げ底状を呈している。口縁部は横ナデ、胴部は斜の削り、胴部下半はナデを加えている。内面は全面横のナデを施している。外面は二次的な火熱を受けて、表面が剝離しており整形痕はわずかに残るのみである。胎土は粗く、砂粒を多量に含む。二次的な火熱を受けており朱、黒褐色、淡黄色の各色を交互に呈する。

2．土師器甕。推定口径14.5、底径 6.9、推定高29.7cmを計る。外傾する口縁から、大きく張り出し最大径を中央に有する胴部へ移行する。胴部はほぼ球形を呈し、底部はほぼ平底を呈する。口縁は横ナデ、胴部は横縦斜各方向に削っている。底部も削りを施している。胴部下位はこれにナデが加わる。胎土は粗く、2mm大の礫を多量に含む。明赤褐色を呈し外面に黒班をもつ。

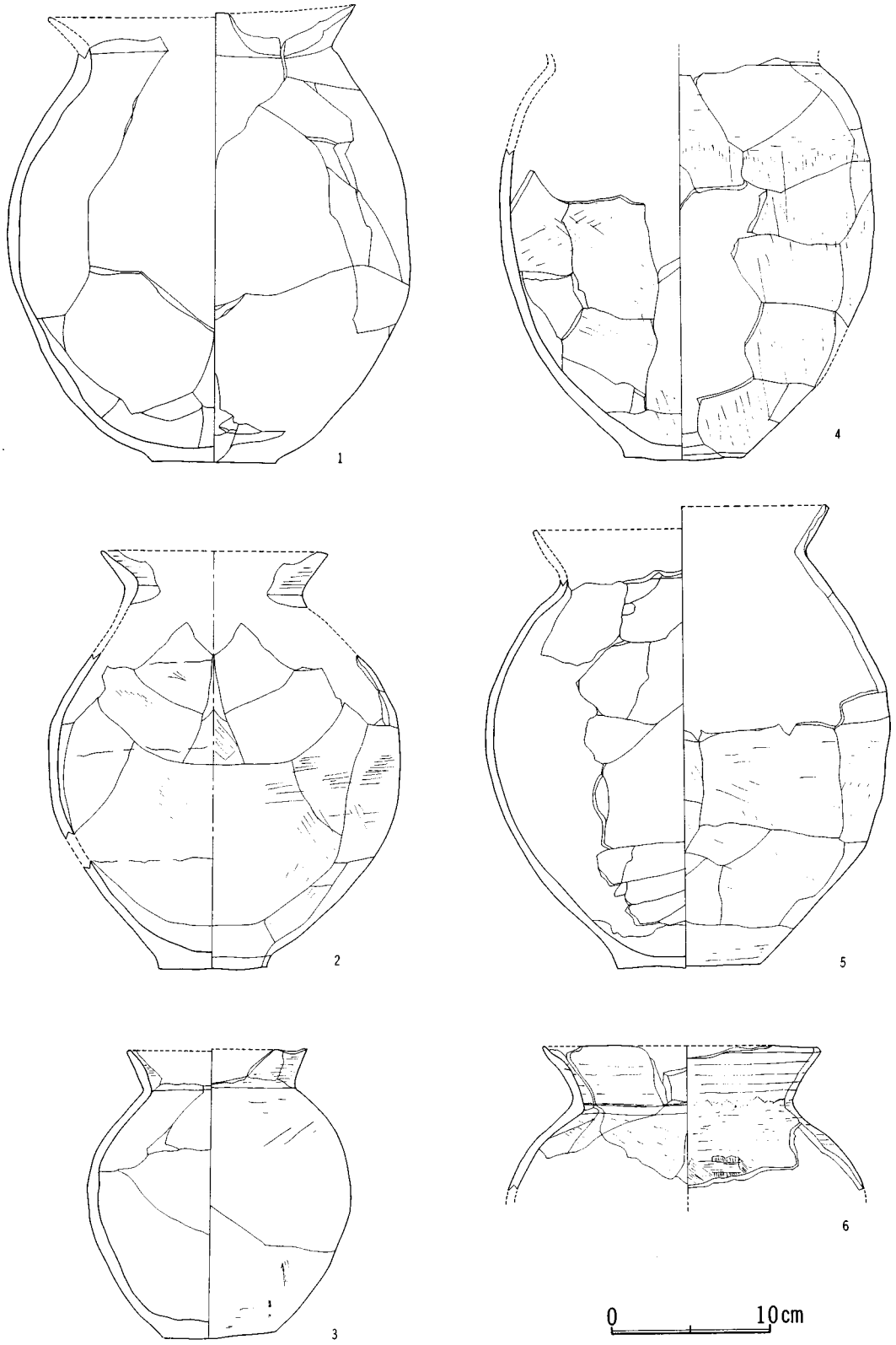
3．土師器甕。口径11.4、底径 7.1、高さ18.4cmを計る。外傾し短い口縁から最大径を胴部やや上位に有し、球形を呈する胴部へ移行する。底部はほぼ平底となっている。二次的な火熱を受けており、整形痕はほとんど不明である。胎土は粗く、砂粒を多量に含む。朱、黒褐色、淡黄色の各色を交互に呈する。

4．土師器甕。底径 7.7、残高25.3cmを計る。平底からわずかな脹らみをもってほぼ直立する胴部（中位）へ移行し、肩の張った形態をとる。外面は縦の削り。肩から上位はナデが加わり、胴部下半は縦のナデが加わる。胴部中位のみ縦の削りがそのまま残る。内面は横及び斜のナデが施されている。胎土は粗く、2 mm大の礫を多量に含む。二次的な火熱を受けており、朱、黒褐色、淡黄色の各色を交互に呈する。

5．土師器甕。推定口径18.8、底径 9.1、高さ29.2cmを計る。平底から最大径を中位に有しほぼ球形の胴部へ移行する。口縁はくの字状に外傾する。口縁は横ナデ、胴部上位は横のナデ、それ以下は縦あるいは斜のナデが加えられ削り痕は見られない。内面は丁寧なナデが施され器面が密に仕上げられている。胎土は粗く、2mm大の礫を多量に含む。二次的な火熱を受けており、朱、黒褐色、淡黄色の各色を交互に呈する。

6．土師器甕。口径17.6、残高 9.3cmを計る。外反する口縁から球形に脹らむ胴部へ移行する。口縁は横ナデ、胴部は横縦斜各方向にヘラ削りされ、上位のみ横のナデを加えている。内面は口縁下端に横ナデの段をもち胴部は斜め横にナデられている。胎土は非常に粗く、淡茶褐色を呈する。

7．土師器甕。推定口径13.5、残高19.2cmを計る。わずかに外反する口縁から、あまり脹らみをもたない胴部へ移行する。最大径は胴部中位やや下方にある。口縁は括れから1cm下まで横ナデ、胴部は斜の削りが施されているが、上位にはナデが加えられており、その痕跡をほとんど残さない。内面は横のナデが施されている。胎土は粗く、2mm大の礫が多量に含まれている。二次的な火熱を受けており、朱、黒褐色、淡黄色の各色を交互に呈する。



第 5 図　1号住居址出土遺物 (1)

8．土師器壺。口径19.8、残高6.8cmを計る。大きく外傾する復合口縁から丸みをもって肩部へ移動する。口縁は横のナデ、肩部は縦のヘラ削りが施されている。内面は横のナデが施されている。胎土は非常に粗く、砂粒状である。淡黄褐色を呈する。

9．土師器壺。口径18.9、底径7.4、高さ28.8cmを計る。丸みをもった底部から、大きく脹らみをもつ胴部へ移行する。頸部は鋭く括れ下段は直線的に外傾し、鋭い稜をもって上段は大きく外反する二重口縁に至る。口縁は横ナデ、胴部は斜あるいは横の削りが丁寧に施され、ナデの様な仕上げになっている。内面は横、あるいは斜のナデが施されている。胎土はやや細かい。赤褐色を呈し部分的に吸炭して黒褐色もしくは褐色を帯びている。

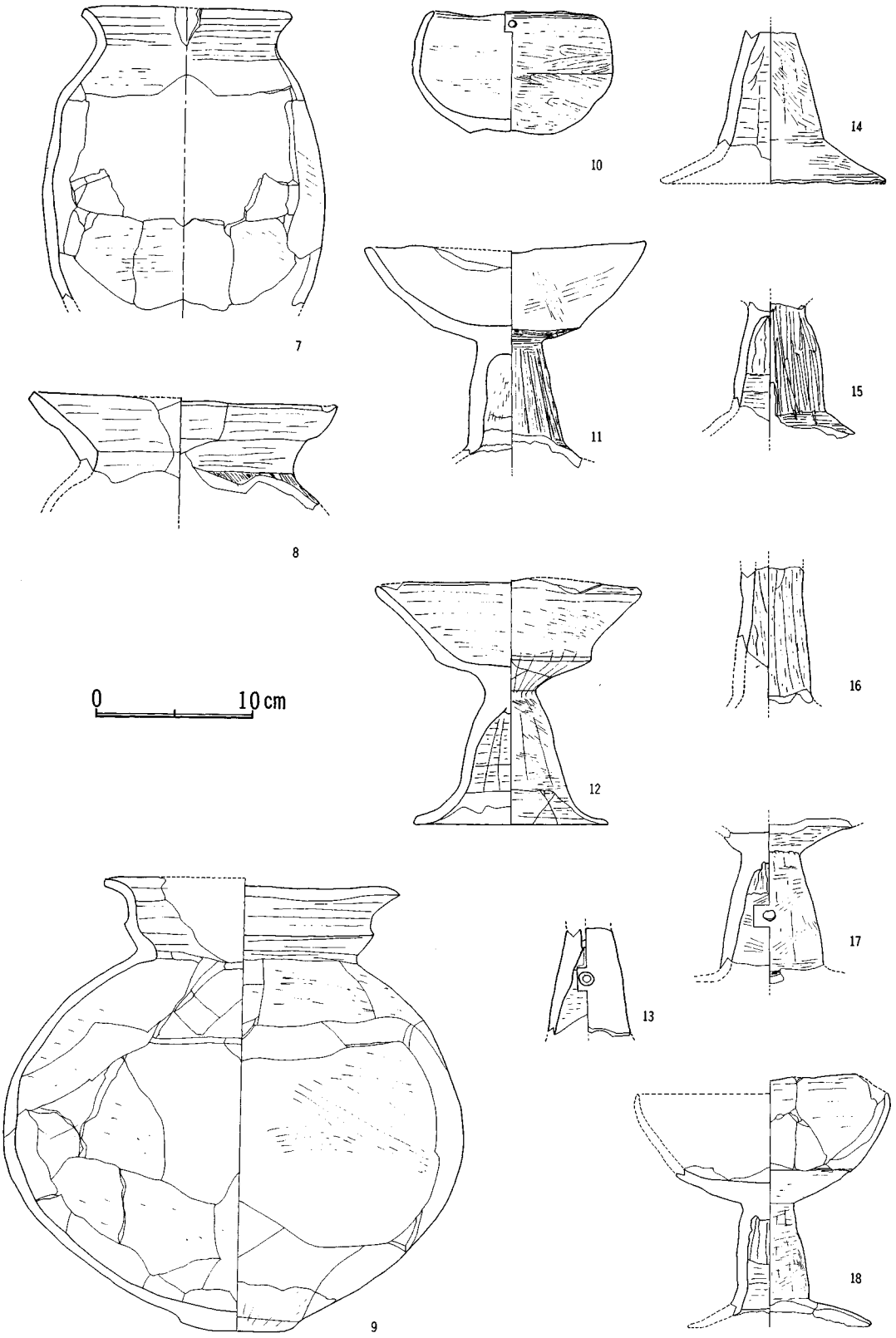
10．土師器鉢。口径10.7、底径5.0、高さ7.8cmを計る。上げ底から、大きく脹らみをもつ体部へ移行し、口縁は内傾する。最大径を体部中位やや上方にもち、13.0cmを計る。口縁に一対の円孔を穿っている。体部は最大径をもつ位置に緩かな稜を築く様に横、あるいは斜の削りを施している。口唇部は横ナデ、内面は横のナデ、円孔はいずれも外面から焼成前に穿たれている。胎土は砂粒を多く含み、ざらつく。淡黄白色を呈するが1/2は灰褐色を呈する。内外面の一部に黒班をもつ。

11．土師器高杯。口径18.1、接合部径4.1、残高14.4cmを計る。杯部は明確な稜をもちわずかに内湾しながら外傾する。脚部は直線的に外方に開き、裾部はカーブを描いて括れ外方へ大きく開く。杯底部外面は横方向の削り、体部は横あるいは斜のナデ、内面は全面に丁寧なナデが施される。脚部は縦の削り、裾部は横ナデ、脚部内面は明瞭な輪積み痕を残す。胎土は粗いが、全面に朱塗されている。杯部の1/2は吸炭して黒褐色を呈する。

12．土師器高杯。口径17.2、接合部径3.3、脚裾径12.5、高さ15.8cmを計る。杯部は明確な稜をもち、体部は外反する。口縁は短くほぼ直立する。脚部は細い接合部から、脹らみをもって外方に広がる。裾部は大きなカーブを描いて外方へ広がる。杯脚接合部は横のナデが加えられている。杯底部は脚との接合面から、稜のやや上方まで縦のナデつけが施されている。体部は横のナデ、口縁は2.5cmの幅で横ナデされており、口唇部はつまみあげられている。脚部は磨き様のナデが縦に施されている。裾部は横のナデが施されている。脚内面はヘラ状工具によってナデが横に施されており、縦にヘラ痕が残る。杯部の接合はいわゆるヘソをもっており、杯部を脚にはめこんでいる。胎土はやや粗い。杯部は朱塗されている。杯部の一部吸炭して黒褐色を呈する。

13．高杯。残高7cmを計る。直線的に外方が開く脚である。中央部に焼成前に開けられた一対の円孔をもつ。外面は二次的火熱を受けており、調整痕は不明である。内面は全面にナデが施されているが、上部は指頭によりナデ付けされている。杯部との接合はいわゆるヘソ結合である。胎土はやや粗く、全体にざらつく。二次的火熱を受けており、全体に朱色を呈する。

14．土師器高杯。残高10.1、推定裾径14.4、括れ径3.2cmを計る。脚部はわずかに脹らみをもつがほぼ直線的に開く。裾部は括れをもって直線的に広がる。脚部は縦の削りの後丁寧なナデを施しているが削りによる面取りがわずかに残る。裾部は横ナデ、裾部内面は斜のナデを加えている。脚部内面はヘラによる横ナデ、杯との結合はいわゆるヘソをもって脚部にはめこんでいる。胎土はやや粗く、全体に明るい赤褐色を呈する。



第 6 図　1号住居址出土遺物 (2)

15．土師器高杯。括れ径３.5、残高８.6cmを計る。脚部は脹らみをもって下方がやや広がり、裾部は外反気味に広がる。脚は縦の磨き、裾部は横ナデ、脚内面は下方に輪積み痕を明瞭に残し、上方は指頭によるナデ付け痕が明瞭に残る。胎土は粗く、砂粒を多く含む。内面は汚れた黄白色を呈するが、外面は朱塗されている。

16．土師器高杯。括れ径４.0、残存高８.8cmを計る。接合部下２cmまでほぼ直立し、下位は直線的にわずかに開く。外面は縦の削り、内面は指頭によるナデ付けが施されている。胎土はやや粗く、茶褐色を呈する。

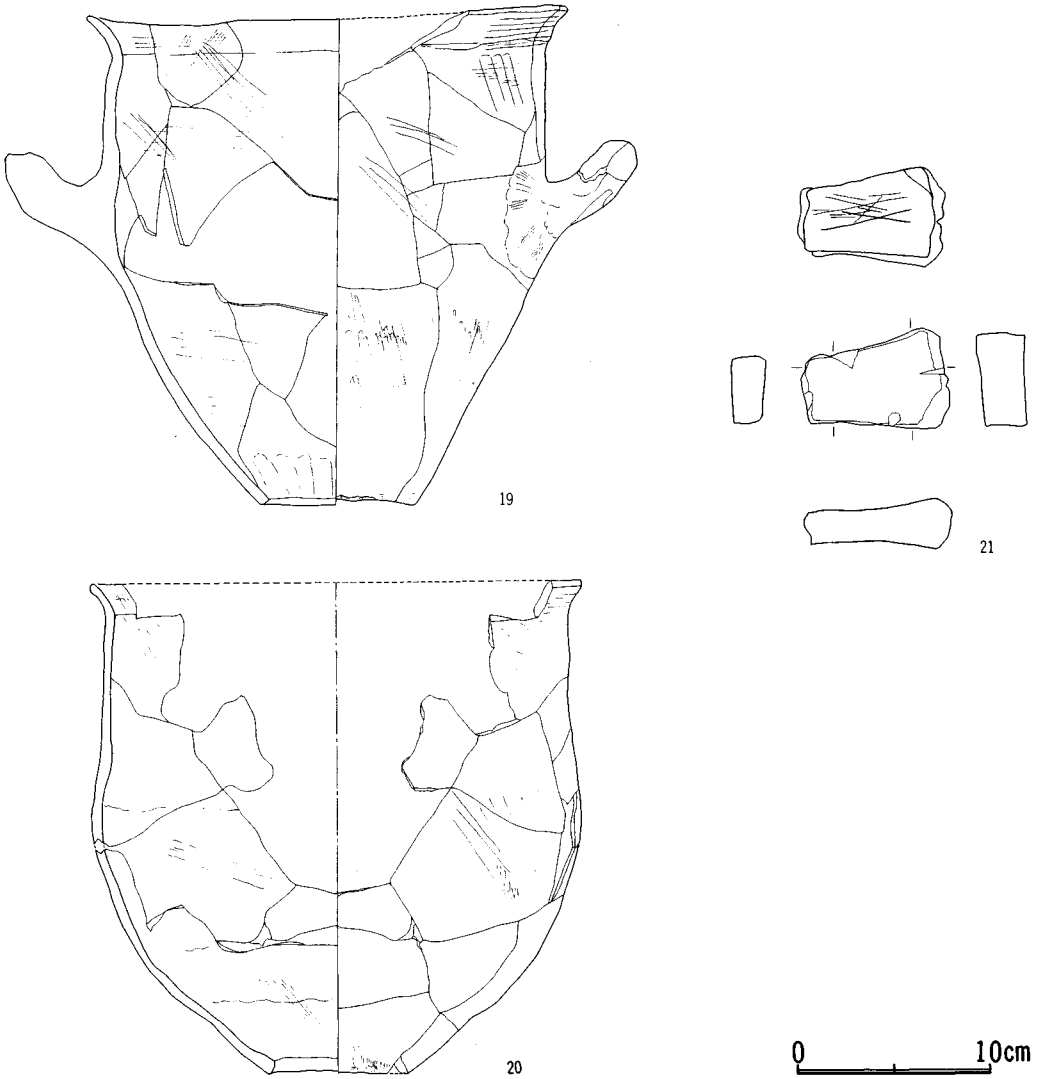
17．土師器高杯。括れ径３.8、残存高11.0cmを計る。脚部はわずかに脹らみをもって開く。裾部は大きく括れてほぼ水平に広がる。脚部中位に直径７mmの円孔が穿たれている。杯部底面はナデ、脚部は縦の削りの後丁寧なナデが加えられている。裾部は横ナデ、脚内面は指頭によるナデ付け、内面中位より下方はヘラによる横のナデが施されている。杯との接合はいわゆるヘソをもち、杯部を脚にはめこんでいる。胎土は粗く、全体に朱塗されている。

18．土師器高杯。推定口径16.4、推定裾径11.8、括れ径３.2、高さ16.2cmを計る。杯部は底部が深みをもち、わずかな稜をもって内湾する体部へ移行する。口縁はほぼ直立する。脚部はわずかに脹らみをもち、裾部は斜下方へ直線的に広がる。杯部は全面にナデを施している。脚部は縦の削りの後、丁寧なナデを加えている。裾は横ナデを施している。脚内面は下方に輪積み痕を残し、上方は指頭によるナデ付けが施されている。杯との接合はいわゆるヘソをもち、杯部を脚にはめこんでいる。胎土はやや粗く、全体に朱塗されている。

19．土師器甑。口径25.3（21）、底径８.1、高さ26.4cmを計る。外反する口縁からやや脹らみをもちながら胴部中位に移行する。胴部中位からは直線的に底部へ収束する。把手は胴部中位のやや上方にあって、鉤の手状に上方に折れ曲る。口縁は把手をつけた方向に長く、長円形を呈する。口縁は横ナデ、胴部の把手より上位は削り様のナデ、および横を主体としたナデ、胴部中位は斜の削り様ナデ、下位は縦方向の磨き様のナデ、内面は縦のナデが全面に施され、部分的に横のナデが加えられる。底部は鋭利に切り取られ、内外面にナデ付けを施して調整している。胎土は粗く、３mm大の礫を多量に含む。焼成は良い。全体に淡黄色を主体とするが、内面は朱色を帯び、外面は吸炭して黒色を帯びている所が多い。

20．土師器甑。口径25.8、底径７.4、高さ25.9cmを計る。小さく外反する口縁から、脹らみをもって胴部中位へ移行する。さらに底部にかけて脹らみをもって収束する。口縁と胴部中位の径がほぼ同一である。口縁は横ナデ、胴部は全体に若干斜の削りを施しており、その後ナデを加えている。内面は横方向のナデを主体としており、上下端は縦のナデを加えている。底部は鋭利に切り取られ内外面にナデ付けを施して調整している。胎土は砂粒を多く含み、全体にざらつく。焼成はあまい。全体に黄白色を呈するが外面の1/2は吸炭して黒色を帯びている。

21．砥石。台形を呈し、上下左右４面が使用されて各面の中央部が窪む。上面および左右面は刃の面研ぎに使用され、稜の部分は刃先を研いでいる。裏面は先端部を研いでいる。



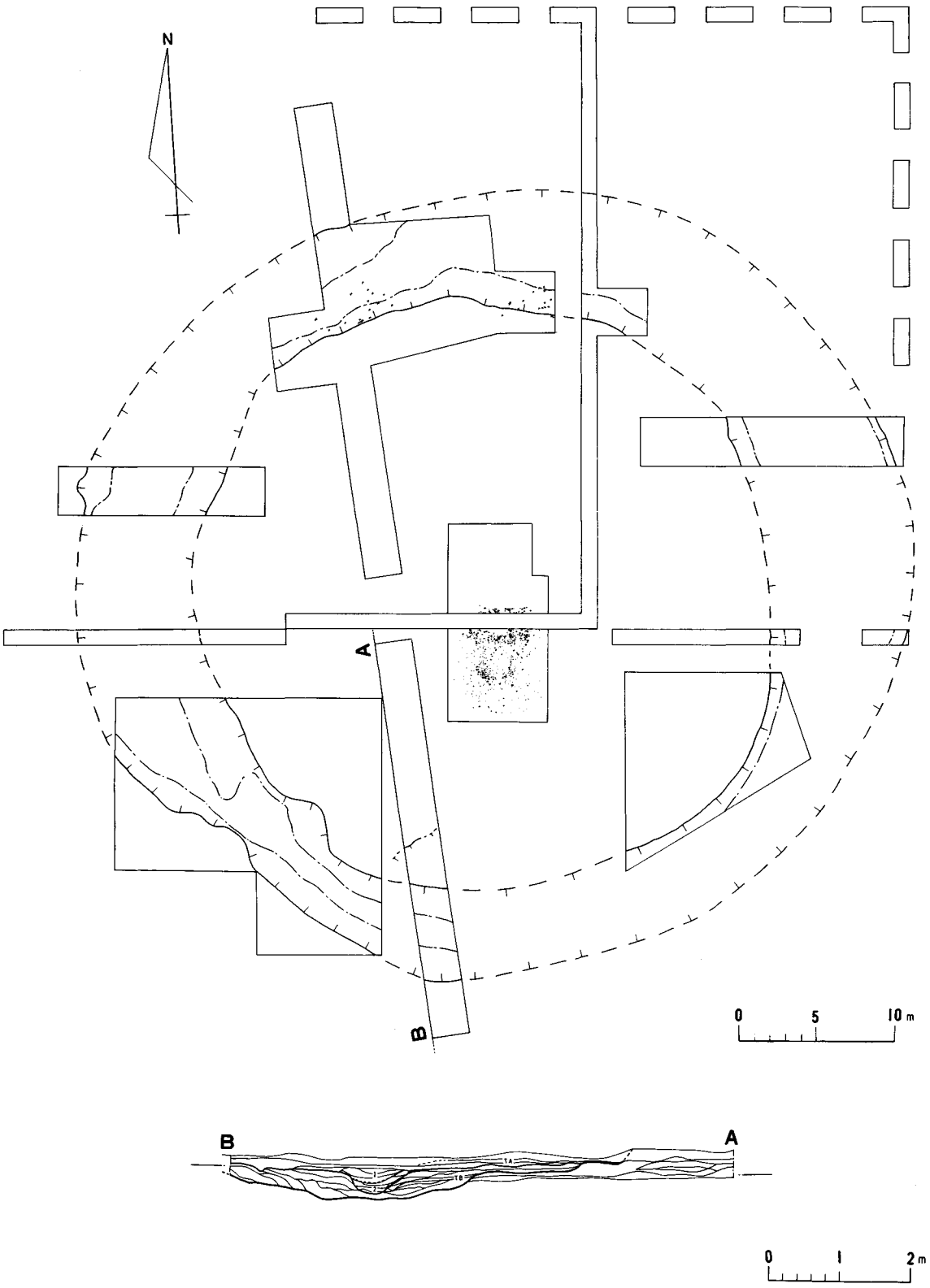
第 7 図　1号住居址出土遺物 (3)

2．権 現 山 古 墳（GM）

南北37.6、東西36.9ｍを計る円墳である。墳丘は大部分削平され、周溝底より 130cm上面までが残存していたにすぎない。

主体部と考えられる礫群が墳丘中央部より若干南に確認されている。南北4.4ｍ、東西3.3ｍの長方形に礫の集中した地点を中心として、東西および南面に礫が拡散し、南北6.7ｍ・東西5.6ｍの範囲に及ぶ。中心を成す長方形の礫群はその周辺部に礫が集中し、中央部は閑散としている。但しその北半はかなりの集中をみる。おそらく石室最下面に敷かれたものであり、長方形の礫群がほぼ石室の形態を示すものであろうと思われる。

溝は一周し、4.3～9.5ｍの幅をもつ。周溝の内外立上りは両辺共なだらかである。周溝西南部は4号溝が重複している。墳丘の南端西寄りの墳丘裾部はテラス状になっており立上りのプランは



第 8 図 権 現 山 古 墳

礫群の西南端に向う様相であった。また、周溝への落ち込みから墳丘内へ 4.0mの範囲は浅間A火山灰が推積しており、これより上位の墳丘が削平されたことになる。周溝内の土層は茶褐色粘土層及び、黒褐色土層が層序をなし周溝上端部分にはB山火灰層（TB）、最上層には浅間A火山灰層（TA）が推積する。周溝西南部に重複する4号溝はTB層の3層上面から切りこんでいる。TB層の上層の3層は黒褐色土、茶褐色土、黒色土という下からの層序をみせている。

遺物は、北面の墳丘裾部から周溝にかけて須恵器大甕・須恵器甕、須恵器提瓶（9図1.2.4）が出土しており、東南面の墳丘裾部から周溝にかけては須恵器杯（9図3）が出土している。本墳に伴う遺物は、先の3点である。墳丘構築基盤層内の西南部からは、いずれも土師器の甕・甑・高杯2点（10図5.6.7.8）が、また、北東部からは壺形土器の口縁部（10図9）が出土している。本墳からの埴輪の出土は皆無であった。

出 土 遺 物

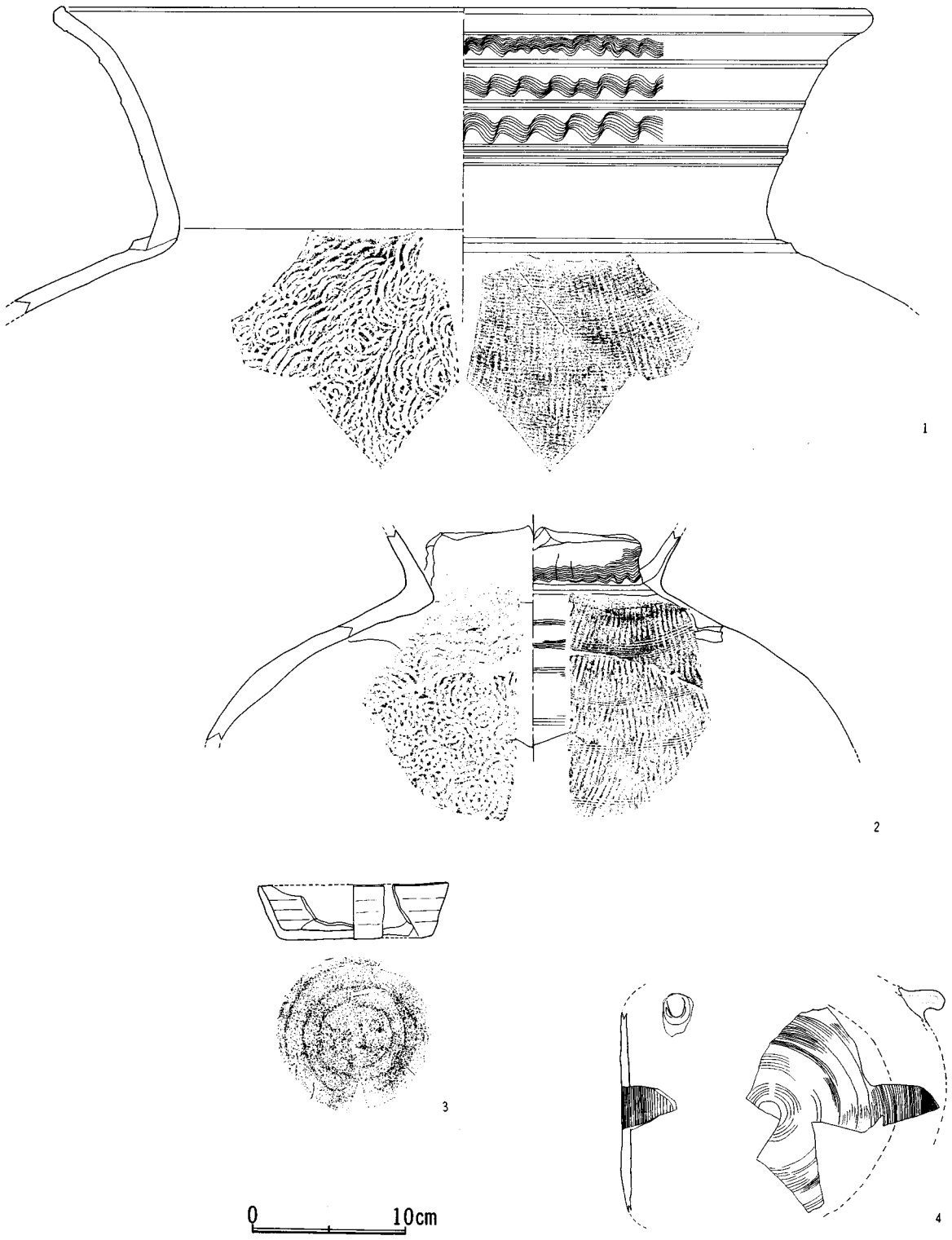
1．須恵器甕。推定口径53.4、括れ径39.8、残高19.3cmを計る。口縁は外反し口唇部は外面に脹らみをもつ。口唇内面に一条の沈線が部分的にみられる。胴部は大きく肩の張る形態をとるものと思われる。口縁部は横のナデ、胴部は外面格子目状のたたき目、内面は同心円の当目がみられる。口縁部には断面三角形、もしくは台形の凸帯で三段に区画された。櫛描き波文帯がめぐる。凸帯は最下段のみ2条で上段は1本ずつである。括れ部には断面三角形を呈する、低い補強帯がめぐる。胎土はやや細かく、灰色を呈する。

2．須恵器甕。括れ径16.6、残高14.2cmを計る。球状に脹らむ胴部から鋭く括れて外反する口縁へ移行する。口縁部は横ナデが施されている。括れから3cm上位に一条の沈線がめぐり括れ部との間に櫛描き波状文帯を2帯もつ。胴部は外面に平行たたき目をもちほぼ等間隔に櫛描きの横帯文をもつ。内面はのの字状の当目をみせる。胴部にみられる横帯文は下半まで及ぶものと思われる。胎土は粗い。焼成は不良であり朱あるいは黒褐色を交互に呈している。断面はサンドイッチ状に朱、黒、朱となっている。

3．須恵器杯。口径12.5、底径10.0、高さ 3.7cmを計る。周辺が若干丸味をもつ底辺から、わずかに外傾する体部から口縁へ移行する。底部は右回転ヘラ削り。体部は回転ナデが全面に施される。胎土は細かいが白色砂粒を多く含む。灰色を呈する。

4．須恵器提瓶。小型の提瓶である。耳は鉤状を呈している。口縁部および腹部については不明であるが、小片をみると腹部も含めて全体に掻き目がみられる。円盤状の体部から側面への変換点は極端に薄くなっている。胎土は細かく、青灰色を呈する。

5．土師器甕。口径21.0、底径 7.3、高さ30.6、最大径27.3cmを計る。周辺部が丸味をもつ平底から、最大径を中央部にもつ胴部へ移行する。口縁は鋭く括れて直線的に外傾する。口唇直下は若干細くなる。口縁部は横ナデ。胴部は中央に縦のヘラ削りが若干みられるが、底部も含めて全面的にナデられている。胴部下位は磨き様のナデが加えられている。内面はヘラ状工具によってナデられている為、縦にヘラの圧痕が随所に残る。口縁部に比して胴部の器肉が薄い。胎土は粗く全体にざらつく。淡黄褐色を呈するが一部吸炭して黒ずんでいる。



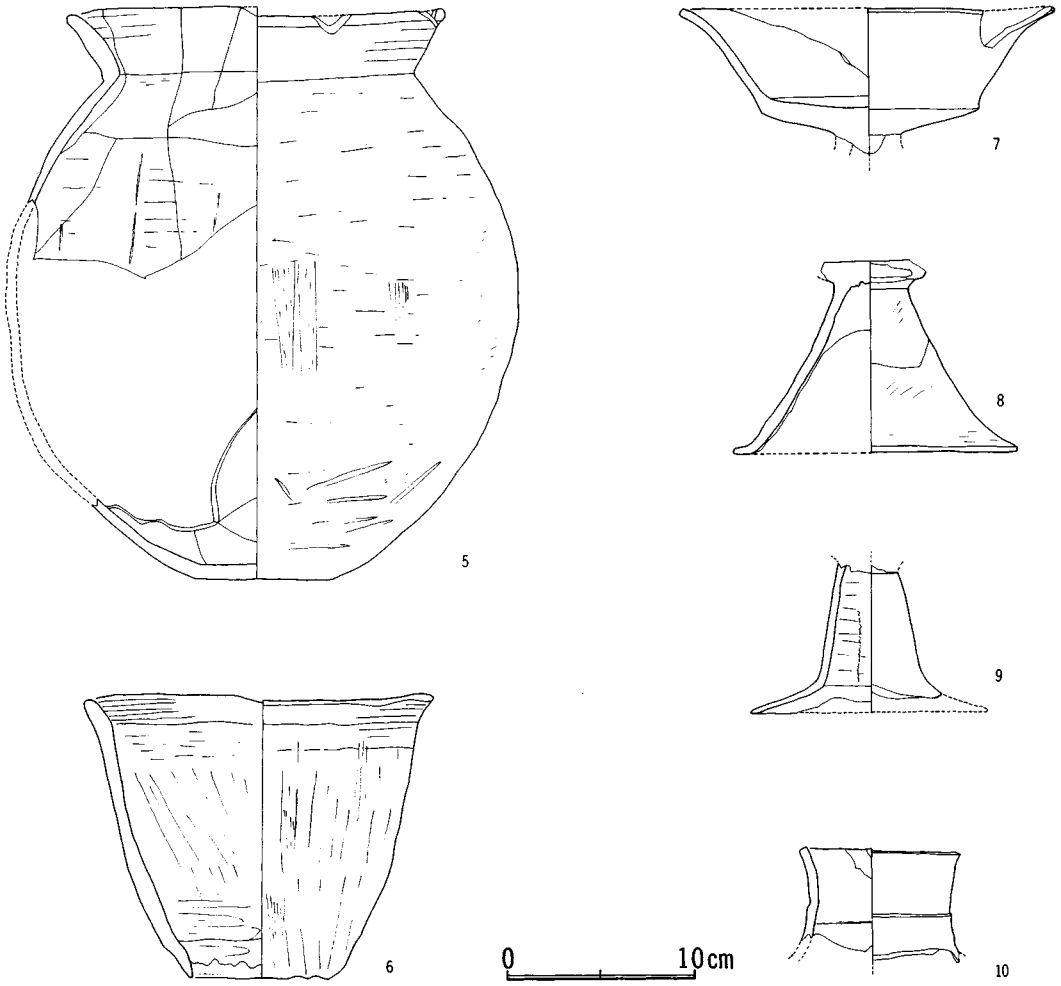
第 9 図　権現山古墳出土遺物 (1)

6．土師器甑。口径18.7、底径 7.5、高さ15.1cmを計る。口縁は外反し、胴部はわずかに脹らみをもちながら収束する。口縁部横ナデ。胴部は縦のヘラ削りの後、縦ナデ。内面は斜め方向のナデ。上位は横のナデ、底部附近は指頭による横のナデが施されている。底部の円孔は焼成後、内面を削る様に穿たれている。胎は粗く、砂粒を多量に含みざらつく。淡黄褐色を呈するが、内外面共吸炭して黒褐色を帯びる部分が多い。

7．土師器高杯。口径20.1、括れ径 3.5、残高 7.8cmを計る。杯底面外縁に明確な稜をもち口縁部は大きく外反する。内外面とも丁寧にナデられており朱塗されている。杯底部中央にはヘソをもつ。胎土は粗く、砂粒を多量に含む。

8．土師器高杯。括れ径 4.1、脚裾径15.3、残高10.3cmを計る。杯との接合部から大きく広がり、裾部に至ってより大きく開く。脚外面は斜のナデ、裾部は横のナデが丁寧に施されている。脚部内面は全体に横あるいは斜のナデが施されている。胎土は粗く、砂粒を多く含みざらつく。脚及び杯部外面に朱塗されている痕跡がある。淡茶褐色を呈する。

9．土師器高杯。括れ径 3.3、脚裾径12.8残高 8.0cmを計る。若干脹らみをもち緩やかに広がる



第 10 図　権現山古墳出土遺物 (2)

脚部から大きく広がる裾部へ移行する。脚外面及び袖部両面は水拭きされているものらしく、なんら調整痕をみせない。脚内面はヘラ状工具により横にナデられている。胎土は細かく朱色を呈する。

10．口径 8.6、残高 6.2cmを計る。口縁は2段になり上段径が小さい。口唇部は外反するが全体にほぼ直立している。口唇部はは矩形を呈する。内外面とも横ナデが2度施されている。内面には上部の横ナデの際についた条痕が二条みられる。胎土は粗く、茶褐色を呈する。

3．溝　址

a．1　号　溝　址（G1D）

本址は調査区の西端に位置し、ほぼ直線をもって南北走する。調査された溝の長さは63mにおよぶが、さらに北へ伸びる。

本址と重複する溝址は3本在る。南から2号溝、3号溝、4号溝と交叉する。また、調査区北端－1号住居址の北－で東西走する溝址と直交するが、調査区外の為未調査である。このうち、本址と南端で直交して、西へ走る2号溝は土層の状況からして、同一時期もしくは、同一遺構を構成するものと思われる。

溝は南端および中央部に西へ一段平担面をもつ。主体は概断面台形を呈する。西への張り出し平担面をもつ部分の幅は 310cm、張り出しをもたない部分の幅は 210cmを計る。深さは約1mである。

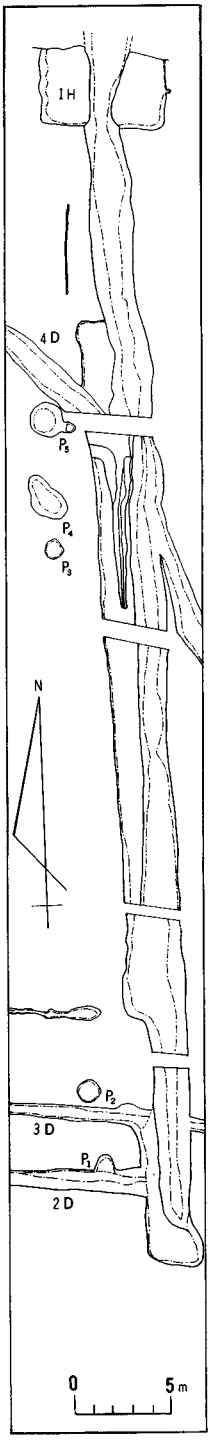
溝内からは、軽石・青石等の礫、常滑・渥美・須恵質・かわらけ等の焼物に混じって人骨粉・鉄片等が中央の張り出し平担面から南に特に集中して出土している。

覆土は茶褐色粘土を主体として、泥炭・灰・酸化鉄・軽石粒・灰色粘土が名々、または二種類以上が混入し層序を成す。そして、全ての土層が西から流れ込んだ。または、落ち込んだ状況を呈している点は見逃せない。また覆土のうち、泥炭を含有する黒褐色土（12図土層図中斜線部分）の純層を除いて、他の土層は人為的に混合されたような感を呈している。さらに現地表面では本址の東に隣接して南北走する畔が走っており、何らかの関連性をもつのであろうか。以上のように、本址の西に土盛りが存在した可能性が高く、その土盛りの東に溝址のみが残ったと言えよう。

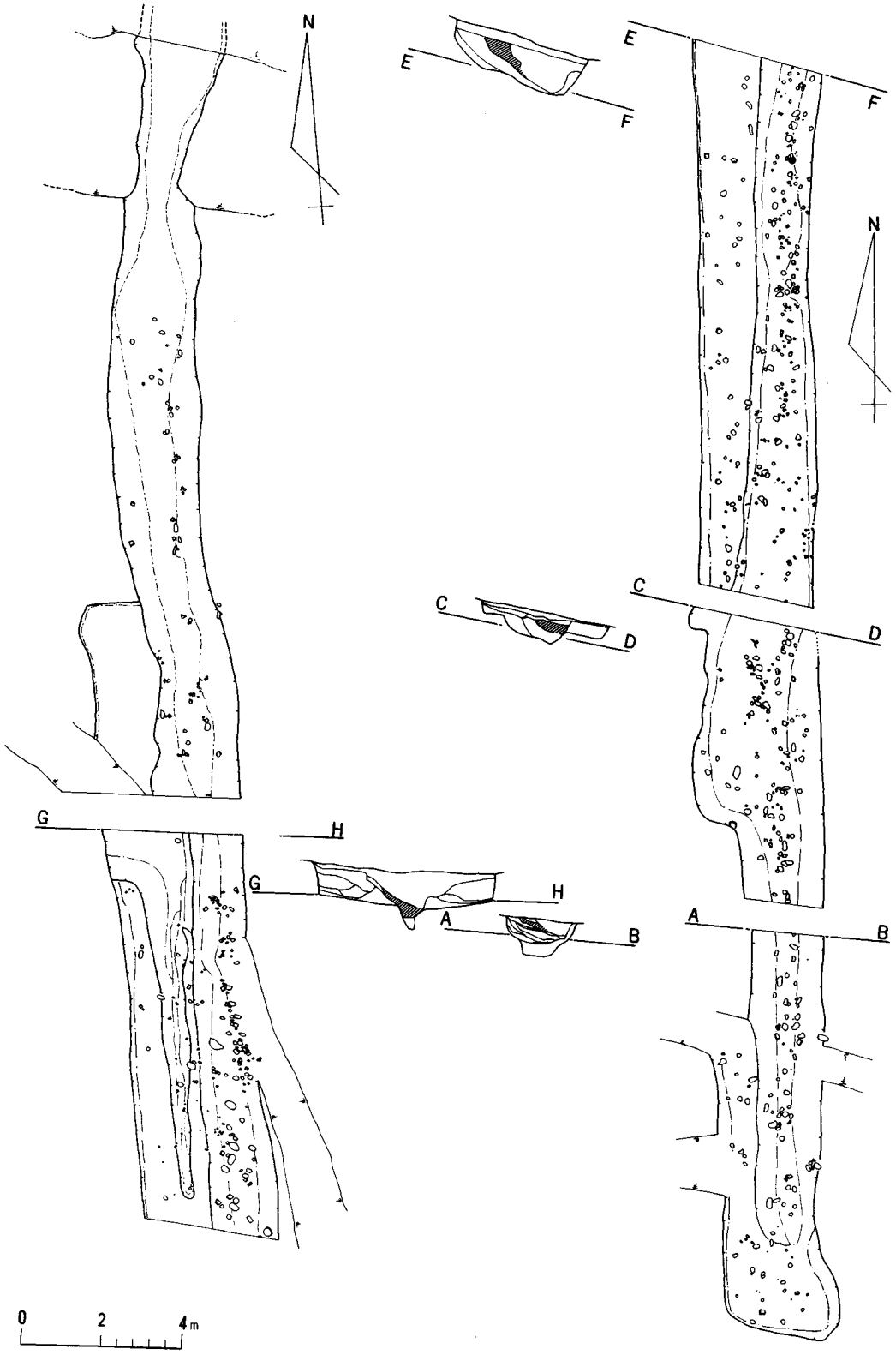
本址から多量の骨片・粉または、刀と思われる鉄片が、礫や焼物類と共に出土している様は、溝を利用した墓地とも考えられる。

出　土　遺　物

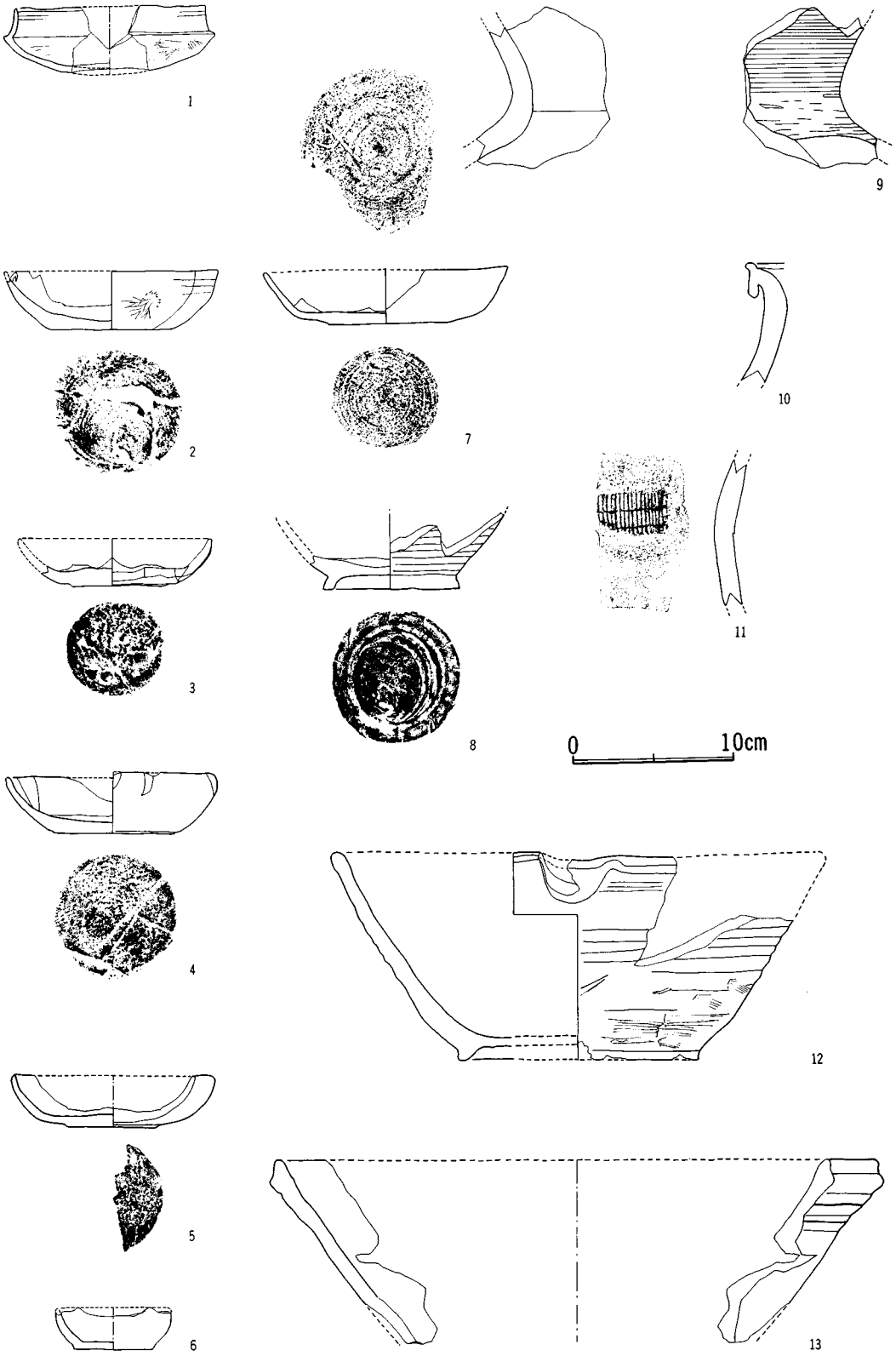
1．土師器杯。口径12.0、最大径13.3、高さ 4.3cmを計る。蓋受け部が明瞭に造り出され、口縁は内傾する。明確な稜から丸底へ移行する。口縁部は



第 11 図　1号溝
1・2・3号土坑



第 12 図　1号溝遺物出土状況および土層



第 13 図　1　号　溝　出　土　遺　物 (1)

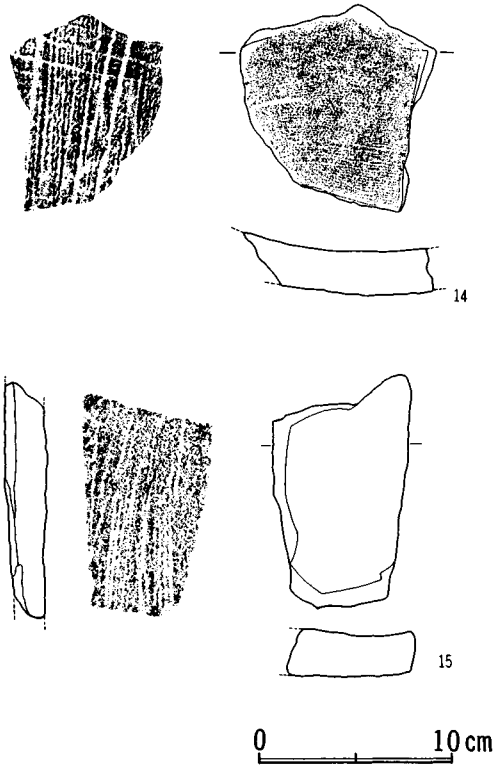
横ナデ、口唇部内面に窪みをもつ。体部外面は削りが施されているが、面取りがみられずナデ様のものであったと思われる。内面は横を主体としたナデが施されている。胎土は細かい。赤褐色を呈するが全面に黒褐色を帯びている。

2．かわらけ杯。口径13.5、底径 8.0、高さ 3.8cmを計る。平底から内湾する体部へ移行し、口縁はつまみ上げられて斜上方を向く。底部右回転糸切り。体部は水挽き痕を残す。外面は水を含ませた布でナデた部分があり、胎土の縒れた部分がみられる。内面底部周辺は指頭によるナデが施されている。胎土は非常に細かく、淡黄褐色を呈する。

3．かわらけ杯。口径12.1、底径 6.0、高さ 3.0cmを計る。切り残しの段を有する平底から、腰が張り内湾する体部へ移行する。口縁はつまみ上げられほぼ直立する。内外面とも水拭きされているものか、整形痕が全く残っていない。内面底部周辺は、指頭によるナデが強く施されている。胎土は細かく黒ずんだ黄白色を呈する。内面の一部にススが付着している。

4．かわらけ杯。口径13.3、底径 7.8、高さ 3.9cmを計る。切り残しの段を有する平底から、内湾する体部へ移行する。口縁はつまみ上げられほぼ直立する。外面は全体に整形痕が不明瞭であるが、水挽きの段および底部切り残しの段に摩耗した所がみられず、全体にナデを加えたものと思われる 内面も同様である。胎土は細かく、淡黄褐色を呈する。

5．かわらけ杯。推定口径12.8、底径 5.8、高さ 3.2cmを計る。切り残しの段を有する平底から、若干腰が張り内湾する体部へ移行する。口縁はほぼ直立する。内外面とも整形痕が見られず全体に丁寧なナデを施したものと思われる。胎土は細かく、黒ずんだ黄褐色を呈する。内外面の一部に異物が付着する。



第14図　1号溝出土遺物（2）

6．かわらけ小型杯。口径 7.2、底径 4.9、高さ 2.6cmを計る。平底から、大きく内湾する体部へ移行し、口縁はつまみ上げられてほぼ直立する。内外面とも表面は剝離し、詳細は不明である。胎土は細かく、汚れた黄白色を呈する。

7．須恵器杯。口径15.4、底径 6.8、高さ34cmを計る。切り残しをもつ平底から、大きく腰が張り外傾する体部へ移行する。口縁は体部と同一の軌跡上にあり斜上方を向く。底部は全面回転ヘラ削り、体部から口縁は水挽き痕を残す。内部底面に×印のヘラ書き痕を有する。胎土は粗く、5mm大の礫を含む。灰白色を呈する。

8．須恵器高台椀。底径 8.6、残高 4.5cmを計る。体部は内湾している。高台は八の字に開く。体部は水挽き痕を明瞭に残す。高台は付け

高台であり、底部は右回転糸切りである。胎土は粗く、3㎜大の礫を多量に含む。淡灰色を呈するが、体部外面は黒褐色を呈する。

9．須恵質壺。頸部のみ残存。頸部は外傾する。外面は全面にカキ目状の条痕を残す。内面頸部は横ナデ、体部は水拭きが施されている。胎土はやや粗い。淡青灰色を呈する。

10．常滑甕、内面小豆色、外面黒ずんだ小豆色を呈する。

11．常滑甕。押印文様が施されている。

12．渥美・片口鉢。口径31.0、底径15.0、高さ13.0cmを計る。体部はわずかに内湾し、口縁は丸く仕上げられている。高台はわずかに八の字状に開く。注口は 1.5cmほどの張り出しである。口縁直下が最も薄く先端は肥厚する。体部外面の整形痕は上中下段でそれぞれ異なり上段は横ナデ、中段は水挽き痕をそのまま残し、下段は高台の付着に伴い横の削りが加わっている。内面は全面に横のナデが施されている。胎土は粗く、灰白色を呈する。

13．瓦器鉢。推定口径36.6、残高11.5cmを計る。口縁下に2条の沈線がめぐる。胎土はやや粗く、黒褐色を呈する。

14．瓦。裏面は粗い撚糸、部分的に直交する撚糸。外面布目。胎土は比較的細かく灰色を呈する。

15．瓦。裏面は撚糸。胎土は粗く、灰褐色を呈する。

b．2　号　溝（G2D）

本址は1号溝の南端と直交し、西へはさらに伸びる。調査された溝の長さは、6.3mにおよぶ。ほぼ東西走する。

溝幅は、東端で 1.2m、西端で62cmを計り、西へ移行するにしたがってせまくなる。深さは、1号溝の南端よりも浅くなり、70cm前後を計る。

覆土は北東から西南へ落ち込む様相を呈し、1号溝と同様の状況を呈する。

本址は1号土坑を切断している。

c．3　号　溝（G3D）

本址は2号溝の北から、権現山古墳の西南部をかすめるように孤を描いて連続する。

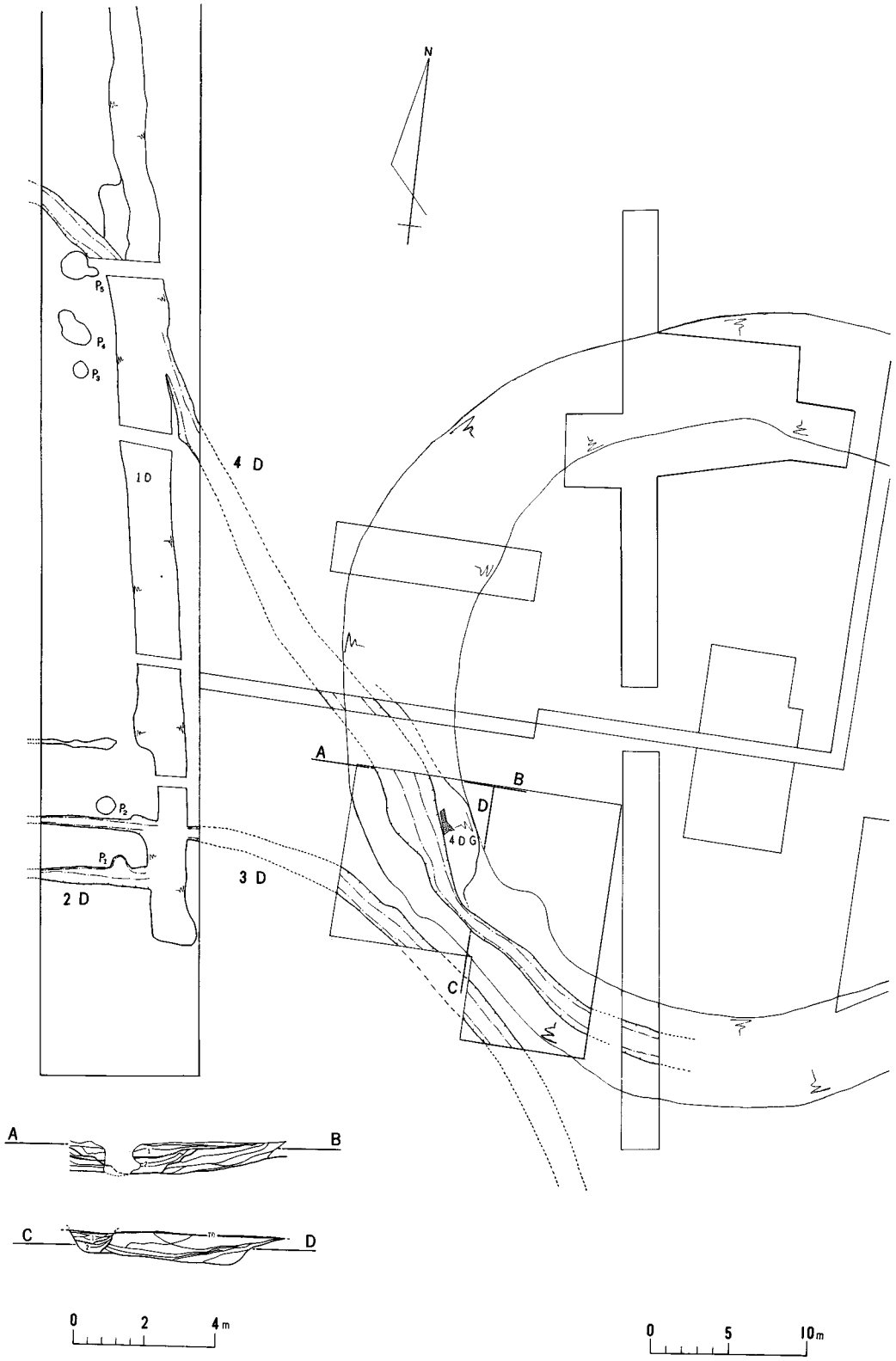
西側で細く、東南へ移行するにつれて太くなり、西端で45cm、東南端 1.6mを計る。深さは平均60cmを計る。

1号溝との前後関係は不明である。

d．4　号　溝（G4D）

本址は1号溝中央やや北寄りから、権現山古墳周溝西南部で全く重複しながら、全体でほぼ東南走する。深さ、幅とも部分によってかなり異り、深さ68～116cm、幅60～320cmを計る。

土層状況からすると、本址は、権現山古墳より新しく、1号溝よりは古いか、もしくは、同時であると思われる。権現山古墳周溝内においては、周溝内に堆積する浅間B火山灰層を切断しているが、同A火山灰は両者の上層に堆積している状況を見ることができる。また、覆土は上半が黒褐色土が主体となり（1）、下半は灰褐色粘土が主体（2）となって、各々、焼土粒、木炭、鉄分、を混入し、その状況によって多層に区分される。



第 15 図　2・3・4　号　溝

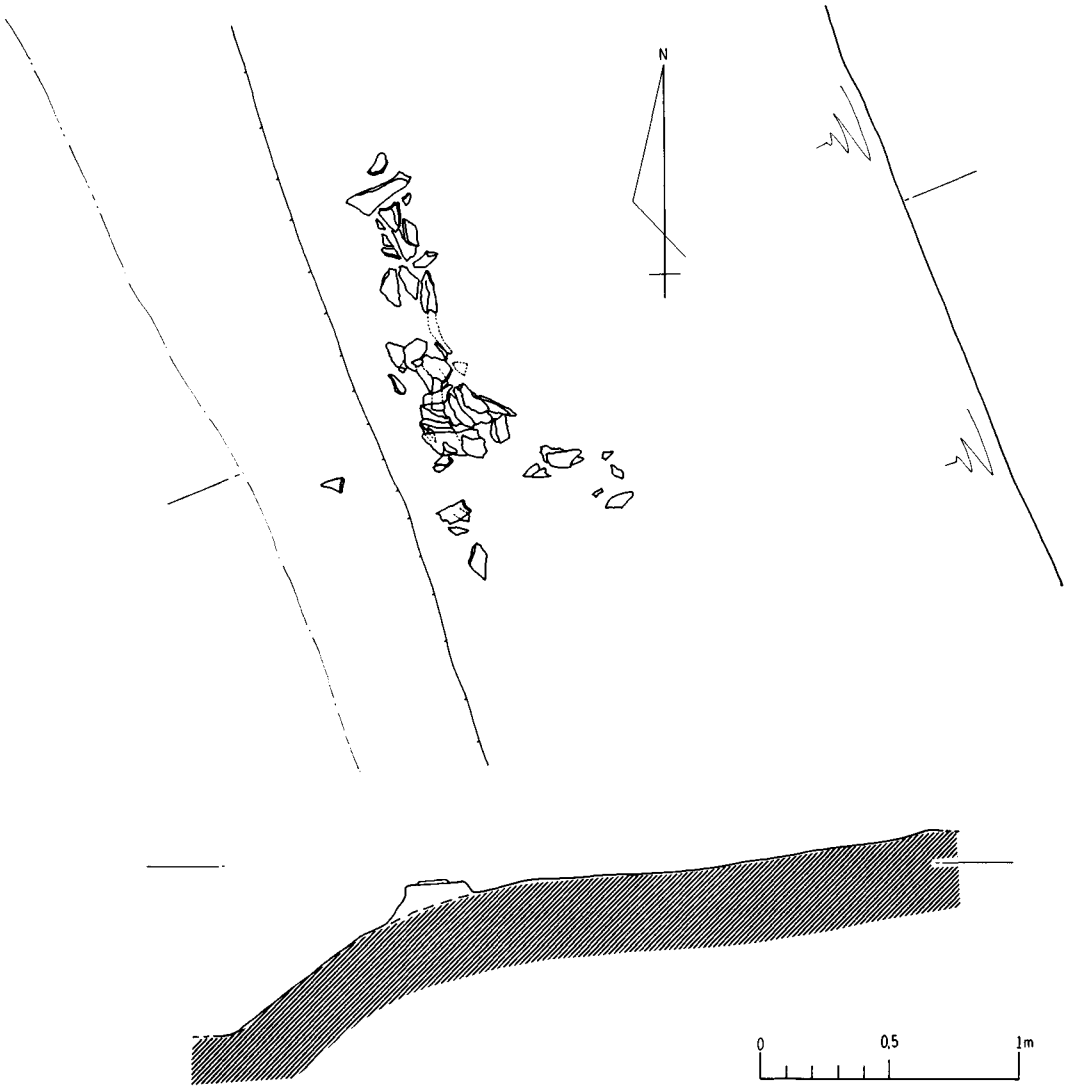
本址からは、最も溝幅を広げる。権現山古墳周溝西南部において、軽石礫、および、青石片、かわらけが出土している。これら遺物の出土した地点は、4号溝墓址の前面に当り、この区域が墓としての区域であると思われる。

e．4 号 溝 墓 址（G4DG）

本址は4号溝が、権現山古墳周溝西南部と重複する位置で、4号溝の東壁上に在る。

4号溝の壁に沿い、長軸はわずかに西へふれる。長軸は 1.7m、短軸は北で27cm、南で76cmを計り、二等辺三角形を呈する。

本址は青石（緑泥片岩）を長さ15～30cm、幅10～15cm、厚さ2～4cmに割り、平担面を上下にして、一重もしくは、二重に重ねたものであり、下面から骨片が出土している。



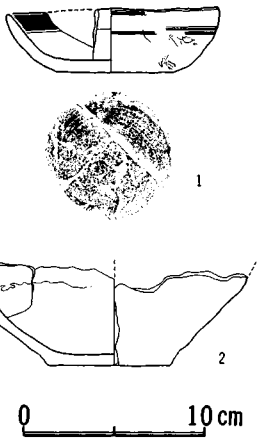
第16図 4 号 溝 墓 址

4 号 溝 出 土 遺 物

1．かわらけ杯。推定口径11.8、底径 6.3、高さ 3.7cmを計る。平底から、内湾する体部へ移行

する。口縁は斜め上方を向く。底部は右回転糸切り。外面は体部上半に、内面は全面に回転ナデが施される。外面下半は水拭きが加えられる。胎土は細かく、緑がかった淡黄白色を呈する。内面1/2、外面口縁1/3にススが付着している。

2．壺。底径 6.7、残高 5.3cmを計る。平底から、わずかに括れをもって脹らみをもつ胴部へ移行する。外面は横あるいは斜の磨き様のナデが施されている。内面は斜のナデが施されている。胎土は粗く、表面はざらつく。赤褐色を呈する。

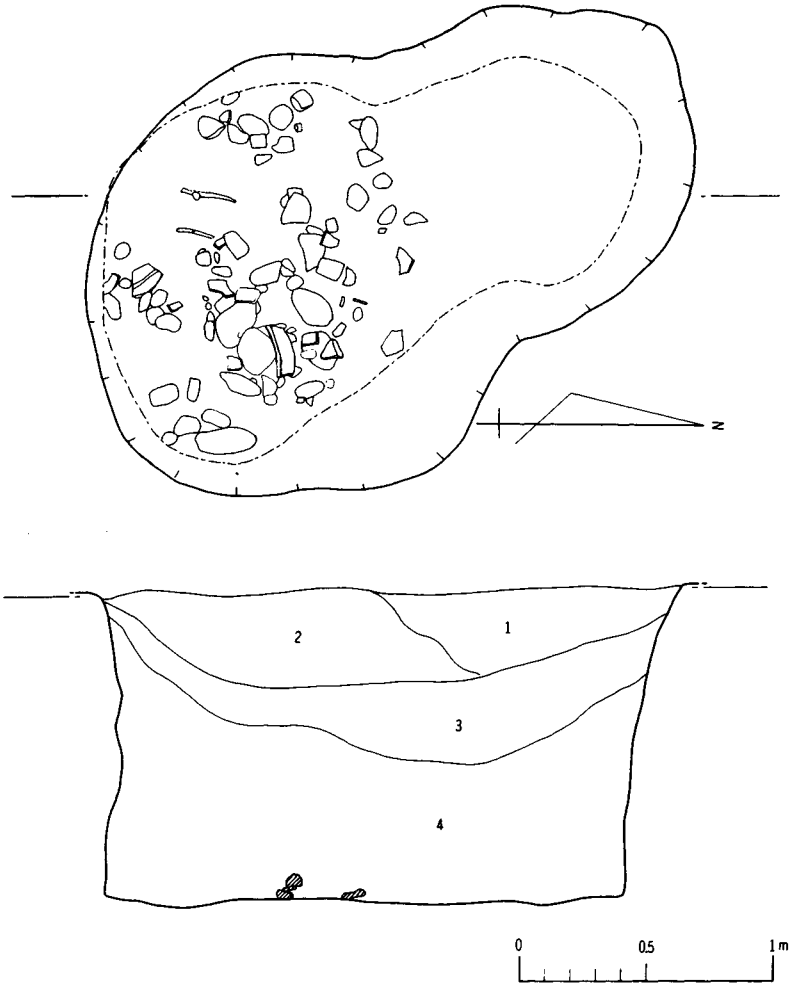


第17図　4号溝出土遺物

4．土　坑

a．1・2・3号土坑（G1P・2 P・3P）

1・2・3号はほぼ同様の規模で、90～110cmを計り、円形を呈する。深さも70cm前後を計る。底面はほぼ水平である。三土坑からの遺物出土は皆無である。三土坑共、茶褐色粘土、黒褐色土を覆土としており、層序も同様であり、ほぼ同時期の所産と考えられる。この中で1号土坑が2号溝に切断されている。



第18図
4号土坑

b．4　号　土　坑（G4P）

本址は5号土坑の南、1号溝の西に位置する。平面形態は達摩形を呈し、長軸2.65m、狭部幅1.21m、広部幅1.75mを計る。深さは1.2～1.24mであり、底面はほぼ水平である。

広幅部底面には、5×10cm～10×20cm大の礫、焼けた15×15cm大の軽石、竹、木片等が面を成している。

覆土は、上層の狭部側で、灰褐色粘土に黄褐色土が小ブロックとなって混入している（1層）。広幅部側では黄褐色粘土が大ブロック状で堆積している（2層）。中間層は泥炭含有の黒褐色土層（3層）であり、最下層は泥炭・黒褐色土・灰青褐色土の混在層（4層）である。

遺物は最下面の礫出土面から常滑焼と思われる甕が出土している。

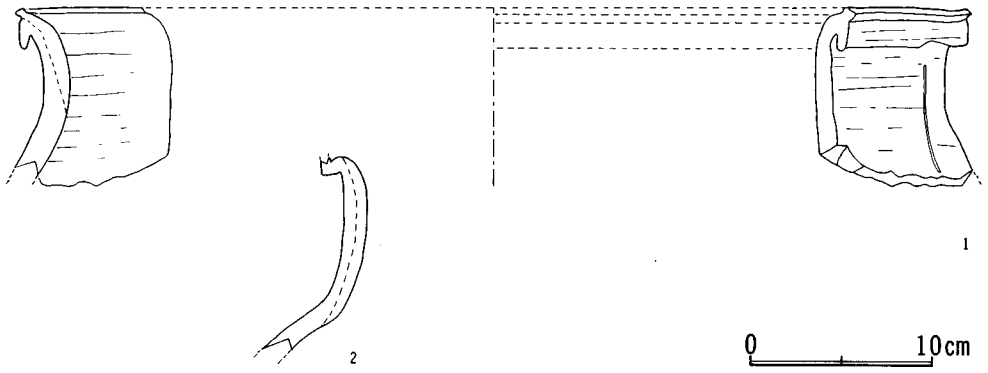
土坑の壁は、特に下面が、朱を塗ったかと思われるように朱色を呈する。

おそらく墓址であろうと思われる。

出　土　遺　物

1．常滑手・甕。推定口径53.0、残高 9.9cmを計る。口縁は外に折り返され、頂部に水平に張り出す帯を付しており、内外面に条線をもつ。ほぼ直立しており短い口縁から、わずかり張り出して肩部へ移行する。口唇部は外に折り返されており、さらに内面に幅7cmの粘土帯を貼り付け、その上縁部が外への折り返しの上面に乗り外方へ張り出す格好となる。全面に回転ナデが施されている。外面の全面および内面口唇部には釉がかかっている。胎土は粗く、黒ずんだ小豆色を呈する。

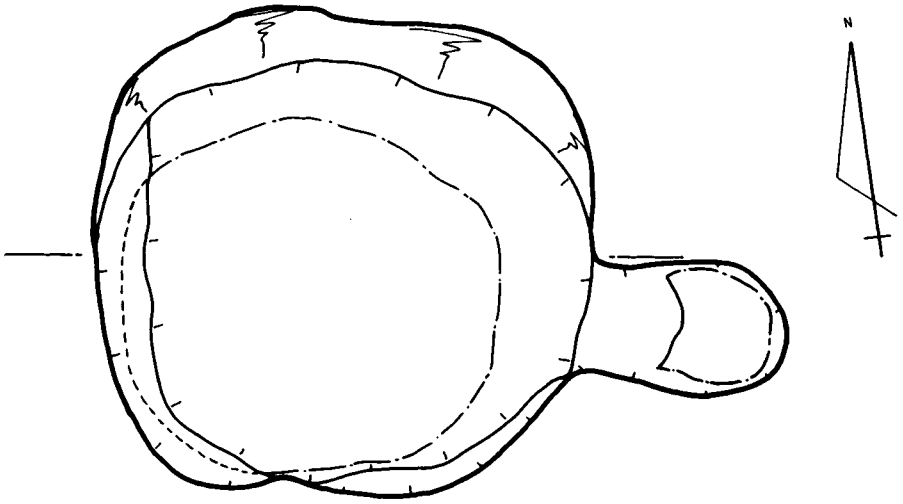
2．常滑手・甕。受け口状の口唇部から、ほぼ直立し短い口縁へ移行し、滑らかに肩部へ移行する。外面は全面に内面は口唇部のみ回転ナデ、内面の大部分は横のナデが施されている。外面の胴部には釉がかかる。口縁は2枚の粘土板を貼り合わせている。胎土は粗く、黒ずんだ小豆色を呈する。

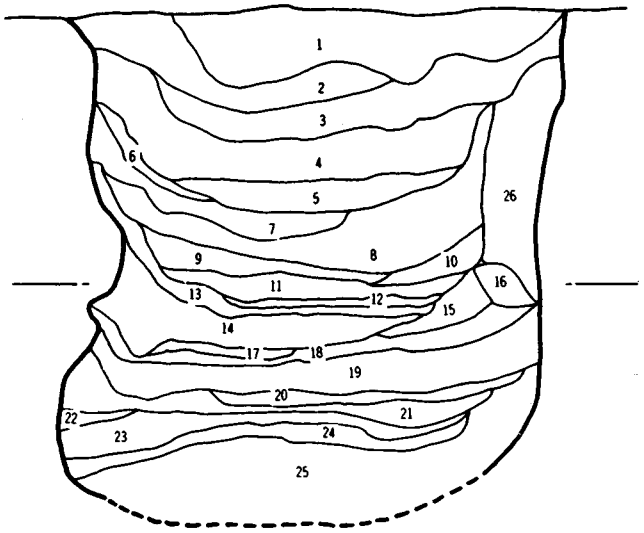


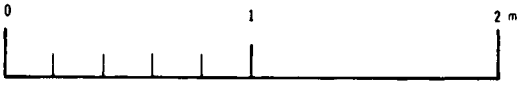
第19図　4号土坑出土遺物

c．5　号　土　坑（G5P）

本址は1号溝と4号溝の交叉する西南側に位置し、南北1.95m、東西 2.0mの、若干直線的な円形を呈する。調査した深さは 2.1mまでであるが、さらに下方へ深まるものと思われる。東壁中央







第 20 図　5　号　土　坑

上端の一部は長円形に張り出す。

覆土の上半（1～8層）は茶褐色粘土層を主体として、斑鉄、白色粘土等を含有する。中半（9～18層）は泥炭を主体として、白色粘土、砂を含有する。下半（19～24層）は灰褐色粘土を主体として、泥炭、白色粘土、青灰色粘土、砂等を含有する。最下層の25層は、よごれた灰青色粘土層であり、さらに下方へ深まるものである。東壁上部にみられる26層は本来、壁を構成していたものであろうと思われる。

13層下位から「聖宋元宝」の篆書体古銭が一枚出土している。

Ⅳ．常光院東地区の調査

常光院東地区は、県指定史跡・中条氏館跡（現常光院）の東隣接部に当り、大部分が水田、一部が畑地となっている。調査区は南北に掘削される、幅7ｍ、長さ 213ｍにおよぶ幹線排水路に限って設定した。

調査区東端に、全域にわたるトレンチを設定し、土層確認したところ、5ｍ区画14から27の65ｍの間に遺構が集中し、11から北、また27から南は土層が攪乱し、落ち込む様相を呈しており、遺構は確認されなかった。

確認された遺構は、住居址6基、土坑10基、竪穴状遺構3基、溝址4基、井戸址2基である。土坑はこの10基の他30許り確認されているが、深さがほとんど無いもの、現代に穿たれたと判断されたもの、また、例えば3号竪穴に付随する土坑群のように主たる遺構に伴うもの等は、ここでは一応、独立して土坑としてあつかっていない。なお、14～28間は調査域幅を10ｍとした。

1．住　居　址

a．1　号　住　居　址（J1H）

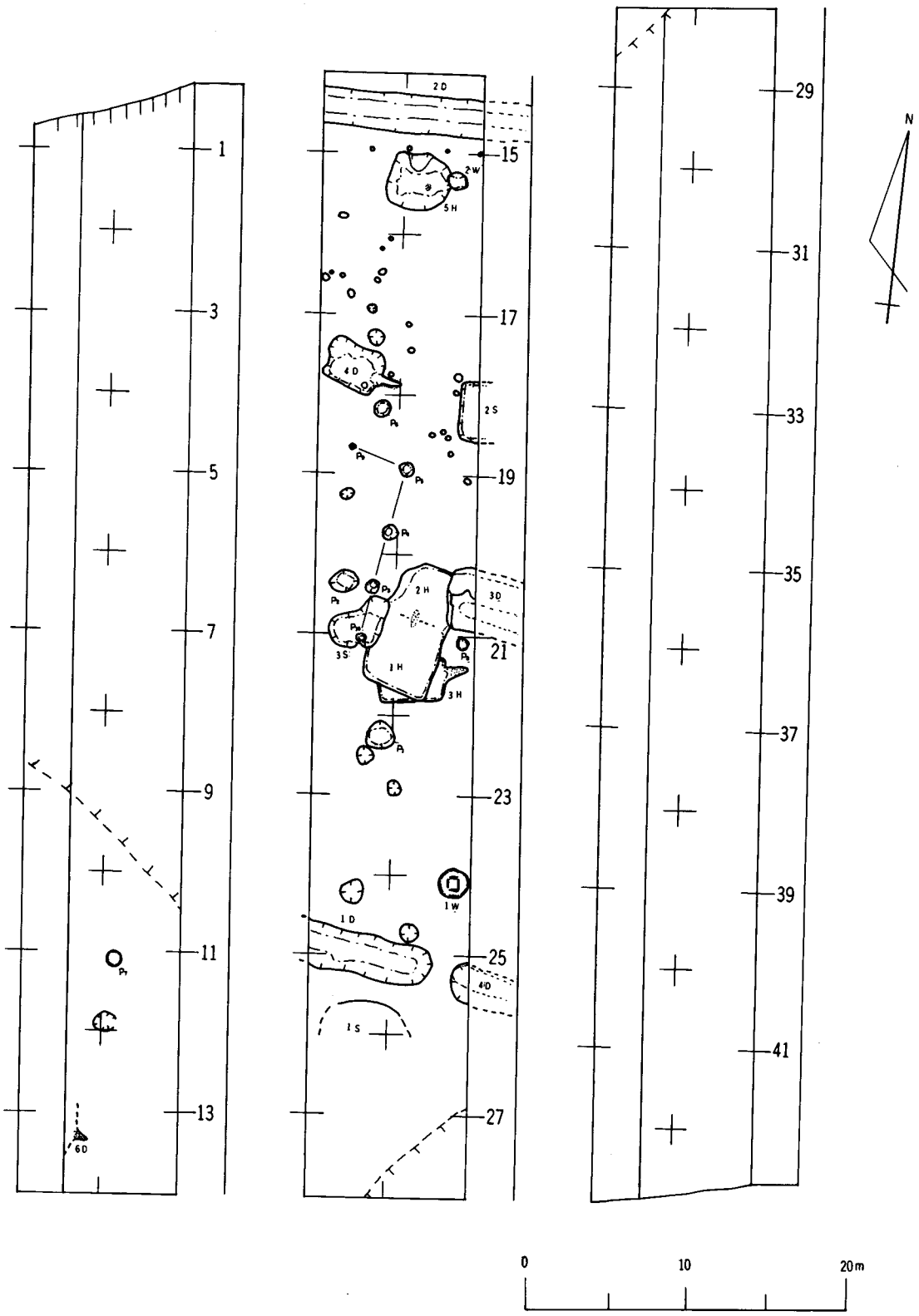
本住居址は調査区の中央部に位置している。東西 4.1ｍ、南北 4.5ｍを計り、若干南北に長いがほぼ正方形のプランを呈する。主軸方位はN－18°－Eを示す。

本住居址は北が2号住居址、東南が3号住居址、西が3号竪穴とそれぞれ重複している。

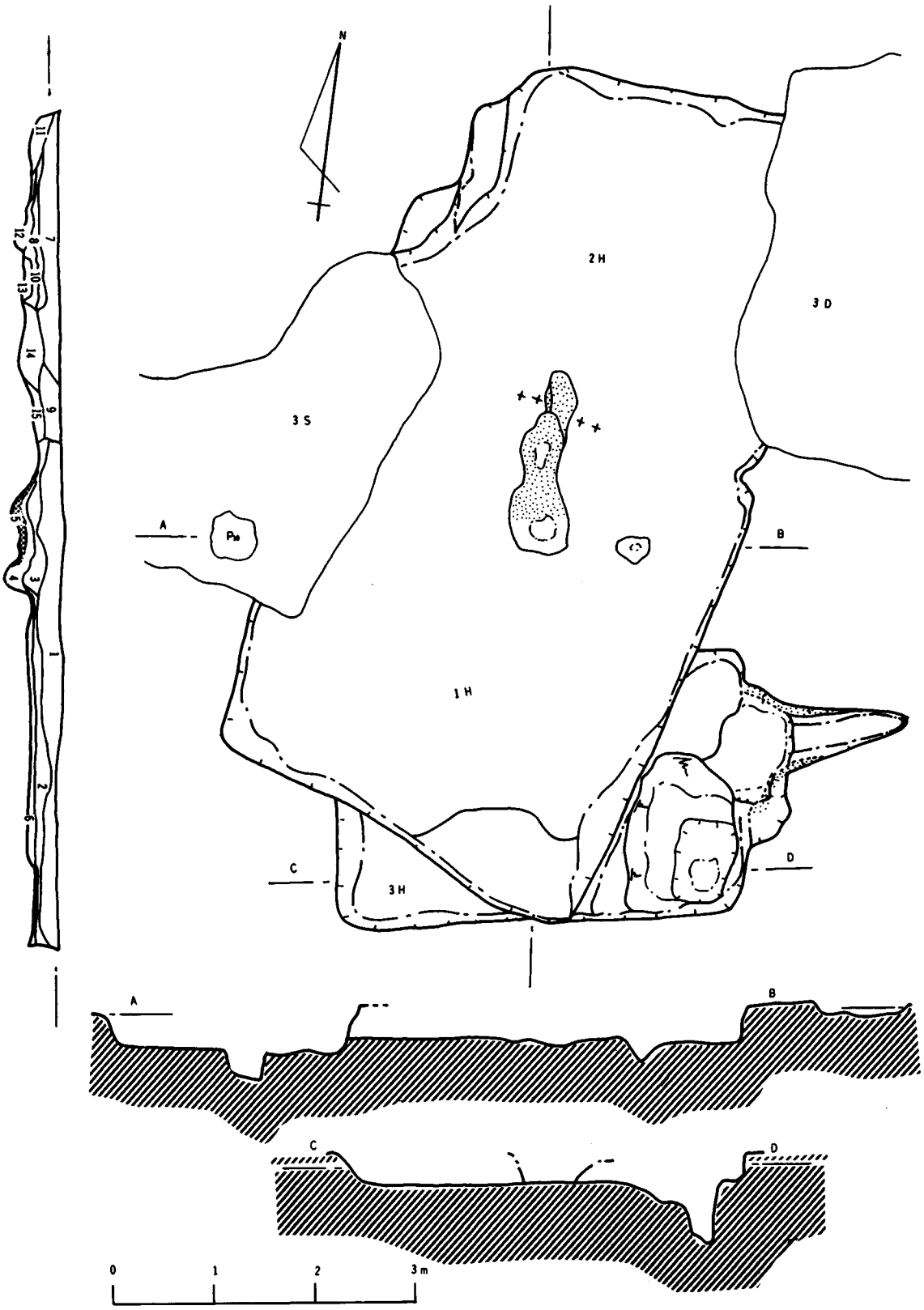
壁は部分的に傾斜をもつところはあるけれどもほぼ垂直に構築されており、壁高はほぼ25～30cmを計る。床面はほぼ水平であるが、東南隅の部分は10cm高くなっている。柱穴は北東隅と南西隅の対角線上、北東隅から 1.3ｍの位置に1本のみ確認されている。不整長円形を呈し、深さは床面から22cmを計る。

北辺の中央部床面に南北方向へ二連の窪みが在り、南の中央部から北は焼土が充塡していた。さらに北へ43cmのところまで床上に焼土が伸びていた。おそらく本住居址に伴うカマドであろうと考えられるが、原形は全く留めていない。

覆土は、全体に黄褐色粘土を主体としている。22図1層はこの純層であり、若干の土器片を含む。



第 21 図　常光院東地区遺構配置図



第22図　1・2・3　号　住　居　址

2層は黒褐色土が多量に含まれる。本住居址の覆土からの出土遺物は全て本層から出土している。3層は黄褐色粘土がブロック状を呈し、少量の黒褐色土が混在する。4層は灰、焼土粒を含有する黒褐色土であり、5層は焼土層である。6層は黄褐色粘土層であり黒褐色土、焼土粒を含有する。

本住居址の床面からの出土遺物は二点在る。一点は南壁下東隅寄りから、いま一点は、北辺中央からの出土である。前者は土師器台付甕（24図26）、後者は須恵器杯（23図2）である。他は全て2層中からの出土である。

出 土 遺 物

本址出土遺物は1～22が須恵器、23は黒色土器、24～26は土師器、27・28は須恵質の土器である。

1．杯。口径14.0、底径 6.3、高さ 3.8cmを計る。外面に不明瞭な右回りの水挽き痕を残し、口縁はつまみ上げられ外反気味となるが、器厚は減ぜず丸味をもつ。回転糸切り底、焼成良好、胎土は4mm大の礫を含むが全体に細かく、淡灰色を呈する。

2．杯。口径12.8、底径 5.5、高さ 3.4cmを計る。外面には底端部から右回りの水挽き痕が明瞭に残る。口縁はつまみ上げられ外反し、肥厚し丸味をもつ。回転糸切り底の中央部が若干凹み上底風を呈している。胎土は細かく、焼成は良好である。青灰色を呈する。

3．杯。推定口径12.6、底径 7.8、高さ 3.6cmを計る。外面に右回りの水挽き痕がやや不明瞭に残る。体部はやや内湾しながら外傾し、口縁部は直線的に外傾しやや肥厚する。回転糸切り底、胎土は密でありわずかに白色針状物質を含む。焼成は良好で青灰色を呈する。

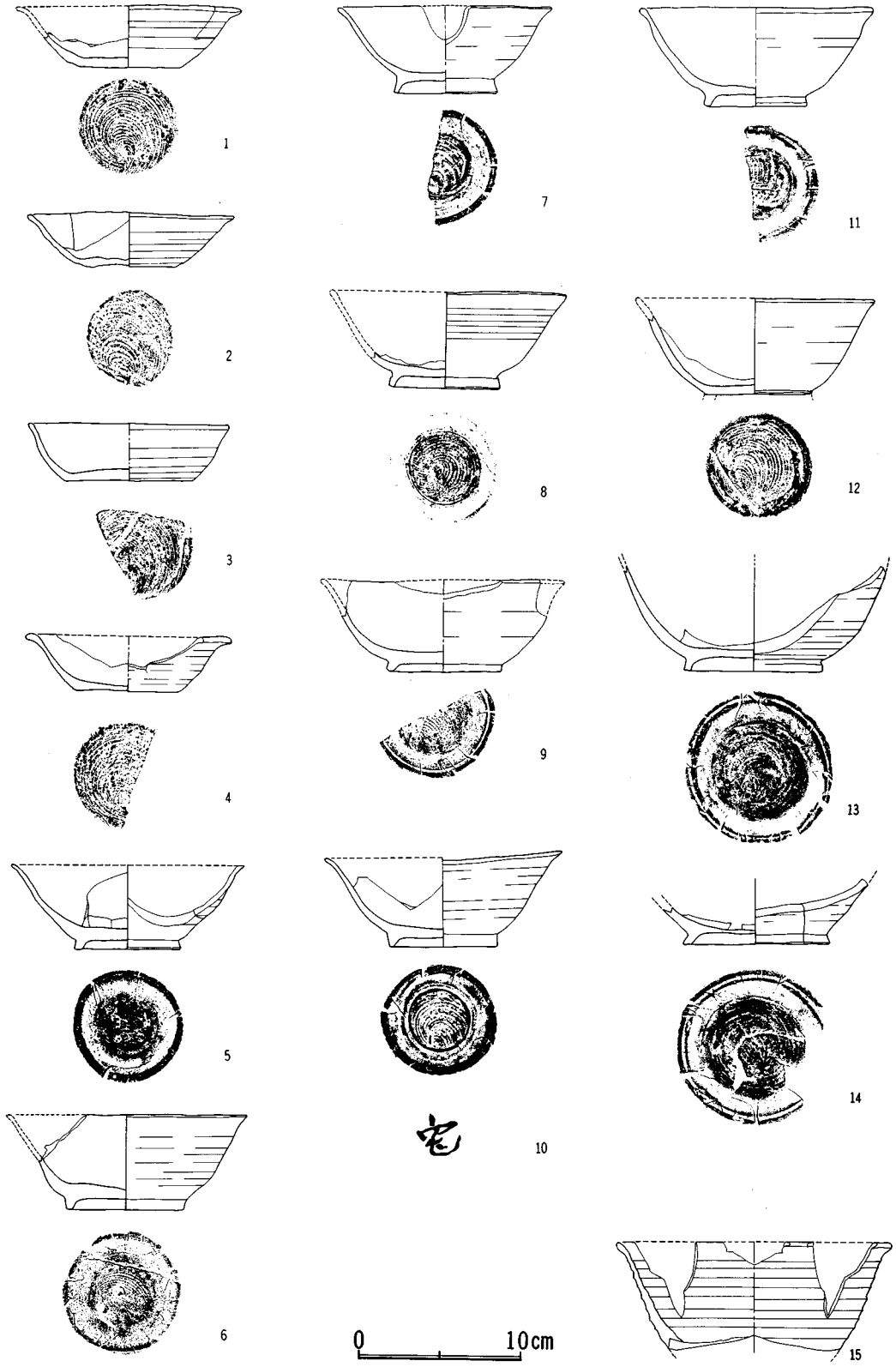
4．杯。口径12.8、底径 6.4、高さ 3.6cmを計る。外面には不明瞭な右回りの水挽き痕を残し、口縁はつまみ上げられて大きく外反し肥厚する。右回転糸切り底の中央部が窪み、上底風を呈している。胎土は粗く多孔質である。淡灰色を呈する。

5．高台椀。口径14.5、底径 6.7、高台高 0.6、全高 5.4cmを計る。外面は明瞭な右回りの水挽き痕を残し、口縁はつまみ上げられ外反する。高台は断面が若干の丸味をもった矩形を呈する付け高台である。高台から上 1.2cm幅は、先に記した水挽の後ナデを施しその痕跡を消している。胎土は細かいが生焼けで淡黄色、黒褐色、赤褐色等の色調を呈する。

6．高台椀。口径14.9、底径 7.3、高台高 0.7、全高 5.9cmを計る。外面はやや不明瞭な右回転の水挽き痕を残す。体部はやや内湾しつつ外傾し、口縁は若干つまみ上げられて外反する。高台は付け高台であり先端をやや細く仕上げ、体部下位、糸切り底縁辺部は1cm幅をナデつけている。胎土は細かいが生焼けで灰褐色を呈する。

7．高台椀。推定口径13.3、推定底径 6.4、高さ 5.5cmを計る。外面の水挽き痕は不明瞭でおおむね平になる。体部は内湾しつつ外傾し、口縁はつまみ上げられ外反する。高台は付け高台であり断面矩形を呈し細く仕上げられている。高台の接合に伴い体部下位及び糸切り底縁辺部に幅1cmのナデが施されている。胎土は細かいが焼成は良好で暗灰色を呈する。

8．高台椀。口径14.7、底径 6.9、高台高 0.9、全高 6.0cmを計る。体部は下位に大きくふくらみをもち直線的に外傾する。口縁はわずかに外反し肥厚する。外面は上半に右回りの水挽き痕を残すが下半は高台の接合に伴う回転ナデが施されており、高台の上位で段を有する。胎土は粗いが焼



第 23 図　1号住居址出土遺物 (1)

成は良好であり淡灰色を呈する。

9．高台椀。推定口径15.2、底径 7.2、高台高 0.5、全高 5.8cmを計る。体部は内湾しつつ外傾し、口縁は外反する。外面は全体にナデが施され、水挽き痕を消している。底部は右回りの回転糸切りで高台は断面U字形の付け高台である。胎土は粗いが焼成は良好であり、灰白色を呈する。

10．高台椀。口径14.9、底径 6.8、高台高 0.8、全高 5.9cmを計る。体部は内湾しつつ外傾し、口縁はゆるやかに外反する。体部は右回りの水挽き痕が残る。高台は付け高台で先端を細く仕上げている。糸切り底に墨書が施されている。胎土は細かいが若干の礫を含む。焼成は不良であり、ススけた部分もみられる。全体に淡灰色を呈する。

11．高台椀。推定口径14.5、底径 6.5、高台高 0.7、全高 6.2cmを計る。体部は内湾しつつ外傾し、口縁はつまみ上げられており、口縁直下でくびれ外反する。外面は右回りの水挽き痕が残っているが、高台の付着に伴う回転ナデ、その後の縦のナデによって不明瞭になっている。高台は断面ほぼ矩形を呈する。胎土はやや粗く、生焼けであり赤味を帯びた淡黄色を呈する。

12．高台椀。口径15.0、底径 6.7、高さ 6.0cmを計る。体部は内湾しつつ外傾し口縁はわずかに外反する。外面は右回りの水挽き後、ナデを施している。底部右回転糸切りの縁辺部に剥離痕があり、高台のついていた可能性がある。胎土はやや粗いが焼成は良好であり、淡灰色を呈する。

13．高台椀。底径 8.6、残存高 6.6cmを計る。体部はふくらみをもって口縁に移行する。高台は特に糸切り底側に、ていねいにナデつけられている。体部外面は右回転の水挽き痕を残す。高台は両面からナデられており中央が凹になる。胎土はやや粗い。焼成は良好であるが、外面は黒褐色、内面は淡灰色を呈する。

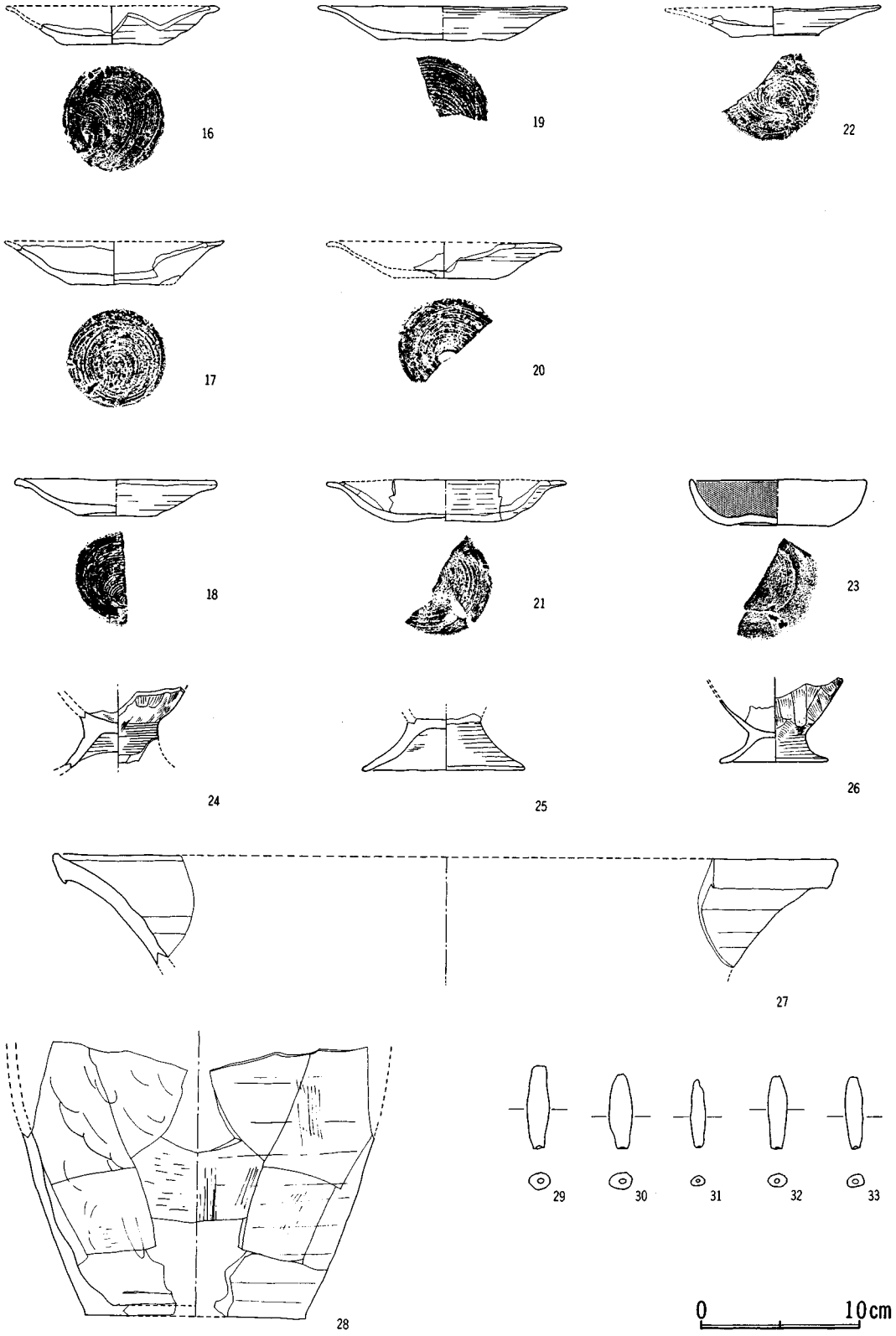
14．高台椀。底径 9.1、残存高 4.1cmを計る。体部はふくらみをもって上位に移行し、外面に右回転の水挽き痕を残す。高台は付け高台であり、下面中央が凹状になっている。胎土は粗い。焼成は良好であるが、外面は底部を除いて黒褐色、底部及び内面は淡灰色を呈する。

15．高台椀。推定口径17.2、残存高 6.6cmを計る。体部は内湾しつつ外傾し、口縁部はつまみ上げられて外反する。体部は内外面共、右回転の明瞭な水挽き痕を残す。胎土は細かいが小礫を含む。生焼けであるが、外面は黒褐色を呈しており、内面は赤褐色がかった淡灰色を呈する。

16．皿。推定口径13.6、底径 6.5、高さ 2.5cmを計る。体部はわずかに内湾しつつ外傾し、口縁部はつまみ上げられて外反する。回転糸切り底で、体部外面は右回転の水挽き痕を残す。体部下半はナデが加えられ底端に及ぶ。胎土は粗いが焼成は良好であり青灰色を呈する。

17．皿。推定口径14.0、底径 5.7、高さ 2.8cmを計る。体部はわずかに内湾しつつ外傾し、口縁部はつまみ上げられて外反する。右回りの回転糸切り底の周辺はヘラナデが施されている。体部は全面にナデが施されている。胎土は粗いが焼成は良好であり青灰色を呈する。

18．皿。推定口径12.9、推定底径 5.0、高さ 2.4cmを計る。体部はわずかに内湾しつつ外傾し、口縁部はつまみ上げられて外反し、肥厚する。体部外面は右回転の水挽き痕を残すが、下半部は部分的にナデが加えられているところもある。底は回転糸切りで若干上底風になっている。胎土は粗いが、焼成は良好であり青灰色を呈する。



第 24 図　1号住居址出土遺物 (2)

19．皿。推定口径15.8、推定底径 8.0、高さ 2.2cmを計る。体部はわずかに内湾しつつ外傾し、口縁部はつまみ上げられて外反する。体部外面は右回転の水挽き痕を残す。底は回転糸切りである。胎土は粗いが焼成は良好であり青灰色を呈する。

20．皿。推定口径15.0、推定底径 6.7、高さ 2.4cmを計る。体部はわずかに内湾しつつ外傾し、口縁部はつまみ上げられて外反する。体部外面は右回転の水挽き痕を残すが下半分はナデが加えられ不明瞭となっている。回転糸切り底であり、中央が若干窪み上底風になっている。胎土は粗いが焼成は良好であり青灰色を呈する。

21．皿。推定口径15.3、推定底径 7.0、高さ 2.7cmを計る。体部は内湾しつつ外傾し、口縁はつまみ上げられ外反し肥厚している。体部外面は右回転の水挽き痕を残すが下半はナデが加えられている。底部は中央が窪み上げ底状を呈する回転糸切り底である。胎土は粗く生焼けであり赤褐色が相克する。

22．皿。推定口径13.7、底径 5.7、高さ 2.0cmを計る。体部はゆるやかな反りをもって外傾し、口縁はつまみ上げられ、より外反している。外面は右回りの水挽き痕が残る。底部は回転糸切りの後ナデを施し、体部との境に段をつくり出している。胎土は粗いが焼成は良好であり、青灰色を呈する。

23．杯。推定口径11.5、推定径底 6.8、高さ 3.0cmを計る。上げ底風の底部から、下半が強い丸味をもち上半がほぼ直立する体部へ移行する。底部は二度の回転糸切りがみられ、体部外面の全面および底部周辺はナデが施されている。内面は丁寧に磨かれ黒色処理されている。胎土は細かく、外面黄白色、内面および外面の口縁部は黒色を呈する。

24．台付甕。接合部径4.6、残高5.0cmを計る。台部は低く、外方に大きく張り出す胴部へ移行する。体部外面は縦のヘラ削り、括れ部および袖部は回転ナデ、括れ部の上位は部分的にナデ、台部内面は回転ナデ、胴部内面は横のナデが施されている。胎土はやや粗く、砂粒を多量に含む。赤褐色を呈するが、外面は黒褐色を帯びている。

25．台付甕。底径10.4、括れ径 4.8、残高 3.6cmを計る。湾曲して外方に大きく開き低い台である。脚外面は回転ナデ、内面は横のナデが施されている。胎土は細かいが、砂粒を多く含む。赤褐色を呈する。

26．台付甕。底径 7.0、括れ径 3.5、残高 5.3cmを計る。低く湾曲して外方に開く脚から、わずかに内湾しながら外傾する体部へ移行する。脚外面は回転ナデ、胴部は縦のヘラ削り、脚との接合部にはナデが加えられる。内面は全面にナデが施されている。胎土は粗く、赤褐色および黒褐色を呈する。

27．甕。推定口径50.0、残高 7.0cmを計る。大きく外反する口縁で、外面は上下に張り出す凸帯をもつ。全面に回転ナデが施されている。胎土は粗く、内外面とも黒青灰色を呈する。

28．壺。推定底径14.0、残高17.2cmを計る。底部はナデによって整形されている。体部外面は横のナデの後、部分的に縦のナデを加えている。内面は横のナデの後、指頭による押圧が加えられる。胎土は粗い。黒ずんだ黒灰色を呈する。

29～33．土錘。長さ 4.5～ 5.2、太さ 0.9～ 1.3cmを計る。

b．2 号 住 居 址（J 2 H）

本住居址は、南を1号住居址、東を3号溝、西南を3号竪穴と重復する位置に在る。南北 3.5m、東西 3.4mを計り、ほぼ正方形を呈すると考えられるが、西壁の土層が不安定であり確実なものでない。

壁は、東南隅、北辺、北西隅が確認されており、それらは、傾斜を若干有する。高さは25cm前後を計る。床面は固いが、かなり凹凸がはげしい。

覆土は全てに灰もしくは、焼土を含有している。22図7層は灰褐色土層で土器細片を多く含む。8層は黄褐色粘土が主体となる。9～15層は灰もしくは焼土のいずれか、あるいは両者を含有する量の多少で区分されており9→15の順で量が増大している。

本住居址は、壁の乱雑さ、床面の不安定さから住居址とするのは当らない可能性もあることを記しておかなくてはならないであろうが、床面が固く、本址床面を踏み固め、使用されたことは明らかであるので、ここでは一応住居址として取り扱うこととした。また覆土の全てに焼土あるいは灰が含まれていることについては、この二者に規則的な関係がみられず、一概に火災にあったとするものでない。

本住居址出土遺物は全て床面上からの出土である。

1号住居址との前後関係は土層の上からは明らかでない。両住居址の土層は大きく異るがその分布範囲は丁度両住居址のプラン通りであり一方がいま一方を破壊している部分は見うけられない。1号住居址のカマドについても、本址によってカマドが破壊されたものとは考えられない。

出 土 遺 物

1．須恵杯。口径12.3、底径 6.2、高さ 4.2cmを計る。平底から丸みを持った稜を作り内湾しながら外傾する体部へ至る。口縁はわずかに外反する。底部は右回転糸切り、底から5mm上方に糸切りを失敗した箇所がありそこから底部周辺にかけてナデを施している。その結果体部へ移行する稜が丸みを持つ。体部は水挽き痕が残る。胎土は細かく白色針状物質を多量に含む。灰褐色を呈する。

2．灰釉長頸壺。底径 8.8、残高16.9cmを計る。低く幅広で若干外方に開く高台からわずかに内湾しながら外傾する体部へ移行する。比較的長めの体部であり最大径は上位に有する。肩は丸みをもって頸部に至る。最大径を有する位置から上位には釉がかかる。体部下位は回転削り、それ上位は水挽き痕が残る。頸部から2cm下位に接合線がみられる。体部中位には水挽か痕が2条残存している。内面の頸部から接合面やや下方まで横のナデ付けが施されている。胎土は細かく灰白色を呈する。

3．土師器甕。推定口径23.0、残高10.9cmを計る。口縁は2段に造り出され、下位は外反するが上半は内湾ぎみに外傾する。胴部は緩やかな脹らみをもって中位に移行してゆく。口縁は2段に横デされている。胴部上半は横の削りで下位にしたがって斜の削りが施されている。内面は横及び斜のナデが施されている。胎土は細かく茶褐色を呈する。

4．土師器台付甕。口径15.0、底径10.2、高さ17.5cmを計る。低く外方に広がる脚部からほとん

ど直線的に外傾する体部へ移行する。最大径は胴部上位に有しいわゆる肩をもつ体形となる。口縁は短かく外反する。口縁部は横ナデ、その後胴部上半に横のヘラ削り、中位から下位には縦のヘラ削りが施されている。脚部は横ナデ、脚胴部の接合部は部分的にナデが施されている。胴部内面は横のナデが施されている。胎土は比較的細かく、オレンジ色を主体として部分的に吸炭して黒色をおびている。内面は汚れた黒褐色を呈する。

5．土錘。

c．3 号 住 居 址（J 3 H）

本住居址は1号住居址の南に位置し、北辺および床面の大部分を1号住居址に切られている。

東西 4.1m、南北 2.6mを計り、隅が若干丸味を有する長方形を呈する。主軸方向はN－85°－Eを示す。

壁はほぼ垂直であるが、西壁はかなり傾斜がある。全体に約30cm程の高さを計る。床面はほぼ水平である。柱穴は1本も確認されていない。

東南隅に南北 146cm、東西 108cmの丸味を帯びた長方形の土坑がある。北および西に深さ20cmのところで段を有している。最深部は床面から－62cmを計る。貯蔵穴であろう。

カマドは東壁の北東隅寄りに設置されている。壁面から 160cm凸形に張り出し、竪穴床面に半円形の窪み（焚口部の一部深さ－7cm）をもち、燃焼部は竪穴外に在る。煙道部への移行点には段を有し、奥壁に向って若干上昇しながらもほぼ水平面をもって移行し、奥壁でほぼ直角に折れる。燃焼部及び煙道部の燃焼部寄り部分の壁は焼土化している。

覆土は、1号住居址と同様、黄褐色粘土層が主体となっており、当初1号住居址との見分がつかなかった。しかし、1号住居址の2層に多量の黒褐色土が見られた時点で本住居址と区別された。1号住居址のII層と同位に本住居址では黄褐色粘土（上層とは若干異り、わずかの焼土粒を含む）が依然としてみられた。

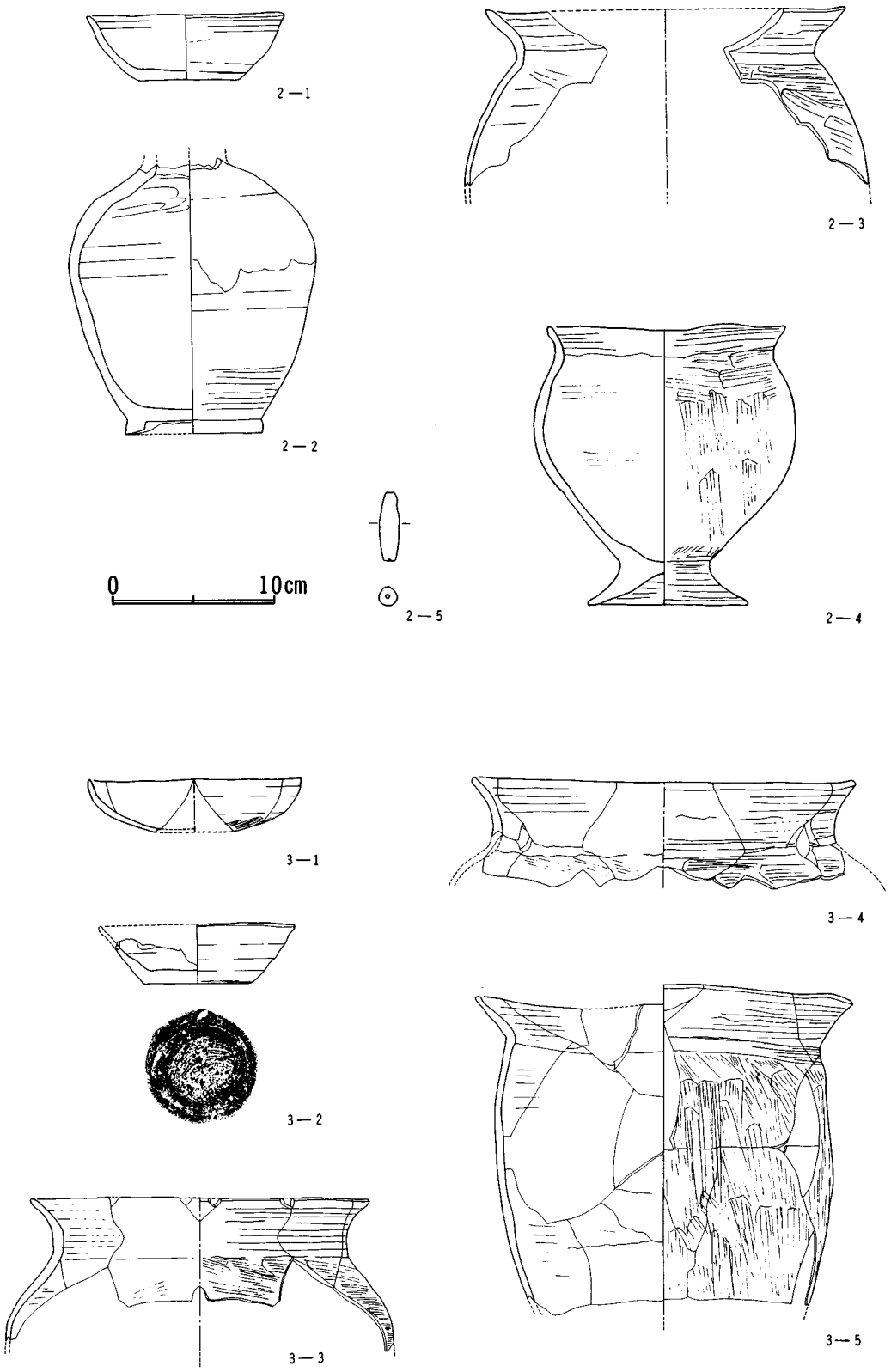
出土遺物は、貯蔵穴底面から須恵杯（25図2）、カマド内から土師器甕三個体（25図3、4、5）である。

出 土 遺 物

1．土師器杯。推定口径13.2、高さ 3.3cmを計る。丸底から内湾する体部へ移行する口縁はほぼ直立する。体部上半は横ナデ、下半は削りが施されている。内面はナデが施されている。胎土は細かく、赤褐色を呈する。

2．須恵器杯。推定口径12.2、底径 6.5、高さ 3.9cmを計る。平底の底部から外傾する体部へ移行する。口縁直下は最も器肉を減ずる。底部は右回転糸切りの後、周辺部及び体部下端にヘラ削りを加えている。体部及び口縁は水挽き痕をそのまま残す。胎土はやや粗く、白色砂粒を多量に含み白色針状物質もわずかに含む。灰褐色を呈する。

3．土師器甕。推定口径21.0、残高 9.5cmを計る。口縁部は下半が緩やかに外反し、口唇はより大きく外反する。わずかな脹らみをもつ胴部へ移行する。口縁は2回横ナデされている。胴部は横



第 25 図　2・3号住居址出土遺物

の削りが施されている。内面は横のナデが施されている。胎土はやや粗く赤褐色を呈する。

4．土師器甕。。推定口径23.9、残高 6.8cmを計る。口縁部は下半がほぼ直立し上半が外反する。しかしその移行は滑らかである。胴部は肩が大きく張り出す形態を取るものと思われる。口縁は2度にわたる横ナデが施されている。胴部は横の削りが施されている。胎土はやや粗く赤褐色を呈する。

5．土師器甕。口径23.4、残高20.4cmを計る。大きく外傾する口縁からわずかに脹らみをもつ胴部へ移行する。最大径を口縁にもつ。口縁は横ナデが施され、胴部の削りの後、さらに横ナデを加えている。胴部の最上位は斜の削りが施されている。 内面は横のナデが施されている。胎土はやや粗く淡黄褐色を主体として部分的に赤褐色を呈する。吸炭部分は黒褐色を呈する。

d．4 号 住 居 址（J 4 H）

本住居址は調査区の中央やや北寄り、5号住居址の西南部に位置する。

本住居址はカマド、東南両壁の南部、南壁は確認されたが、北半は土層が全く不明瞭であり、プランの確認はできなかった。計測可能な部分の値は、東西 3.3m、南北2.62mの長方形を示す。主軸方位はN -105°- Eを示す。

確認された壁はほぼ垂直で、60cmの高さをもつ。床面はほぼ水平であるが、あまり固くはない。

貯蔵穴は堅穴南東隅に在り、径40cmの不整円形を呈する。深さは40cmを計る。底面から須恵器椀（27図5、6、7）土師器杯（27図1）が入子状で出土している。

カマドは東壁ほぼ中央に設置されている。燃焼部、煙道部は全て堅穴外へ張り出し、全体で凸形を呈する。燃焼部幅約70cm、奥行45cm、煙道部幅25cm、奥行 125cmを計る。形態規模共3号住居址カマドと同様である。窪んだ燃焼部から段をもって、ほぼ水平な煙道部へ移行し、奥壁へ至って垂直に上る。

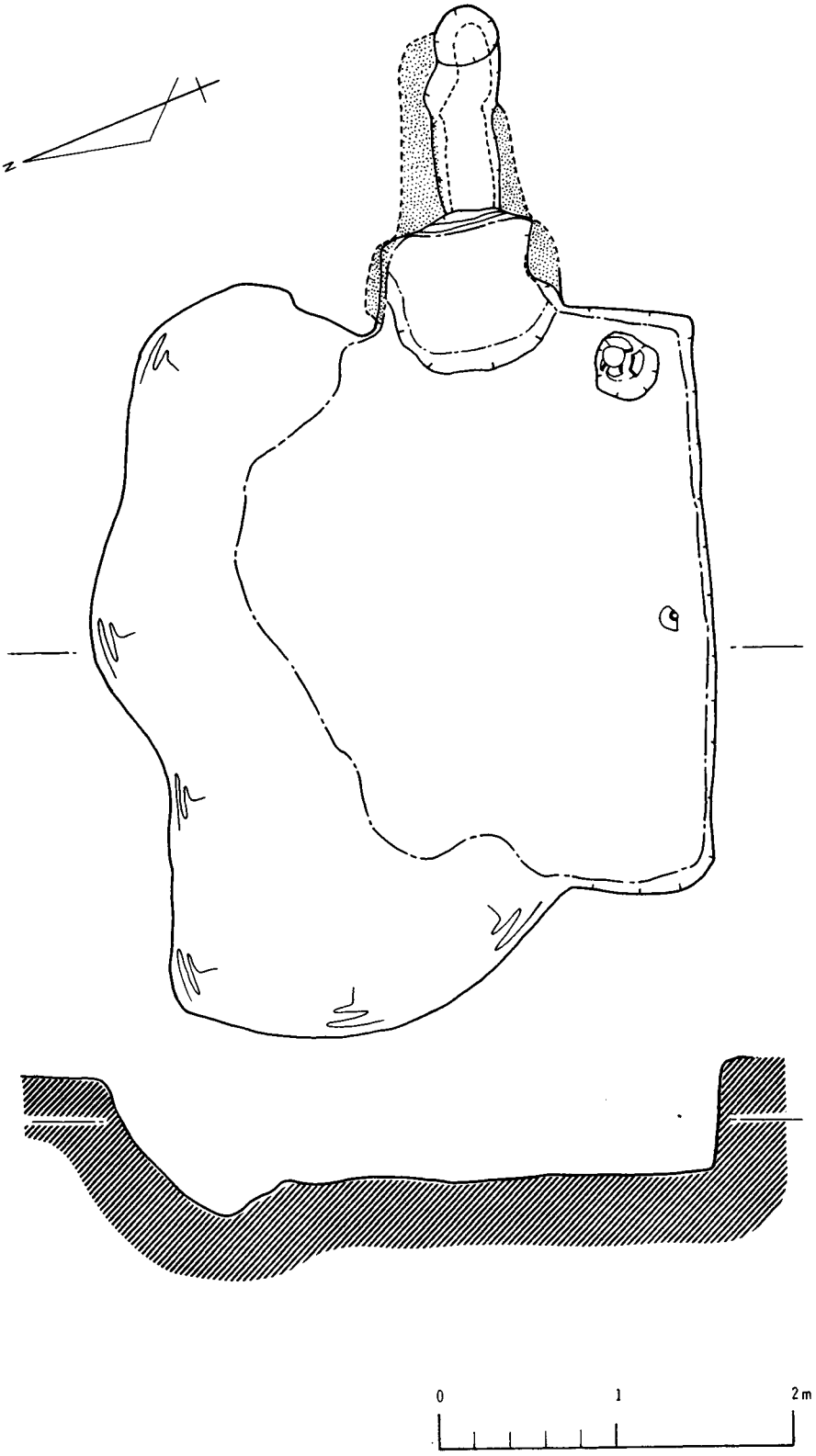
本住居址の出土遺物は、先に記した貯蔵穴内の一括出土遺物の他は全て、1次埋没土中の出土である。

出 土 遺 物

1．土師器杯。口径12.3、底径 7.8、高さ 3.2cmを計る。若干丸みを帯びる底部から外傾する体部へ移行する。口縁は斜上方を向く。内面底部は凹凸が激しい。底部はヘラ削り、体部下半はナデ体部上半は横ナデを施している。内面は全面にナデが施されている体部中央には上半の横ナデに伴う段差を生じている。整形は体部下半のナデ、上半の横ナデ、底部の削りの順である。胎土は細かく茶褐色、外面の一部は吸炭している。

2．土師器杯。口径14.6、底径 6.0、高さ 4.0cmを計る。切り残しの段を有する平底から脹らみをもつ体部へ移行する。口縁は外反する。底部は右回転糸切り、体部は内外面の上半に水挽き痕を明瞭に残し下半部はナデが加えられている。胎土はやや粗く淡黄桃褐色を呈する。土師器の概念とは多少異なり土師質と呼ばなければならないかもしれない。

3．須恵器椀。底径 5.8、残高 2.2cmを計る。切り残しをもつ平底からほぼ直線的に外傾する体部へ移行する。底部は左回転糸切り、体部は水挽きの後ナデを加えている。胎土は粗く、外面茶褐



第 26 図　4　号　住　居　址

色を呈するが、しまりが良く須恵器の生焼けと思われる。

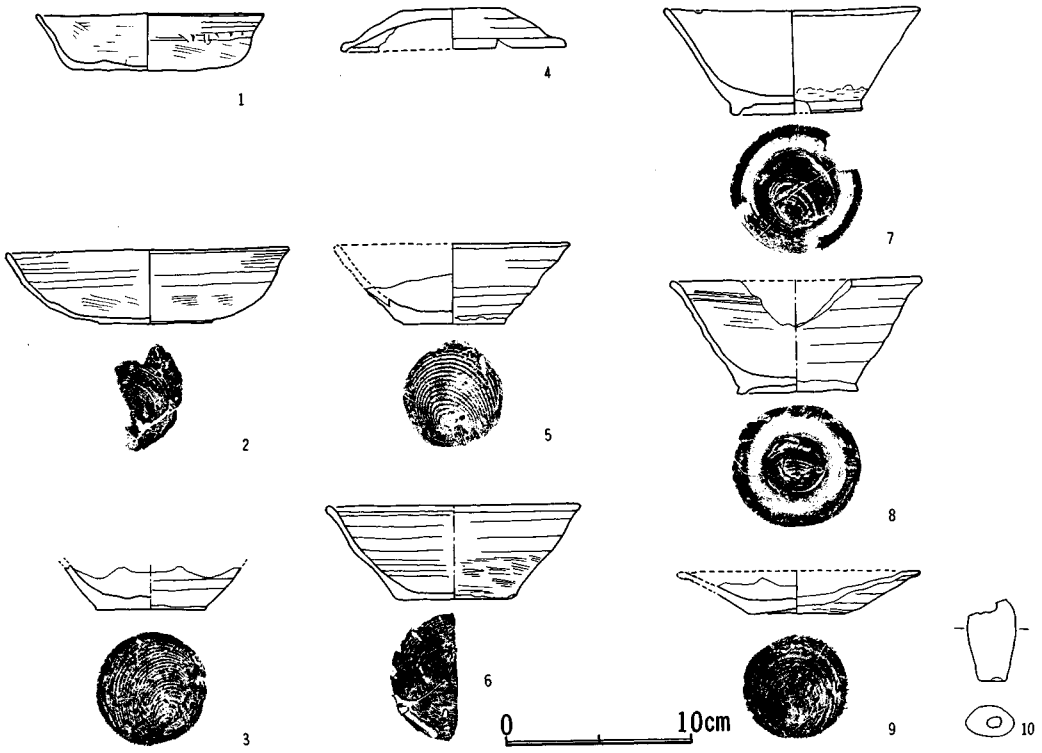
4．土師質蓋。口径12.3、天径 5.9、高さ 2.2cmを計る。平担な天井から外傾する体部へ移行する。口縁は大きく外反し、内面口唇直下に段をもつ。天井は一定方向のヘラ削り、体部は水挽き痕を残す。胎土は粗く、砂粒を多量に含む。汚れた黄褐色を呈する。

5．須恵器椀。口径12.8、底径 5.5、高さ 4.5cmを計る。平底から若干脹らみをもってほぼ直線的に外傾する体部へ移行する。口縁は体部と同一軌跡上にあって斜め上方を向く。底部は右回転糸切り、体部は水挽き痕をそのまま残す。胎土はやや粗く、灰黒色を呈する。

6．須恵器椀。口径13.8、底径6.6、高さ5.1cmを計る。平底からわずかに内湾する体部へ移行する。口縁は若干外反する。底部は右回転糸切り、体部は内外面に水挽き痕を明瞭に残す。体部外面下位はナデが加わる。胎土は粗く、灰白色を基盤としているが上半は灰黒色を帯びている。

7．須恵器高台椀。口径13.6、底径 6.8、高さ 5.8cmを計る。太く若干外方に広がる高台で、直線的に外傾する体部から口縁に移行する。口縁はわずかに外反するがほぼ体部と同一軌跡上にある。全体にナデが加えられわずかに水挽き痕を残しているのみである。胎土はやや粗く、よごれた黄褐色を基盤としているが、部分的に灰色をしている。

8．須恵器高台椀。推定口径13.7、底径 6.7、高さ 6.2cmを計る。雑につけられた若干外方に広がる低い高台から直線的に外傾する体部へ移行する。口縁は肥厚して外反する。底部右回転糸切り、体部外面は水挽き痕を明瞭に残す。内面はナデが加えられ滑らかになっている。胎土は粗く、よごれた灰白色を呈する。



第 27 図　4 号住居址出土遺物

9．須恵器皿。推定口径13.5、底径 5.2、高さ 2.3cmを計る。若干上げ底ぎみの底部から大きく外傾する体部へ移行する。口縁は更に外反してほぼ水平になる。底部右回転糸切り、体部及び口縁は水挽き痕が残る。体部下端はナデが加えられる。胎土は若干粗く、体部及び底部は黒色、口縁は灰色を呈する。

10．土錘。大形である。

e．5 号 住 居 址（J 5 H）

本住居址は調査区の北部、2号溝の南に位置する。

本住居址は、基盤層と覆土が共に若干緑色味を帯びた黄褐色粘土層であり、わずかに覆土に川砂の細かい粒子と、木炭粒が含有されているにすぎない。両者の区別が判明した部分は、竪穴の中央部と思われる部分のみで、縁辺部はほとんど差がつかなかった。重複している2号井戸址の基盤層及び、2本のトレンチで確認を計ったが、ほとんど判明しなかった。

これらの結果、最大で5ｍの範囲内で、正方形を呈するであろうと考えられるに至った。床面中央東寄りで検出された炉は、東西42cm、南北56cmの不整長方形を呈し、6cmの深さで掘り込まれていた。この炉を中心として東西 4.2ｍ、南北 2.1ｍの範囲で踏み固められた床面が確認された。その南側は高くなって段を成す。北側は凹凸がはげしくほとんど不明な点ばかりである。

遺物は全て覆土中からの出土である。

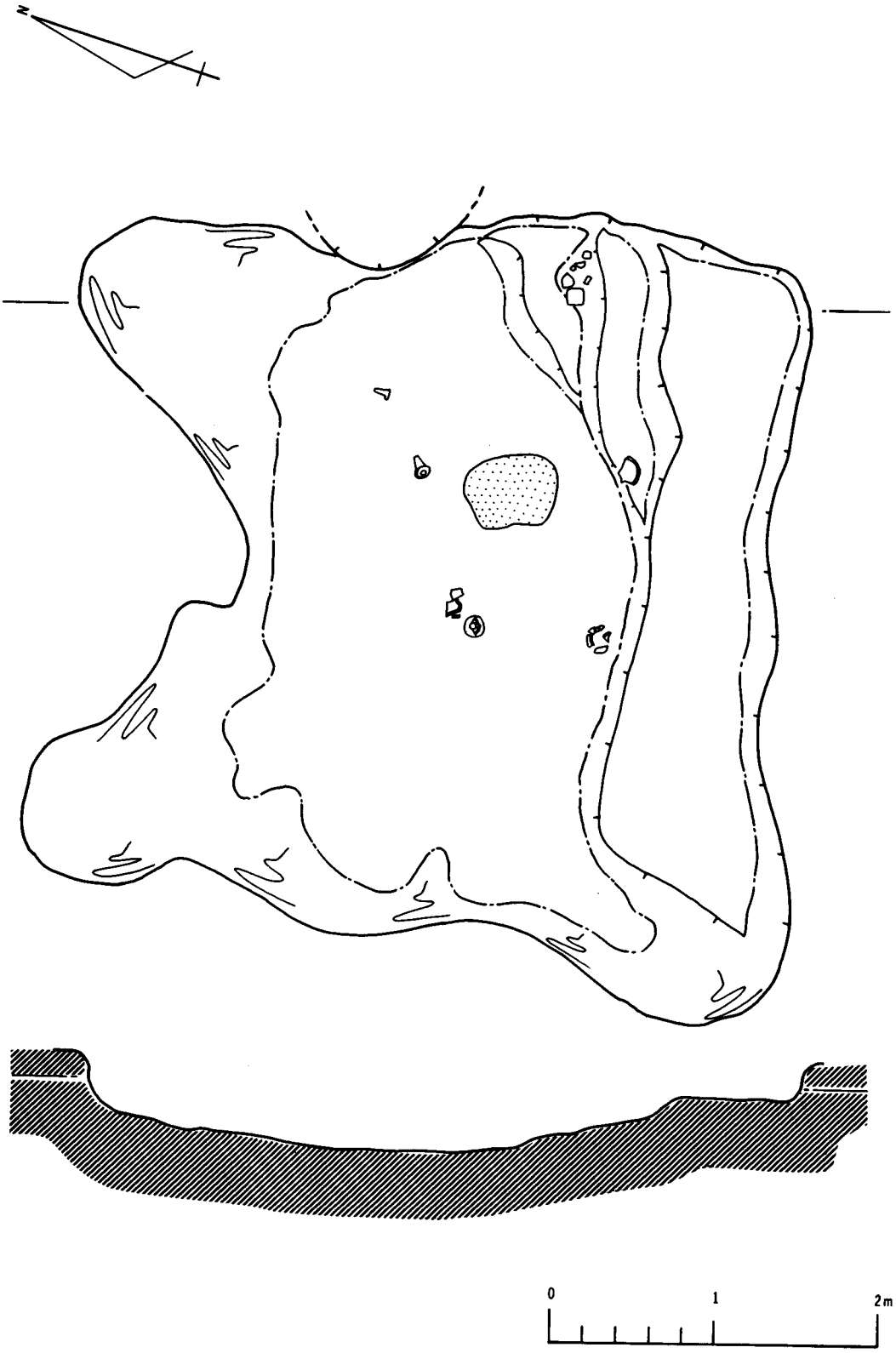
出 土 遺 物

1．土師器高杯。杯接合部径 2.8、脚残高 7.9cmを計る。杯接合部は細く、脚裾にむけて直線的に広がる。脚裾部は横ナデ、脚部は全体に細かいナデが施される。内面は刺突様のナデつけによって調整されている。胎土は細かい。胎土自体が朱色を帯びた赤褐色。

2．土師器高杯。杯接合部径 3.1、脚残高 8.4cmを計る。杯接合部は細く、脚裾にむけて直線的に広がる。脚裾部は、脚下面から曲線的に広がる。脚外面は縦の磨き、裾部は横の磨きを施す。内面脚部は下からのナデつけ痕を顕著に残し、裾部は横のナデが雑に施されている。 胎土は粗く、2mm大の礫を多量に含む。全体に黄白色を呈するが脚上位は朱塗されている。

3．土師器高杯。口径16.2、脚裾残径 9.4、接合部径 3.0、残高14.0cmを計る。幅の狭い杯底部から明瞭な段をもち、体部から口縁にかけて直線的に外傾する。脚部はほとんど広がらず円柱状にのびる。脚裾は鋭角的に屈折して広がる。杯部外面は摩耗して詳細は不明である。内面は縦横に磨きが施されている。脚部は縦の磨きが施された後に横のナデが加えられている。裾部は横の磨きが施されており部分的に横のナデが加えられている。脚部の内面は、棒状工具によってナデつけられている。裾部は横のナデが施されている。胎土は砂粒を多量に含みざらつく。黄白色を呈するが全体に朱塗されている。

4．土師器坩。括れ径 5.8、底径 4.0、残高 8.8cmを計る。つぶれた球形の胴部から直線的に外傾し口縁に至る。おそらく口縁はさほど上方にのびないと思われる。底部は上げ底風である。胴部中位から上方の内外面は摩耗しており、詳細は不明であるが、わずかに残存した部分では丁寧な横の磨きが施されている。胴部下位も同様であるが部分的に斜のナデが施されている。胴部内面は横のナ

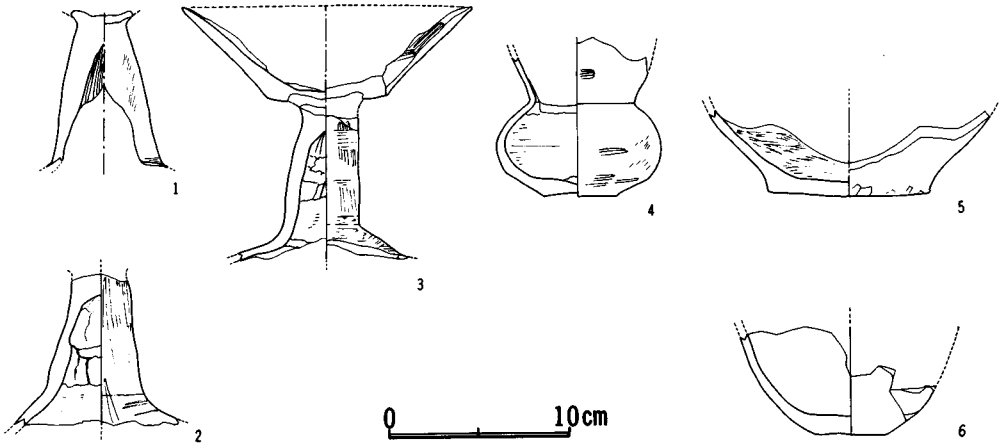


第 28 図　5　号　住　居　址

デが施されている。胎土は粗く２～３㎜大の礫を多量に含む。黄白色を呈するが外面の全体と口縁の内面は朱塗されている。

５．土師器壺。底径 9.0、残高 4.8cmを計る。平底から外反する胴部下位へ移行する。外面は摩耗して詳細は不明である。内面は丁寧なナデが施されている。胎土は粗く砂粒を多く含む。外面は赤褐色、内面はよごれた黄褐色を呈する。

６．土師器壺。底径 3.8、残高 6.0cmを計る。平底から内湾しながら外傾する胴部下位へ移行する。二次的な火熱を受けている。全体に表面が剥離しており詳細は不明である。胎土は粗く２㎜大の礫を多量に含む。全体に赤褐色を呈する。

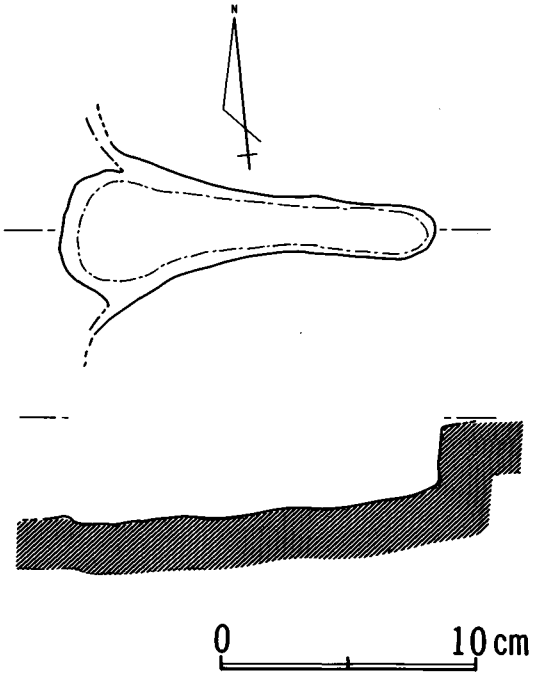


第 29 図　５号住居址出土遺物

f．６　号　住　居　址（Ｊ６Ｈ）

本住居址は調査区の北縁部７号土坑の南に位置する。竪穴部分は調査区域外であり、カマドのみが調査対象となった。

カマドは燃焼の奥部幅50cmのところから徐々に狭くなる煙道部へ移行する。煙道部は中央部で幅22cm、奥行 110cmを計る。カマド底面は、燃焼部と煙道部の間に断差はなく、燃焼部からほぼ水平に奥壁へ移行し、垂直に立ち上がる。遺物は、須恵杯（31図２）須恵台付椀（31図１）が出土している。



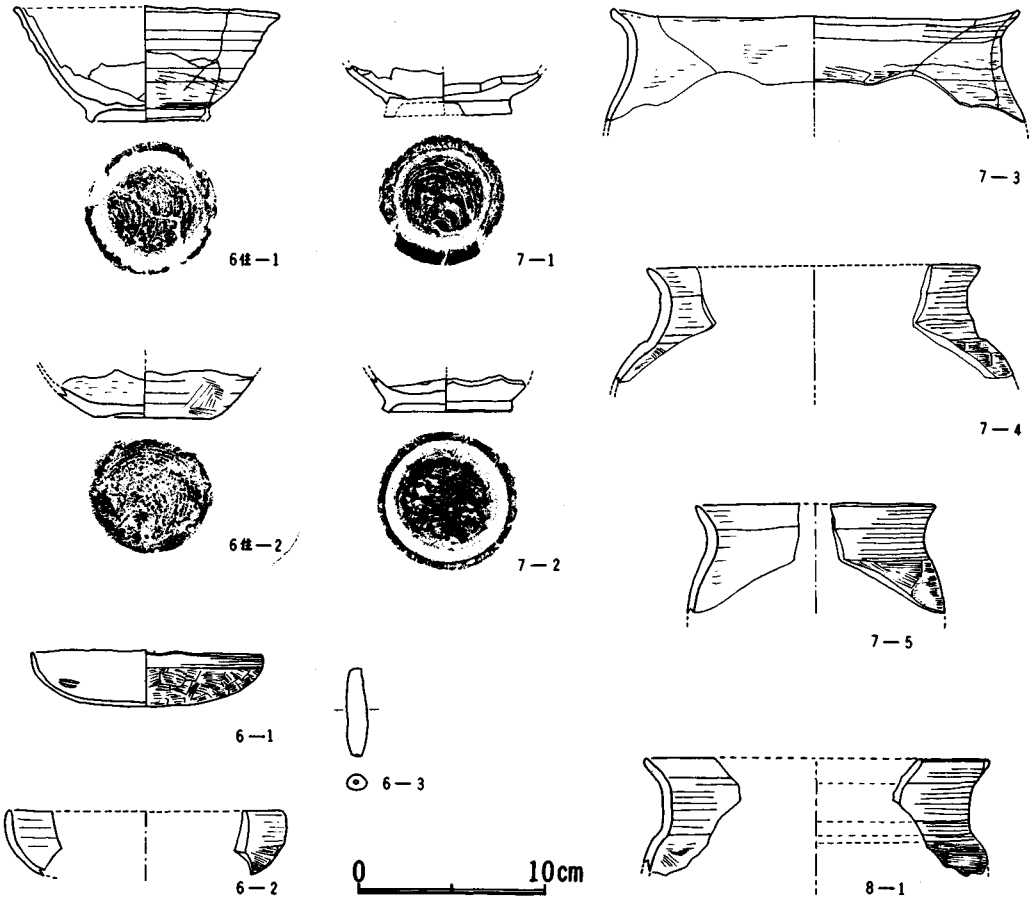
第 30 図　６　号　住　居　址

出　土　遺　物

１．須恵器高台椀。口径14.4、底径 6.7、高さ 6.2cmを計る。高台はわずかに外に開き、接地面は斜め下方を向く。体部はわずかに脹らみをもち、

口縁部は外反する。底部は右回転糸切りの後、高台をつけている。体部は全面に水挽き痕を残すが、下半は部分的にナデが加えられる。内面は全面ナデが施されている。胎土は粗く、生焼けであり、淡茶褐色および黒褐色を交互に呈する。

2．須恵器杯。底径 6.4、残高 2.7cmを計る。上げ底風の底部から若干腰が張り内湾する体部へ移行する。底部は右回転糸切り。体部は外面に明瞭な水挽き痕を残すが、内面は丁寧にナデられている。又体部外面下位は部分的にナデが加えられている。胎土は粗く、生焼けであり灰白色、黄褐色、黒褐色、赤褐色を交互に呈する。



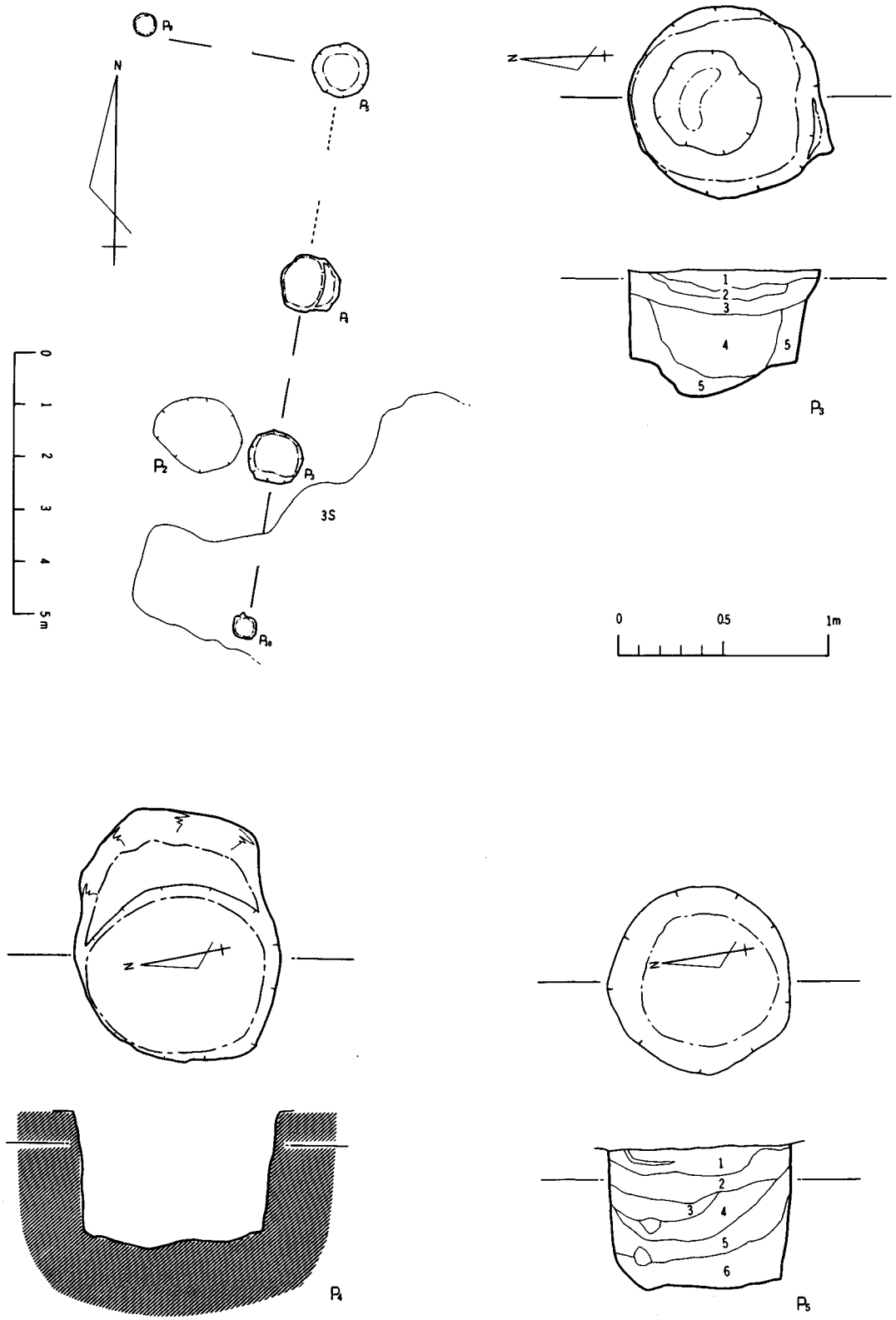
第 31 図　6号住居址 6・7・8 号土坑出土遺物

2．土　坑

a．1　号　柱　列（3．4．5．9．10土坑）

本址は 3 号竪穴と一部重複し、北・西へ派生する。北東隅に 5 号土坑、西へ 3.8m で 9 号土坑、南へ 4.1m で 4 号土坑、4 号土坑から南へ 3.4m で 3 号土坑、さらに 3.3m 南で 3 号竪穴内の10号土坑が位置する。

3 号土坑は直径91cmを計り、円形を呈する。深さは最深部で61cmを計る。底面は中央に窪みをも



第 32 図　1号柱列（3・4・5・9・10号土坑）

つ。覆土は、焼土粒、木炭粒、黄褐色粘土が各層に含有されている。ただし、2層は焼土ブロック層、5層は黄褐色土層の純層である。

4号土坑は85×99cmの円形を呈し、東壁上部は幅35cm張り出す。深さは62cmを計り、底面はほぼ平らである。

5号土坑は89×87cmの円形を呈し、深さは67cmを計る。底面はほぼ平らである。覆土は上層より灰白色粘土混在層（1層）、泥炭層（2層）、焼土粒・灰含有層（3層）、泥炭・焼土含有層(4層)、茶褐色粘土層（5層）、焼土粒含有黄褐色粘土層（6層）となる。4号土坑、10号土坑の土層も、ほぼ同一であり、10号土坑の場合は、下層の5・6層のみが確認された。

9号土坑は直径44cmの円形を呈し、深さ21cmを計る。焼土粒・木炭粒を含有した黄褐色粘土層を含有する覆土をもつ。

10号土坑は44×40cmの隅円方形を呈し、3号堅穴内に在る。深さは床面から30cmを計る。底面はほぼ水平である。

3号土坑からは、須恵器杯、高台椀、蓋、土師器台付甕、瓦、4号土坑からは土師器甕、5号土坑からは瓦、9号土坑からは土師器杯が出土している。

このように、9・5号土坑と、4・3・10号土坑とでは、底面のつくり、覆土、土坑配置間隔等に差がみられ、同一の柱列を形成するものかどうか擬わしい。

3 号 土 坑 出 土 遺 物

1．須恵器杯。口径13.0、底径 6.6、高さ 3.9cmを計る。平底から内湾しつつ外傾する体部へ一段有して移行する。口縁は外反して肥厚する。底部は右回転糸切り。体部は水挽き痕を、ナデを加えて消している。胎土は粗く、青灰白色を呈するが部分的に淡赤褐色及び黒褐色を帯びている。

2．須恵器高台椀。推定口径16.0、推定底径 8.4、高さ 6.4cmを計る。わずかに八の字状に開く高台から内湾する体部へ移行する。口縁は外反する。底部は右回転糸切り。体部は水挽きの後ナデを加え痕跡を消している。内面も同様である。胎土はやや粗く、内面淡青褐色、外面淡黒灰色を呈する。

3．須恵器蓋。推定口径18.0cmを計る。断面三角形を呈する。口縁からほぼ直線的に天井部へ移行する。水挽き整形。胎土はやや粗く汚れた灰白色。

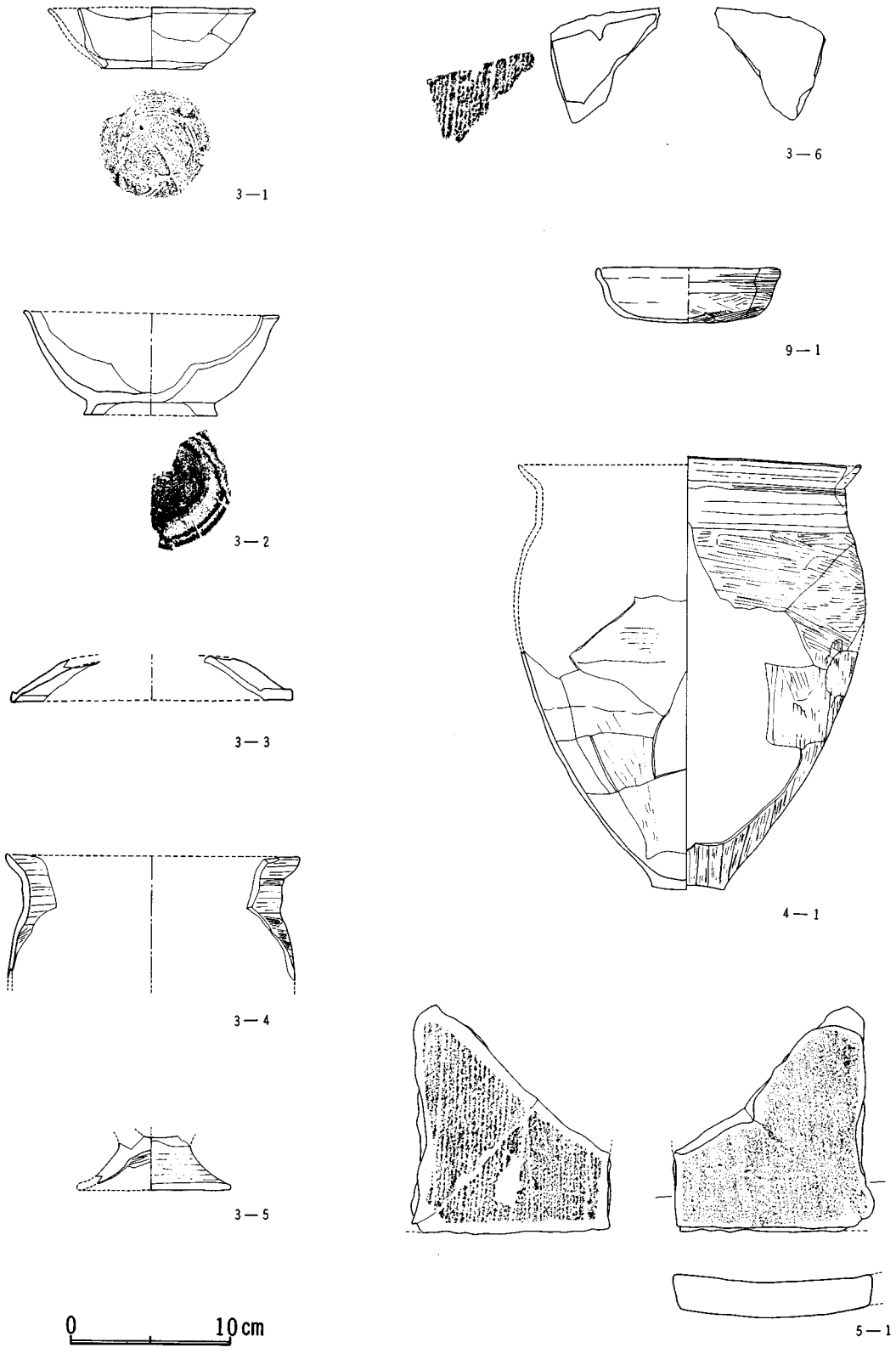
4．土師器甕。推定口径18.5、残高 7.6cmを計る。いわゆるコの字口縁であり、肩は張らず胴部中位に移行する。口縁は二度にわたる横ナデ、肩部横の削りが施されている。内面肩部は横のナデが施されている。胎土は粗く、赤褐色を主体とし全体に黒ずむ。

5．土師器台付甕。底径 9.7、残高 3.5cmを計る。カーブを描いて八の字状に広がる。全体に横のナデが施されている。胎土は粗く、全体に二次的火熱を受けて紫がかった赤褐色を呈している。

6．瓦。厚さ 2.1cmを計る。裏面に撚糸文をもつ。胎土は粗く、砂粒を多量に含みざらつく。汚れた灰白色を呈する。

4 号 土 坑 出 土 遺 物

1．土師器甕。口径21.5、底径 4.6、高さ27.2cmを計る。いわゆるコの字状口縁からわずかに張



第 33 図　1 号 柱 列 出 土 遺 物

った肩部へ移行し、底部まで若干の脹らみをもって移行する。底部はわずかに丸みをもつ。口縁は2度の横ナデが施されており順序は下から上である。胴部は上位が横の削り、中位から下端までは縦の削り、底部も削りが施されている。内面の上半は横のナデ、下半は斜め、あるいは縦のナデが施されている。胎土は粗く、赤褐色を呈する。

5 号 土 坑 出 土 遺 物

1．瓦。厚さ 2.2cmを計る。裏面に撚糸文をもつ。胎土は粗くざらつく。黒灰色を呈する。

9 号 土 坑 出 土 遺 物

1．土師器杯。口径11.6、底径 7.4、高さ 3.5cmを計る。丸底風の底部から腰が強く張り、3字状を呈する体部へ移行する。口縁は内湾ぎみに直立する。底部はヘラ削り、体部下半はナデ、上半は横ナデが施されている。内面は底部周辺に指頭大の押圧痕が残る。胎土はやや粗く、赤褐色を呈する。口縁の一部は褐色を帯びる。

b．1 号 土 坑（J1P）

調査区の中央に位置し、上端は1.72×1.78mの円形を呈するが、中段は、東西に長く、1.54×1.04mの長円形を呈する。深さは 130cmを計る。上端から20～54cmで段をもち、以下ほぼ垂直に落ちる形態を呈する。

覆土は炭、焼土を含有する緑灰褐色土（点線以上の1）、焼土、灰を含有する木炭層（同様に2）、黒褐色土（同様に3）が基本を成し、部分的に炭（4・5層）、黄褐色粘土（6）、焼土（7）、灰（8）をレンズ状に含む。

c．2 号 土 坑（J2P）

本址は調査区の中央部、3号竪穴の北に位置する。長辺1.23m、短辺91cmの長方形を呈するが、上端は1.71×1.47mの不整形を呈する。底面は南端が深く、1.09m、中央から北辺は、南へ向けて77～95cmの傾斜をもつ。

覆土は全面木炭が出土しているが、層として区別される下面に、白色粘土層を薄くしたがえている。土層図中1層とした部分は、焼土粒を多量に含むが、他層はほとんど、もしくは、まったく含有しない。土層図中2層とした部分は、白色粘土さえまったく含有せず、木炭の純層である。

遺物は、内面黒色処理の土師質椀1点。かわらけ杯および、かわらけ小型杯がまとまって出土している。

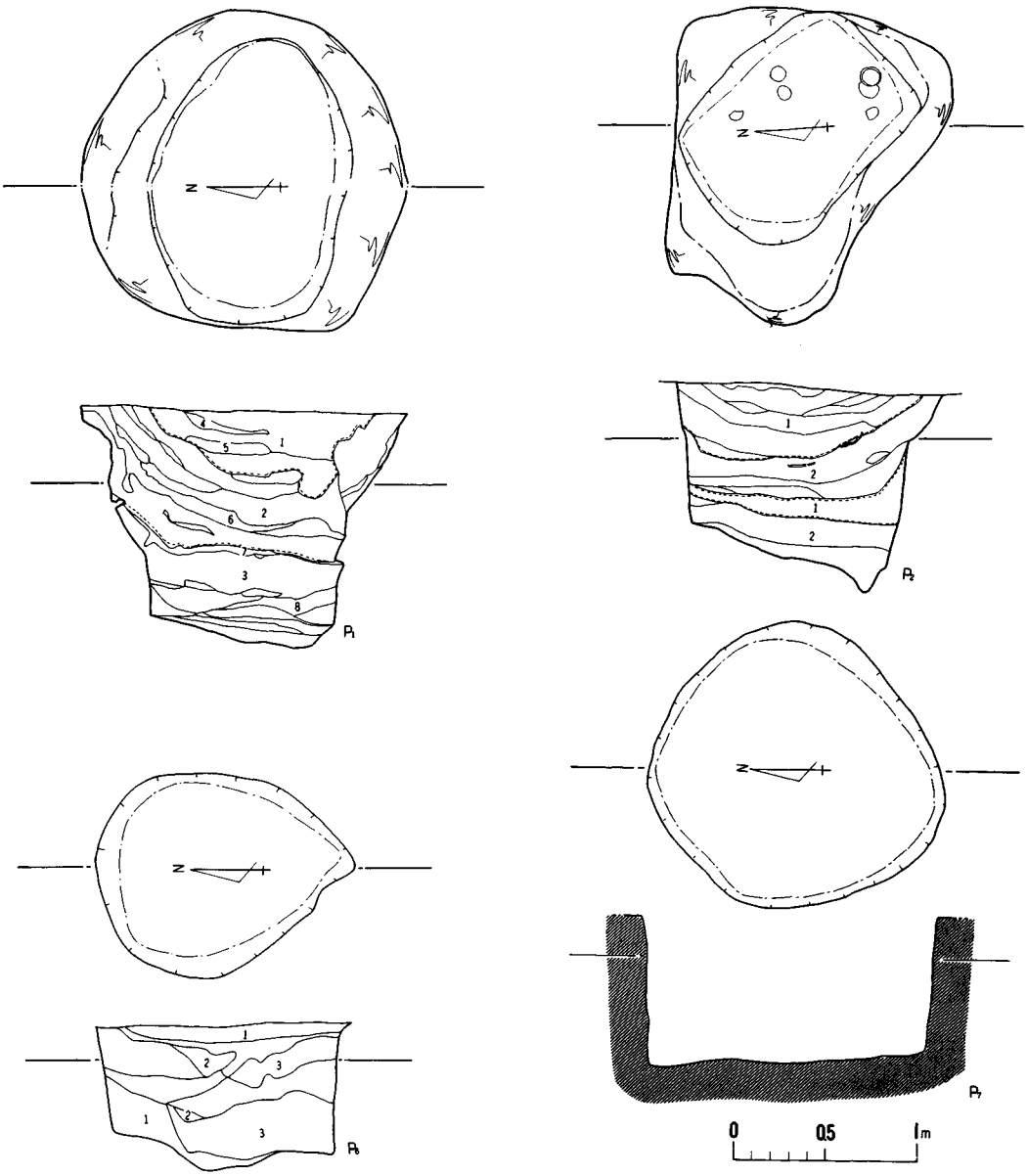
出 土 遺 物

1．土師質椀。口径13.8、底径 6.3、高さ 5.0cmを計る。切り残しの段を有する若干上げ底風の平底から、内湾する体部へ移行する。口縁はわずかに外反する。底部は回転糸切り。体部外面は回転ナデ、内面は磨きが丁寧に施されている。内面は全面黒色処理されている。胎土は細かいが表面はざらつく。表面は淡黄白色を呈する。

2．かわらけ杯。口径13.5、底径 6.0、高さ 3.0～ 3.7cmを計る。切り残しの段をもつ平底から、大きく内湾する体部へ移行する。口縁は短く直立気味。全面に水拭きが加えられ、整形痕は不明瞭である。内面底部周辺は指頭による押圧ナデが加えられている。胎土は細かく、黄褐色を呈する。

3．かわらけ杯。口径13.0、底径 6.8、高さ 3.0～ 3.6cmを計る。切り残しの段をもつ平底から、強く腰が張る体部へ移行する。口縁はほぼ直立する。底部右回転糸切り、体部は全面にヘラ状工具によってナデが施されており、随所にヘラ痕が残る。底部周辺には指頭による押圧ナデが加えられている。胎土は細かく、黄白色を呈する。

4．かわらけ杯。口径13.1、底径 7.2、高さ 3.1cmを計る。わずかに切り残し段をもつ平底から、大きく内湾する体部へ移行する。口縁はほぼ直立する。全面に摩滅しており、整形痕は不明であるが、内面底部周辺は指頭による押圧ナデが加えられている。胎土は細かく、淡黄褐色を呈する。



第 34 図　1・2・6・7号土坑

5．かわらけ杯。口径12.8、底径 8.3、高さ 3.3cmを計る。平底から、大きく内湾する体部へ移行する。口縁は直立気味で、底部は右回転糸切り、体部は全面横のナデ、内面底部周辺には指頭による押圧ナデが加えられている。胎土は細かく、黄白色を呈する。

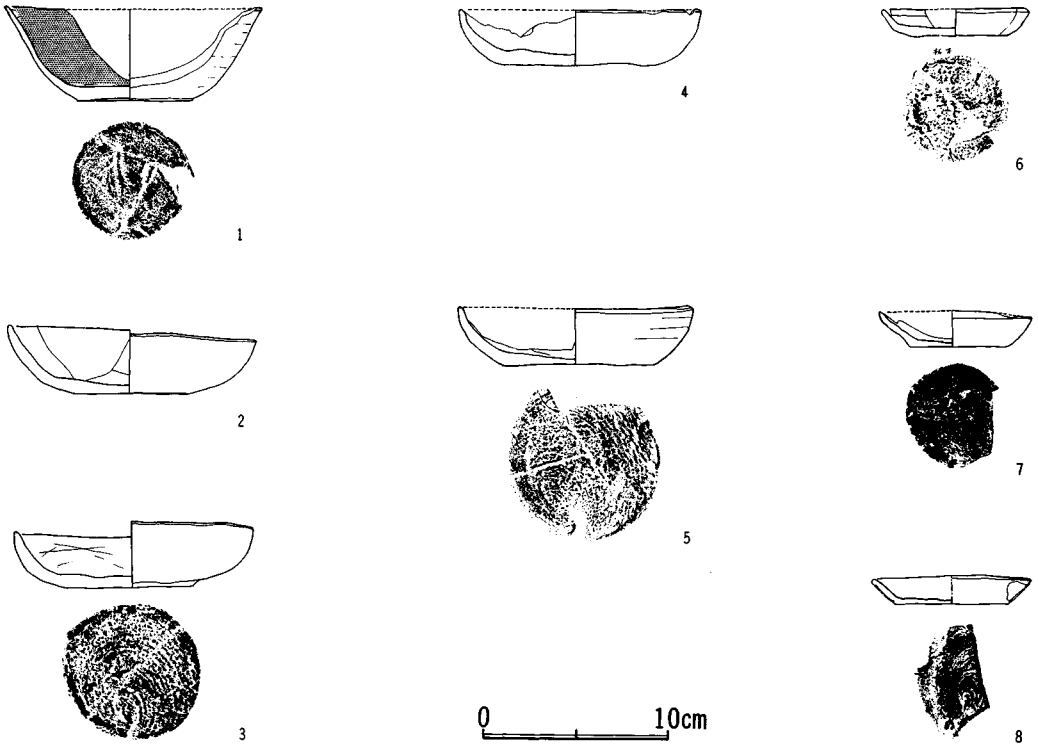
6．かわらけ小型杯。口径 8.0、底径 5.0、高さ 1.6cmを計る。平底から、若干腰に張りをもち内湾する体部へ移行する。口縁は斜め上方を向く、底部右回転糸切り、体部は全面横のナデ、内面底部周辺には指頭による押圧ナデが加えられている。内面の口縁直下に一条の沈線が周る。胎土は細かく、淡黄褐色を呈する。

7．かわらけ小型杯。口径 8.3、底径 5.3、高さ 2.0cmを計る。平底から、外傾する体部へ移行し、口縁はほぼ垂直になる。底部右回転糸切り。他は摩滅しており詳細は不明である。内面底部周辺には指頭による押圧ナデが加えられている。内面の口縁直下に一条の沈線が周る。胎土は細かく、淡黄褐色を呈する。

8．かわらけ小型杯。推定口底 8.6、推定底径 6.2、高さ 1.6cmを計る。平底から、外傾する体部へ移行する。口縁は同一の軌跡をとる。底部右回転糸切り。体部は横ナデ、内面底部周辺はわずかに指頭による押圧ナデが施されている。胎土は細かく、淡黄褐色を呈する。

d．6 号 土 坑（J6P）

本址は調査区中央北寄りの、4号住居の南東に位置する。南北1.42m、東西1.12mを計り、不整円形を呈する。底面は中央部が窪み、最深部78cm、周辺部70cmを計る。



第35図 2 号 土 坑 出 土 遺 物

土層は、最上層と最下層に茶褐色粘土層（１層）が推積し、中間は、木炭・焼土・灰が混在するが、焼土（２層）、木炭（３層）が純層を成す場合もある。

遺物は土師器杯２点および、土錘が出土している。

出　土　遺　物

１．土師器杯。口径12.6、高さ 3.1cmを計る。丸底から内湾する体部へ移行する。口縁はほぼ直立する。口縁部は横ナデ。体部外面は全面へラ削り。内面は磨き様のナデが施されている。胎土は細かいが砂粒が多く含まれざらつく。茶褐色を呈する。

２．土師器杯。推定口径15.5、残高 3.5cmを計る。口縁はほぼ直立し、体部は丸味をもつ。口縁部は横ナデ。体部外面はへラ削り。内面は全面にナデが施されている。胎土は細かい。茶褐色を呈する。

３．土錘。

e．7　号　土　坑（Ｊ７Ｐ）

本址は、調査区の最北端に位置する。東西1.55ｍ、南北 1.6ｍの円形を呈する。底面は、北辺が深く、深さ82cm、南辺は72cmを計る。本址覆土は、全面に焼土粒・灰褐色粘土・黄褐色粘土ブロックの混在した状況を呈し、人為的に埋没された様相を呈する。

遺物は、須恵器台付椀２、土師器甕３個体分出土している。

出　土　遺　物

１．須恵器高台椀。底径 6.8、残高 2.7cmを計る。外方に開き断面矩形を呈する高台から大きく内湾する体部へ移行する。底部右回転糸切り。体部は内外面ともナデが施されている。胎土は粗く、生焼けであり灰褐色および黒褐色を呈する。

２．須恵器高台椀。底径 7.1、残高 2.1cmを計る。八の字状に開く高台から、内湾する体部へ移行する。底部左回転糸切り。付け高台。体部外面および内面はナデが施されている。胎土は粗く、生焼けであり汚れた淡黄褐色および灰褐色を呈する。

３．土師器甕。口径22.1、残高 6.2cmを計る。比較的丸味をもつコの字状の口縁から、あまり脹らみをもたない胴部へ移行する。特に口縁下端から胴部への移行はなめらかである。口縁上位は横ナデ、口縁下位は横のナデ、胴部は横のへラ削りが施されている。内面は全面にナデが加えられている。胎土はやや粗く、砂粒を多く含む。淡黄色を呈するが一部黒褐色もしくは赤褐色を呈する。

４．土師器甕。推定口径20.0、残高 6.0cmを計る。コの字状口縁から、若干肩のはる胴部へ移行する。口縁は３度の横ナデが行なわれ、胴部は横のへラ削りが施されている。内面は全面にナデが施されている。胎土はやや粗く砂粒を含む。若干赤味を帯びた淡黄色を呈する。

５．土師器台付甕。推定口径13.0、残高 6.0cmを計る。くずれたコの字状を呈する口縁から脹らみのすくない胴部へ移行する。口縁は２度の横ナデ、胴部外面は横のへラ削り、内面は全面にナデが施されている。胎土はやや粗い。茶褐色を呈する。

f．8　号　土　坑（Ｊ８Ｐ）

本址は、調査区の中央部、３号溝の南に接して位置する。東西50cm、南北35cmを計り、長円形を

呈する。底面はほぼ水平であり、深さは18cmを計る。本址覆土は、茶褐色粘土、灰褐色粘土の混在層である。

遺物は土師器甕が出土している。

出 土 遺 物

1．土師器甕。推定口径18.8、残高 6.3cmを計る。コの字口縁から、あまり肩の張らない胴部へ移行する。口縁は2度の横ナデ、胴部外面は横のヘラ削り、内面はナデが施されている。胎土は粗く砂粒を含む。赤褐色を呈する。

3．竪 穴 状 遺 構

a．1 号 竪 穴（J1S）

本址は調査区の南端に位置する。基盤層である黄褐色粘土層とわずかに茶褐色粘土を含有する覆土の区別がはなはだ不明瞭であり、遺構としての形態は呈示得し得ない。

調査は十字のトレンチを中心に北方で面として遺構を追求したが、中央で北壁の一部が確認されたのみである。

出土遺物は須恵器蓋（39図1－1）、須恵器椀（39図1－2）等が出土している。

出 土 遺 物

1．須恵器蓋。残高 2.1cmを計る。つまみは扁平な擬宝珠状であり、直線的に傾斜してゆく。外面回転ナデ、内面はナデが施されている。胎土は粗く、黒灰色を呈する。

2．須恵器椀。推定口径13.0、推定底径 6.5、高さ 5.6cmを計る。切り残しの段を有する若干上げ底風な平底から、わずかな脹らみをもち外傾する体部へ移行する。口唇部は外反しわずかに肥厚する。底部右回転糸切り、体部全面に横のナデが施されている。内面はナデが施されている。胎土は粗く、生焼けであり、淡灰白色、淡赤褐色を呈する。

b．2 号 竪 穴（J2S）

本址は調査区の中央北寄りに位置する。調査部分は西側1/3ほどである。

主軸はN－20°－Eを示し、南北は 3.8m、深さは20cmを計る。

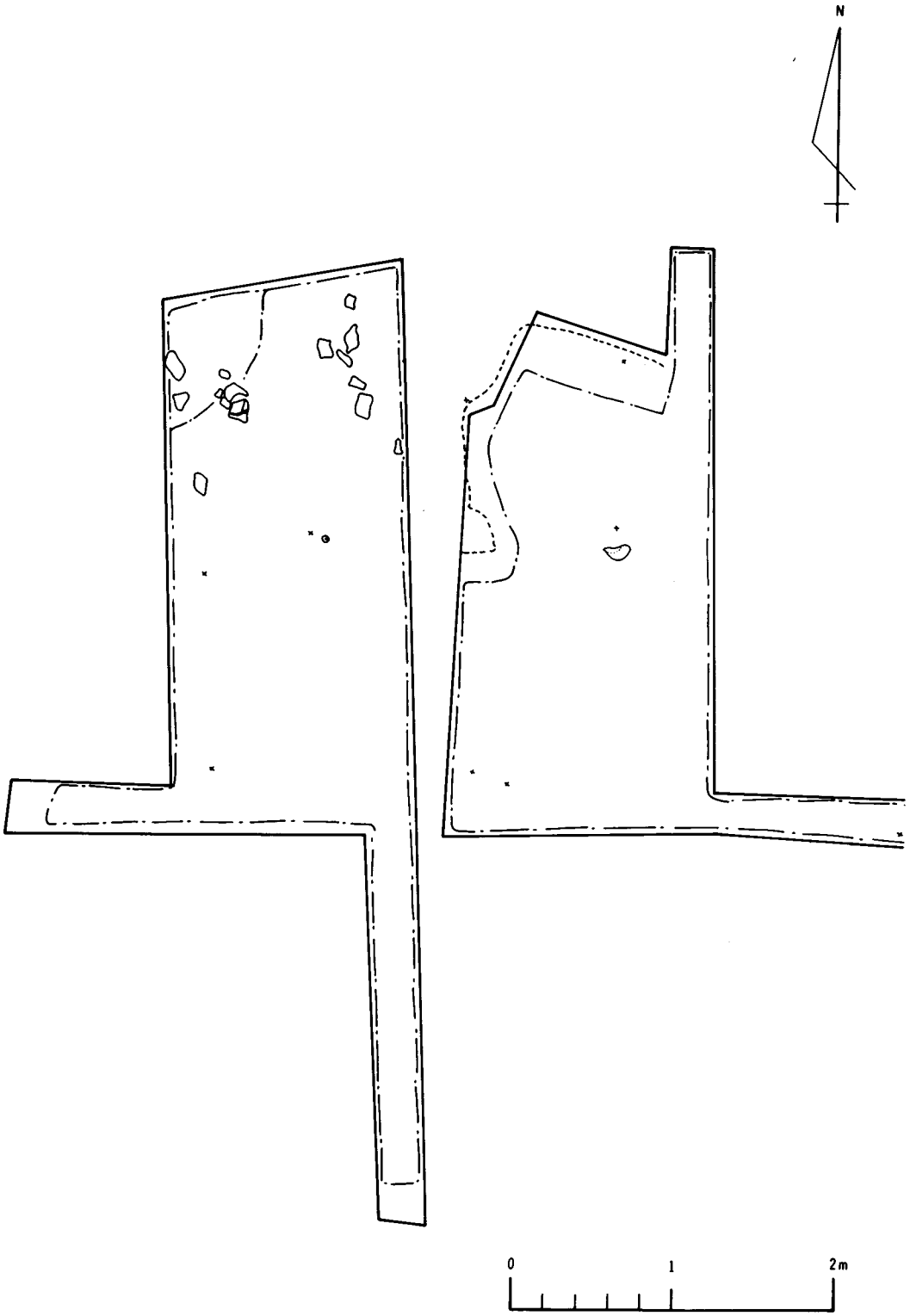
竪穴の周辺には土坑が7基存在し、いずれも15～20cmの深さをもつ。その内、北端の土坑から須恵器が2点（39図2－1、2）出土している。竪穴からの出土は皆無である。

覆土は泥炭を含む茶褐色土であり、土坑も同様である。

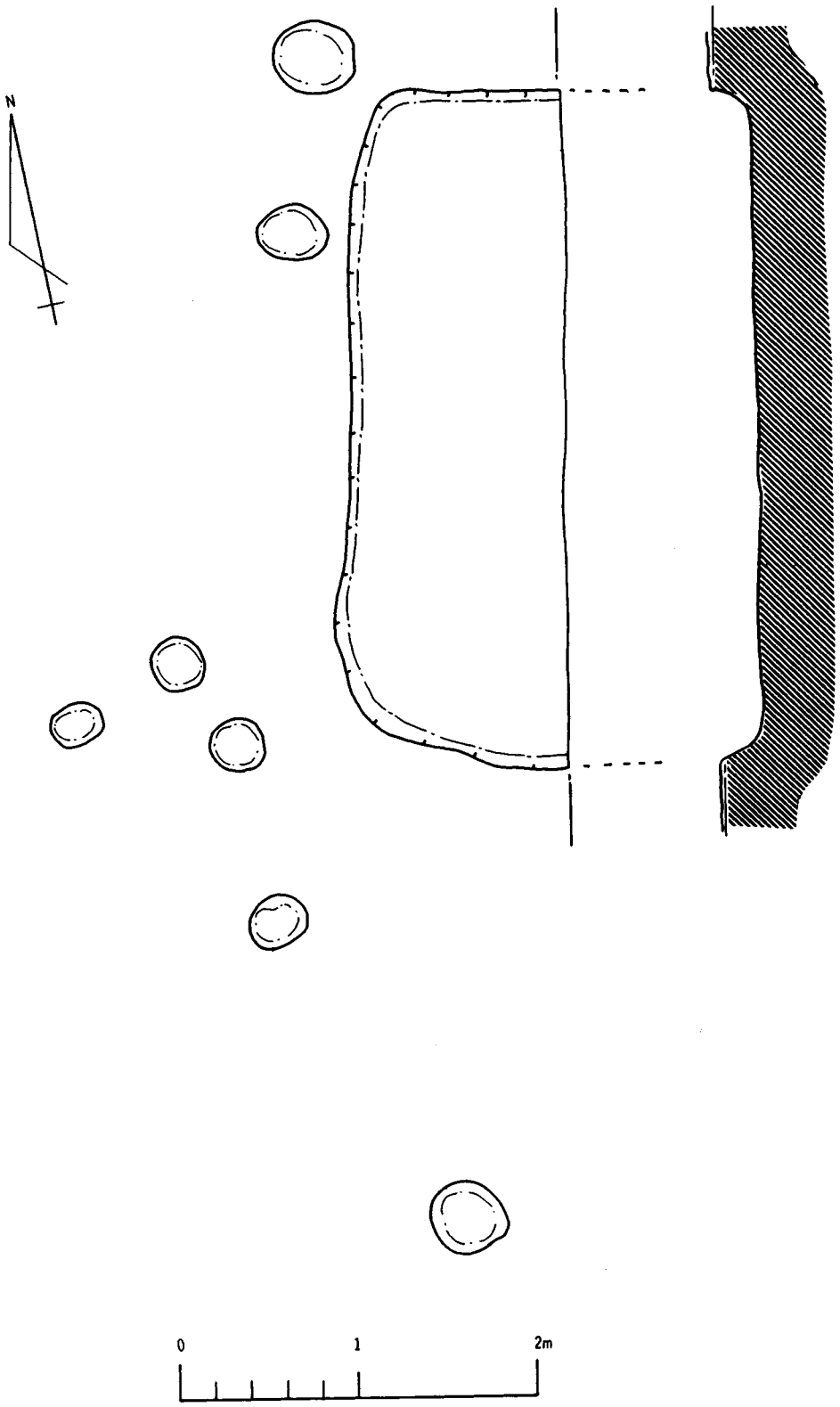
出 土 遺 物

1．須恵器杯。推定口径12.1、推定底径 6.4、高さ 4.0cmを計る。体部は腰が若干張り内湾する。口縁はわずかに外反する。外面は水挽き痕が明瞭に残る。内面は回転ナデが施されている。内面底部周辺は押圧され窪む。胎土は細かく白色針状物質を含む。黒灰色を呈する。

2．須恵器杯。推定口径12.2、推定底径 6.7、高さ 3.5cmを計る。若干上げ底風の平底から、腰が張りほぼ直線的に外傾する体部へ移行する。口縁は外反する。底部回転糸切り。体部上半は水挽き痕を残し、下半はナデが加えられる。その結果底部との接合面は丸味をもつ。胎土は粗く、白灰



第 36 図　1　号　竪　穴



第 37 図　2　号　竪　穴

色、および黒褐色を呈する。

c．3　号　竪　穴（J3S）

本竪穴遺構は、1・2号住居址各々の西壁の一部と重複している。

東西方向と南北方向に各々 3.3× 1.9m、3.55× 1.5mを計り、全体でL字形を呈する。壁は、北端部を除いてほぼ垂直に立ち上がり、34～40cmの高さをもつ。底面はほぼ平担であるが特に踏み固めた面はみられない。

本竪穴は、1・2号住居址よりも後出することが土層から確認されている。

出土遺物は全て覆土中に含有されているものである。その中でL字プランの角の位置から、幅18cm、長さ17.5cm、鉄部分幅 3.5cmを計るU字鋤が出土している。

出　土　遺　物

1．土師器杯。口径13.8、底径 6.5、高さ 4.0cmを計る。平底からわずかに段をもってカーブを描いて外傾する体部へ移行する。口縁は外反し斜め上方を向く。底部右回転糸切り。周辺部にナデを施している。体部は内外面とも丁寧な横のナデを施している。口唇は外面のみ横ナデ痕が残る。胎土はやや粗く、茶褐色を呈するが内面は口唇部を除いて吸炭している。内面の一部にタール状の遺物が付着している。

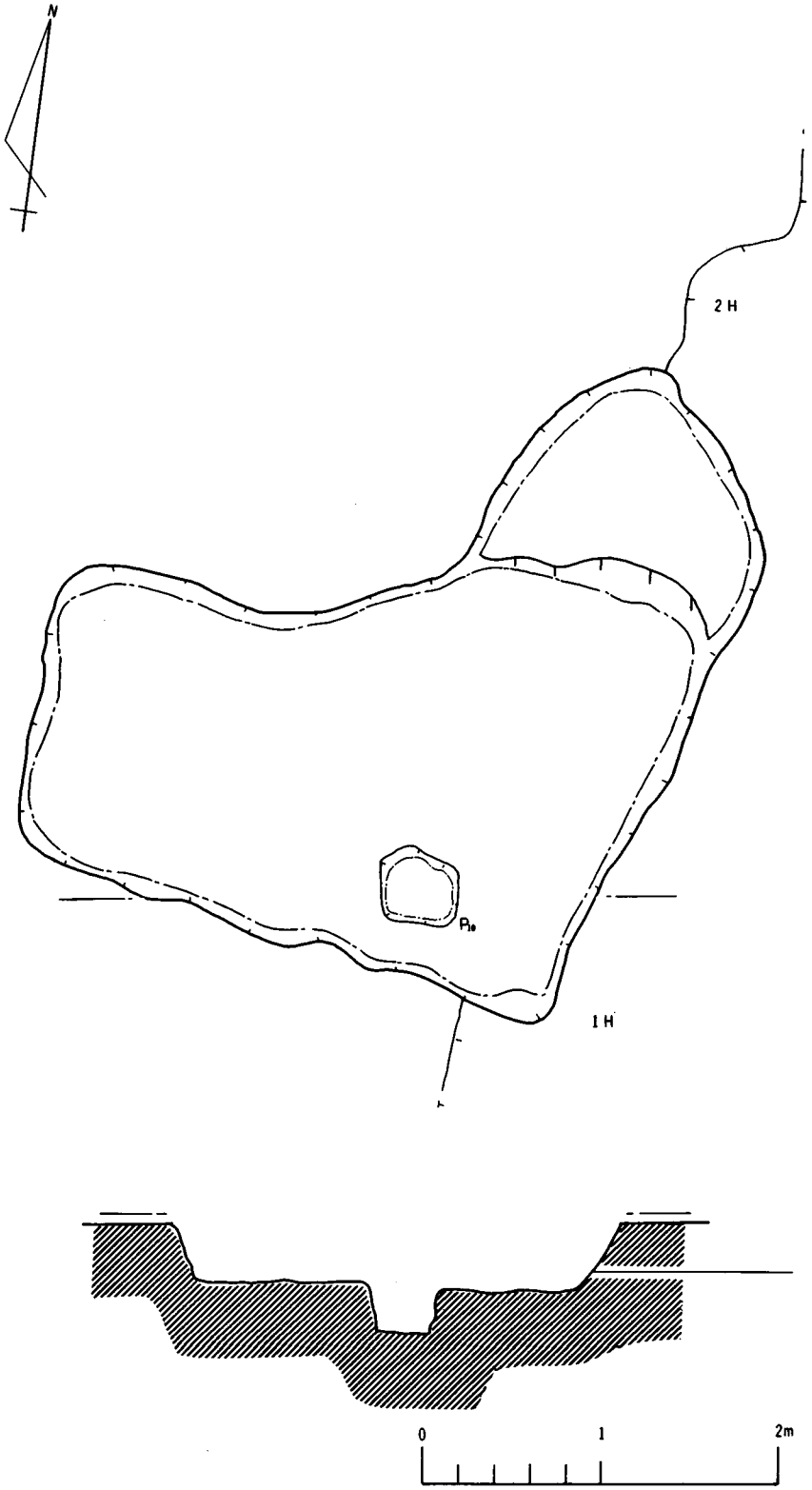
2．土師器杯。口径12.6、底径 8.2、高さ 4.0cmを計る。丸底風の底部から外傾する体部へ移行し、口縁はつまみあげられて直立する。底部はヘラ削りされた後、部分的にナデが施されている。さらに乾燥時についたと思われる板状圧痕がみられた。体部は内外面とも横ナデが丁寧に施されている。胎土は細かい淡黄褐色を呈するが、口唇部は部分的に赤褐色である。内面は口縁部を除いて黒褐色を帯びている。

3．須恵器杯。推定口径13.0、底径 7.0、高さ 4.0mを計る。上げ底風の底部からわずかの切り残しをもって内湾する体部へ移行する。口縁はわずかに外傾する。底部右回転切り。体部は水挽き痕を明瞭に残す。胎土は細かいが部分的に4mm大の礫を含む。生焼けであり体部は小豆色。内面底部のみ灰色を呈する。

4．須恵器椀。推定口径13.4、底径 5.2、高さ 4.6cmを計る。若干上げ底の底部から切り残しの段をもって腰を張る体部へ移行する。体部上位は外傾し、口縁はわずかに外反する。底部右回転糸切り、周辺部の一部はナデを加える。体部は全面に横のナデ、口縁部は横のナデが施され、体部上半にわずかに水挽き痕が残っている。胎土は粗く、汚れた灰色を呈する。

5．須恵器台付椀。口径13.2、底径 6.6、高さ 5.7cmを計る。接地面が、窪みをもち幅広で低くわずかに外方に広がる高台から、内湾する体部へ移行する。口縁部は肥厚する。底部左回転糸切り。付け高台を底部及び体部下端にナデつけている体部は水挽き痕が残るが体部下半はナデによってほぼその痕跡を消している。胎土は粗く3mm大の礫を含む。濃青灰色を呈する。

6．須恵器台付椀。口径15.4、底径 7.0、高さ 6.3cmを計る。接地面が窪みをもちわずかに外方に開く高台から内湾気味の体部へ移行する。口縁はわずかに外反し直下が最も薄くなる。底部は右回転糸切り。高台は底部及び体部下端にナデつけている。体部は上半に水挽き痕が残り下半はナデ



第 38 図　3　号　竪　穴

によって、その底跡が消されている。内面は全面にナデが施されている。胎土は粗くざらつく。生焼けで底部は灰白色、それ以外は明るい赤褐色を呈する。

7．須恵器台付椀。底径 8.0、残高 4.8cmを計る。接地面に窪みをもち外方に開く高台から回転ナデによる稜をもって内湾する体部へ移行する。底部は痕跡は不明瞭であるが右回転糸切りと思われる。高台は回転ナデによって貼り付けられている。体部外面は水挽き痕を明瞭に残し内面は全面にナデが施されている。胎土は粗いが器面が比較的密に仕上げられている。生焼けであり薄い小豆色を呈する。

8．須恵器台付椀。推定口径14.8、底径 7.2、高さ 5.8cmを計る。接地面に丸みをもち外方へ開く高台から回転ナデによる稜をもってわずかに脹らみをもちながら外傾する体部へ移行する。口縁は外反し肥厚する。高台は回転ナデによって貼り付けられている。底部は痕跡が不明瞭であるが右回転糸切りである。体部は、水挽き痕を残す。内面は横のナデが施されている。胎土は粗く砂粒状であり礫を含む。生焼けで汚れた灰白色もしくは赤褐色を呈する。内面は口縁以外に吸炭している。

9．土師器台付甕。推定口径12.3、底径10.0、括れ径 4.2、推定高 15.0cm を計る。口縁は二段になっており下半はゆるやかに外傾し、上半はその角度を強める。胴部は最大径を中位やや上方にもちほぼ球形を呈する。高台は短かく大きく外反する。口縁は2度にわたる横ナデを胴部上半の横ヘラ削りの後に施している。胴部下半は縦のヘラ削り、台部は横ナデが施されている。内面上半は横のナデ、下半は縦のナデが施されている。脚内面中央は指頭によるナデつけが施されている。胎土は粗く、全体に黒褐色を帯びるが、朱色を呈する部分もある。

10．土師器台付甕。推定口径 9.1、残高 3.6cmを計る。脚は上半がわずかに開き下半が大きく外反する形態をとる。外面は上半が横ナデ、下半はナデを加える。内面は下半が横ナデ、上半は指頭によるナデ付けが施されている。胴底部はヘラ状工具によってナデつけられている。胎土は細かいが全体にざらつく。明るい赤褐色を呈する。

11．灰釉高台皿。推定口径15.3、底径 6.8、高さ 3.0cmを計る。ほぼ直立する高台から、上半がわずかに脹らむ体部へ移行し、口縁は短く水平に外反する。底部回転ヘラ削り、体部は下端と中央やや上位に回転ヘラ削り、口縁と体部中央やや下位に回転ナデを施している。内面底部は円形に条痕が走り底部をはめこんだ様相が良く観取できる。内面は全面に回転ナデが施されている。内面の底部以外には灰釉がかかる。胎土は細かい。灰白色を呈する。

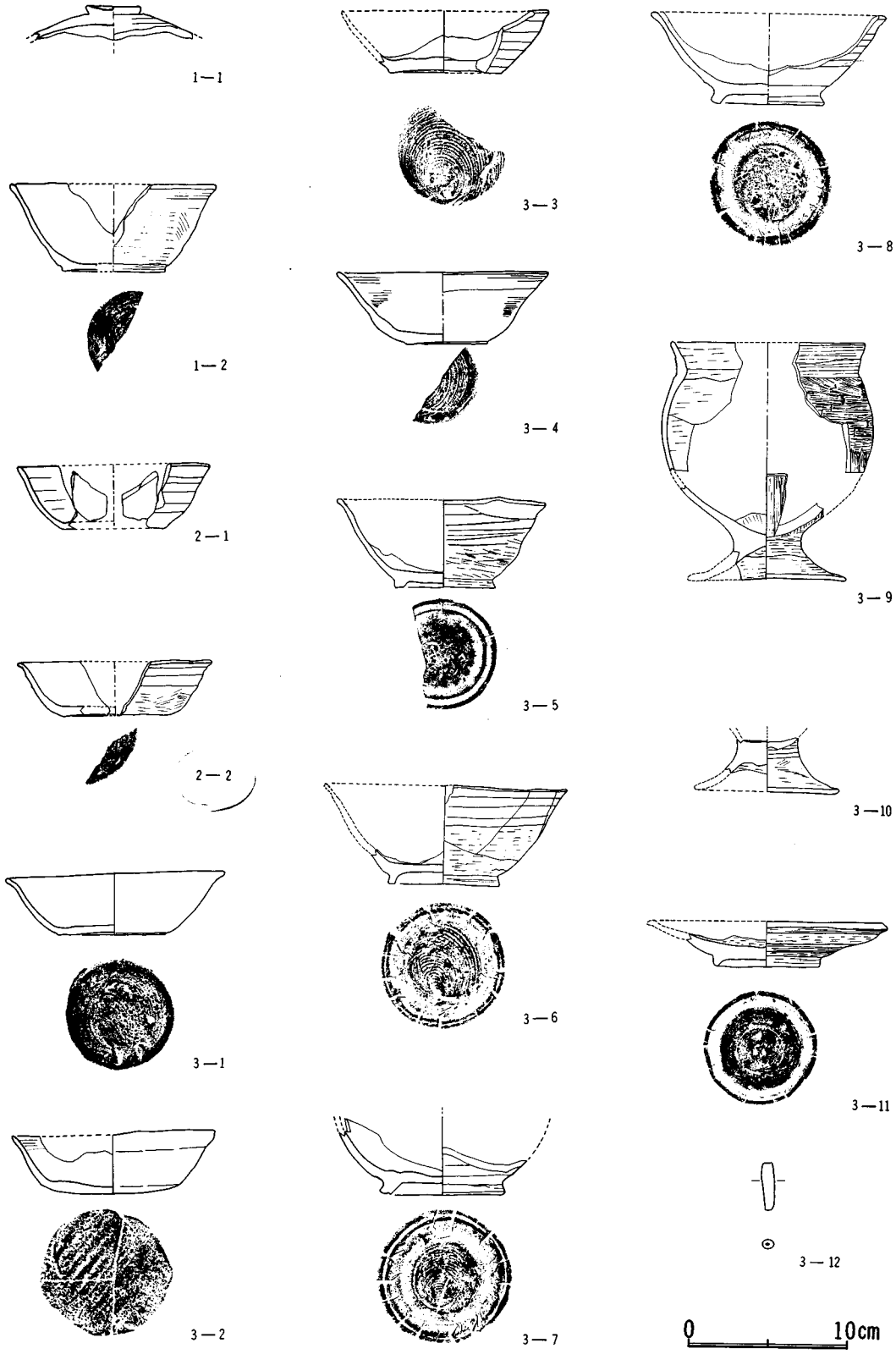
12．土錘。

4．溝　址

a．1　号　溝（J1D）

本溝址は調査区の南端部に位置する。

幅は 1.30 m 前後でほぼ東西行している。深さは一様で98～ 100cmを計る。両壁は共に張り出し、溝底幅は40～60cmを計る。溝内からは、軽石等の10～15cm前後の礫が多く出土している。ここから西へ向けてさらに伸びており、東端は大きな丸味をもって終結している。



第 39 図　1・2・3号竪穴出土遺物

出土遺物は、須恵器、陶器、土錘、漆器、かわらけ等多種に及ぶ。

出 土 遺 物

1．かわらけ杯。推定口径15.2、推定底径 8.4、高さ 3.5cmを計る。わずかに切り残しの段をもつ平底から、内湾する体部に移行する。底部右回転糸切り。体部は水挽き痕が残る。内面は全面にナデられている。口縁は丸く仕上げられている。胎土は細かく淡黄色を呈する。

2．青磁皿。推定口径10.7、推定底径5.1、高さ 1.9cmを計る。平底から腰がくの字に張りわずかに外反する口縁に至る。口唇先端は尖る。底部回転ヘラ切り。釉が内面は全面、外面は、体部のみにかけられている。内面底部には鳥羽状の文様がつけられている。胎土は細かく密である。全体に緑がかった灰褐色を呈する。

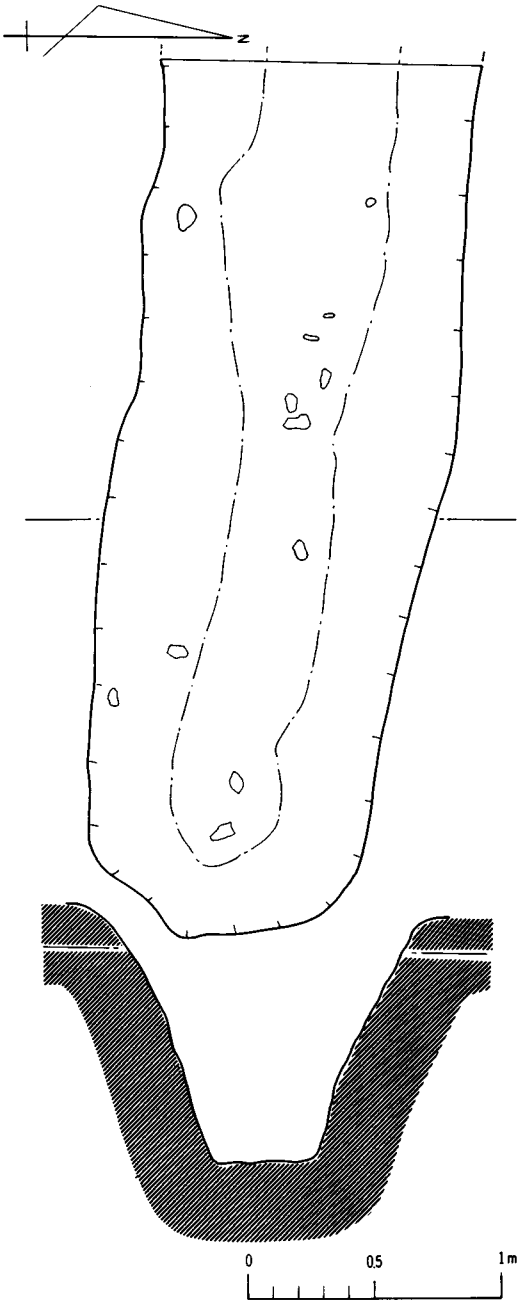
3．灰釉高台椀。推定底径 7.6cmを計る。低く、接地面の広がる付け高台から大きく内湾する体部へ移行する。高台付近の底部及び体部下端は回転ナデが施されている。底部は右回転糸切り。胎土は粗く、灰白色を呈する。内面は釉がかかり淡緑色を呈する。

4．青磁椀。推定口径17.4、残存高 5.4cmを計る。下半はわずかに内湾するが、上半は直線的に外傾する。整形痕はよくわからないが、水挽きの凹凸をよく残している。内面には草花文様が付けられている。胎土は細かく密である。青灰色を呈する。

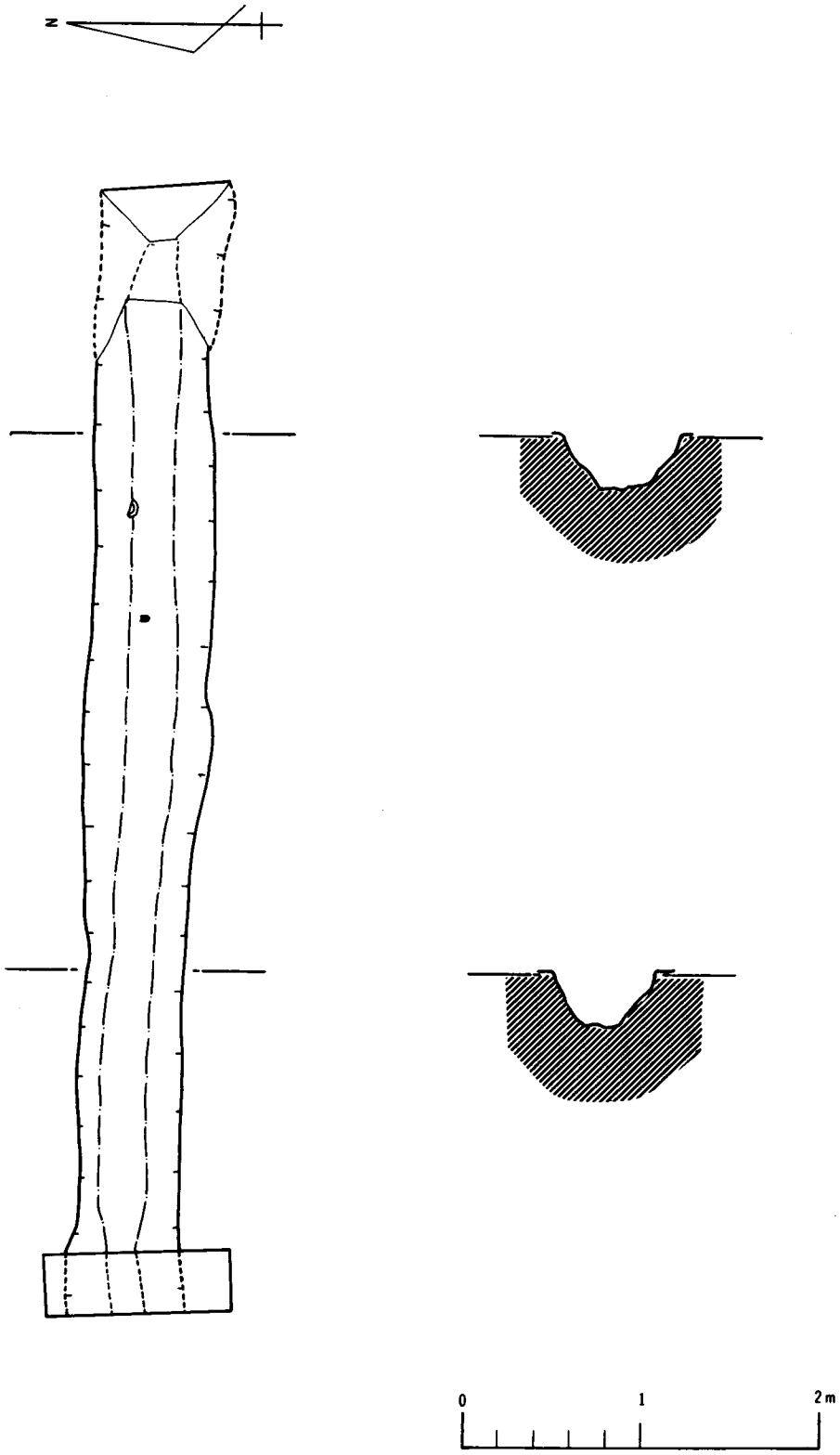
5．須恵質壺。底径 8.9、残高 3.1cmを計る。内湾しながら外方に開く幅広の高台から括れをもって内湾する胴部下端へ移行する。底部は高台の付着に伴い全面ナデられている。胴部は回転ナデの痕跡を残す。胎土はやや粗いが密であり灰黒色を呈する。

6．常滑甕。

7．漆器杯。推定口径10.8、推定底径 9.7、高さ 1.5cmを計る。周辺部が丸味を帯びるがほぼ平底から、わずかに外傾する体部へ移行する。非常に薄手であり、表裏に漆が塗られている。芯の材質は不明。



第 40 図　1　号　溝



第 41 図　2　　号　　溝

8．漆器杯。内部底径 6.4cmを計る。非常に薄手であり杯部がやや深めの形態をとるものと思われる。内面にはツル・松葉が朱画されている。

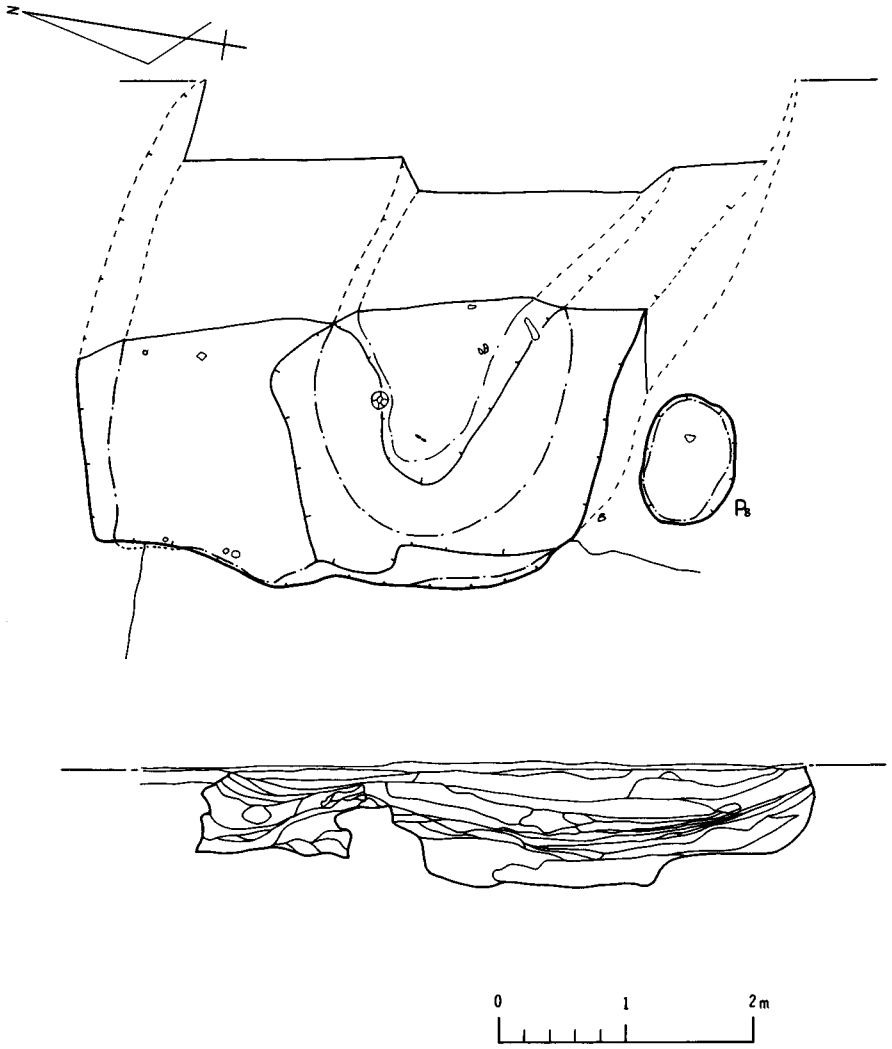
9．大型土錘。

b．2　号　溝（J 2 D）

本址は調査区の北に位置し、ほぼ東西走する。さらに東西両方向へ伸びるものと思われる。検出された長さは12m、上端は幅 1.1～ 1.4mを計る。深さは60cm前後、底面幅は45～50cmを計り、断面は底面がほぼ平なU字形を呈する。覆土は黒ずんだ茶褐色粘土層であり、細かく打ち砕かれたかわらけが覆土のうち中間層より出土している。かわらけは表面がほとんど摩耗しており、わずかに一点のみ形状を知り得た（44図２－１）。その他常滑手の甕の口縁（44図２－２）が出土している。

出　土　遺　物

1．かわらけ杯。底径 5.8、残高 2.5cmを計る。平底から内湾する体部へ移行する。全面に水拭



第 42 図　3　号　溝・8　号　土　坑

きが施されている。内面底端部には一条の条線が走る。胎土は細かく、淡黄色を呈する。

2．常滑手甕。口縁は折返され、上端が幅広となる。口唇部上縁は外面がつまみ出された様につき出し上面に大きな窪みをもつ。全体に横のナデが施されている。胎土は粗く、全体に小豆色を呈する。

c．3　号　溝（J3D）

本址は調査区のほぼ中央に位置する。西端で2号住居址を切断している。調査部分は溝の西端の一部のみであり、東から東南へ伸びる。溝は北と南の2本に別れ、北溝が浅く、南溝が深い形態をとる。上端幅は 4.5～ 4.8m、北溝幅 1.8、南溝幅 2.3～ 2.9mを計る。南溝はさらに、北で深く、南で浅い形態をとる。本来北溝と南溝は別の遺構であったかも知れないが、覆土がほとんど同一要素をもっており、同時性を認め単一遺構とした。深さは北溝で65cm、南溝で1mを計る。

覆土は大部分泥炭層であり、白色粘土層と交互に堆積している。覆土の状況は北・南溝共同一である。

本址出土遺物はわずかであるが、南溝からかわらけ（44図3－1）が出土している。

出　土　遺　物

1．かわらけ杯。推定口径14.4、推定底径 9.0、高さ 3.4cmを計る。平底から内湾する体部へ移行する。口縁は比較的尖る。外面はナデが加えられている。胎土は細かく、淡黄褐色を呈する。

d．4　号　溝（J4D）

本址は調査区の南に位置する。調査部分は溝の西端の一部のみであり、若干南にふれるがほぼ東へ向けて伸びる様相である。上端幅 3.1m、深さは北側で一段深くなり70cmを計る。深くなった部分の溝幅は 1.6mを計る。

当初1号溝と連続するものと思われたが、本址覆土中に多量の破砕されたかわらけがあたかもかわらけの中に土砂を含むごとくに検出され、1号溝とは明瞭に区別されるに至った。又、本址覆土は大部分が泥炭層である点も1号溝と異なる。

出土したかわらけは大部分が小片であり、かつ表面が摩耗している為、図示し得るものは一点のみである（44図4－1）。その他瓦片が二点（44図4－2、3）が出土している。

本址の土層は以下のとおりである。

1層…かわらけの小片と木炭混在層。

2層…灰褐色粘土層。

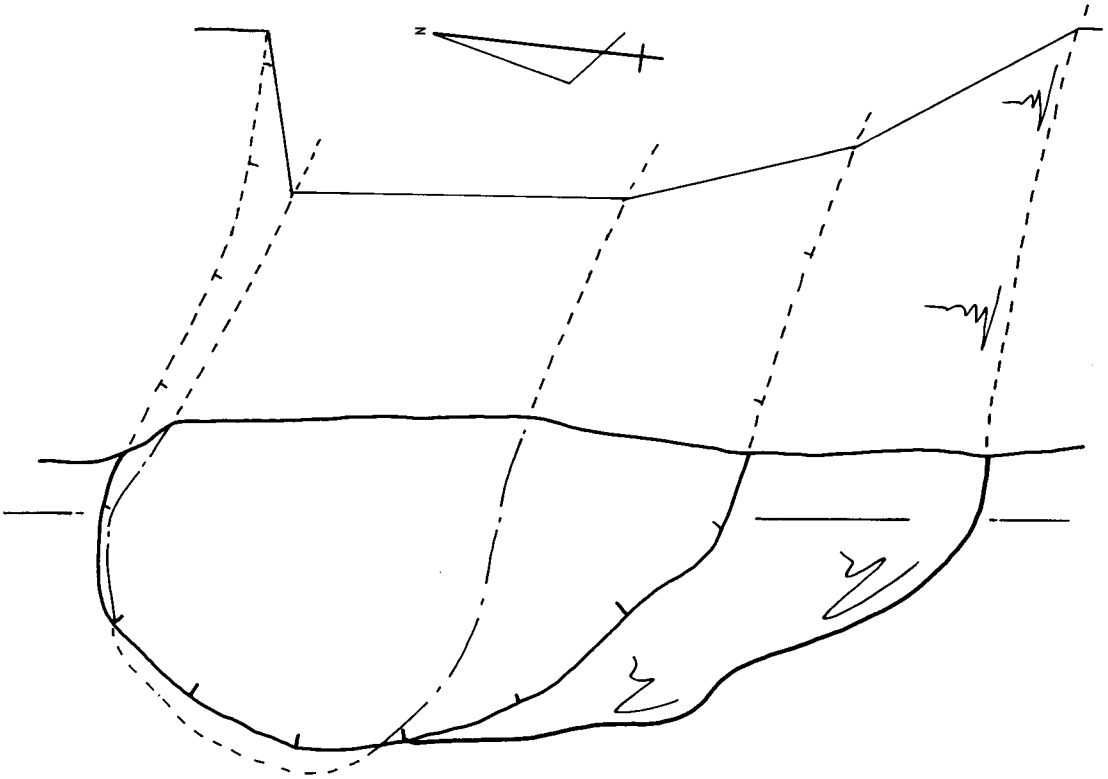
3層…木炭・灰混在層。

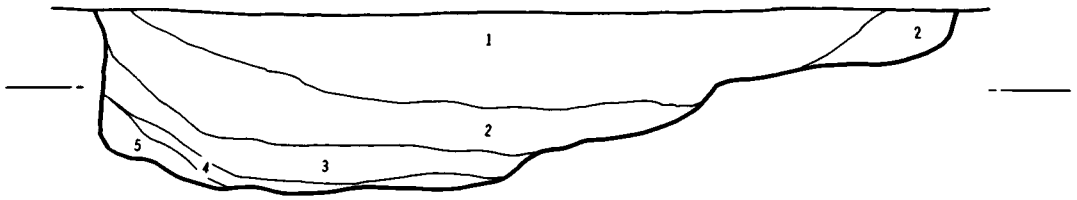
4層…黒褐色土層。

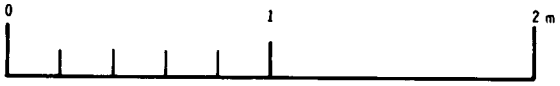
5層…灰混入茶褐色粘土層。

出　土　遺　物

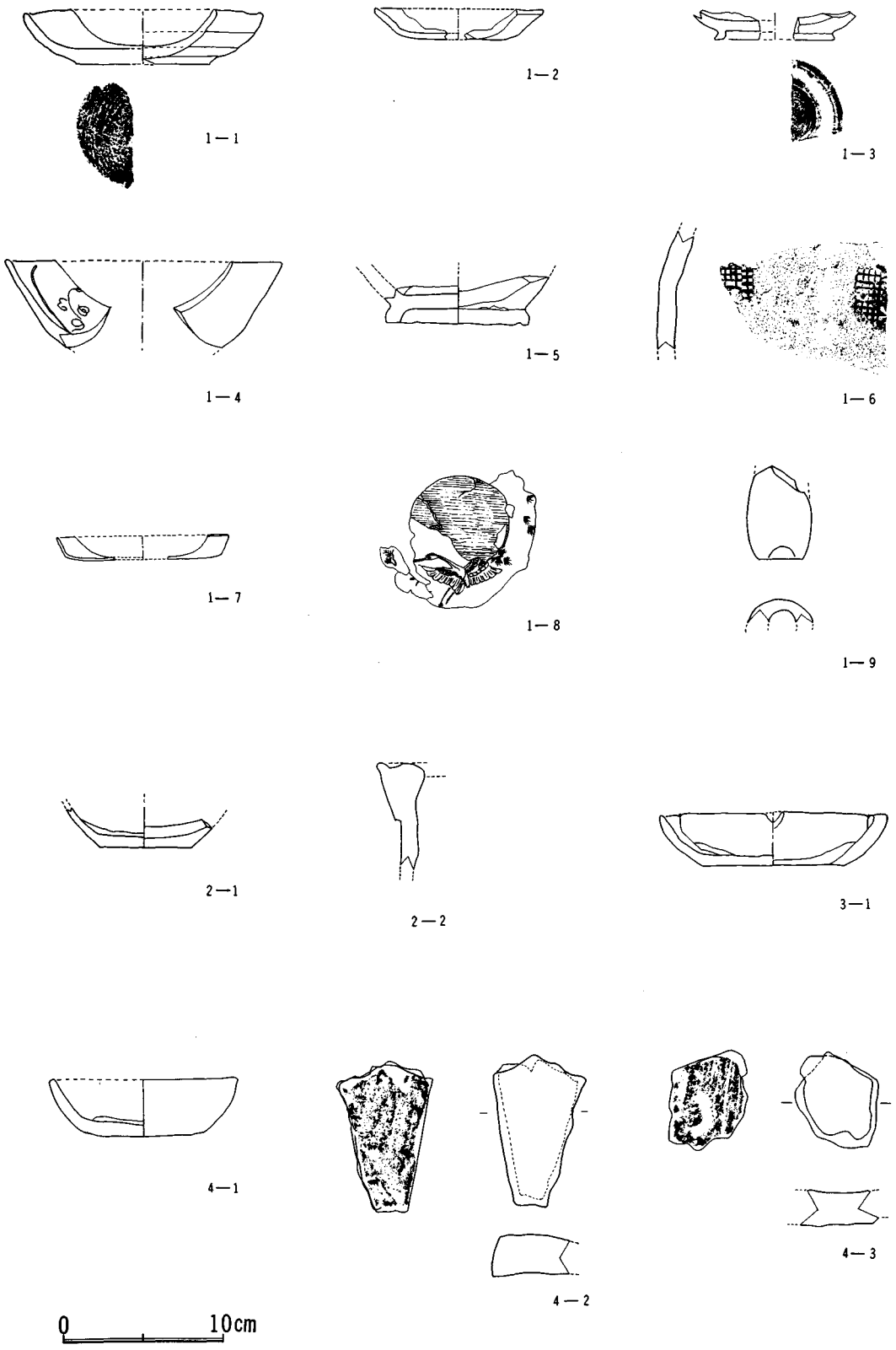
1．かわらけ杯。口径11.8、底径 6.0、高さ 3.7cmを計る。丸底風の底部から下端に窪みをもって内湾する体部へ移行する。口唇部は丸く仕上げられており、全体に厚く造られている。全面に水拭きされており整形痕を残さない。胎土は細かく、淡黄色を呈する。







第 43 図　4　　号　　溝



第 44 図 溝 址 出 土 遺 物

2．瓦。厚さ 2.4cmを計る。裏面に撚糸文をもつ。胎土は粗く瓦質であり、内面は灰白色、表面は黒褐色を呈する。

3．瓦。厚さ 2.2cmを計る。裏面に撚糸文をもつ。様相は2と同じであるが、胎土は粗く内面は黄白色を呈する。

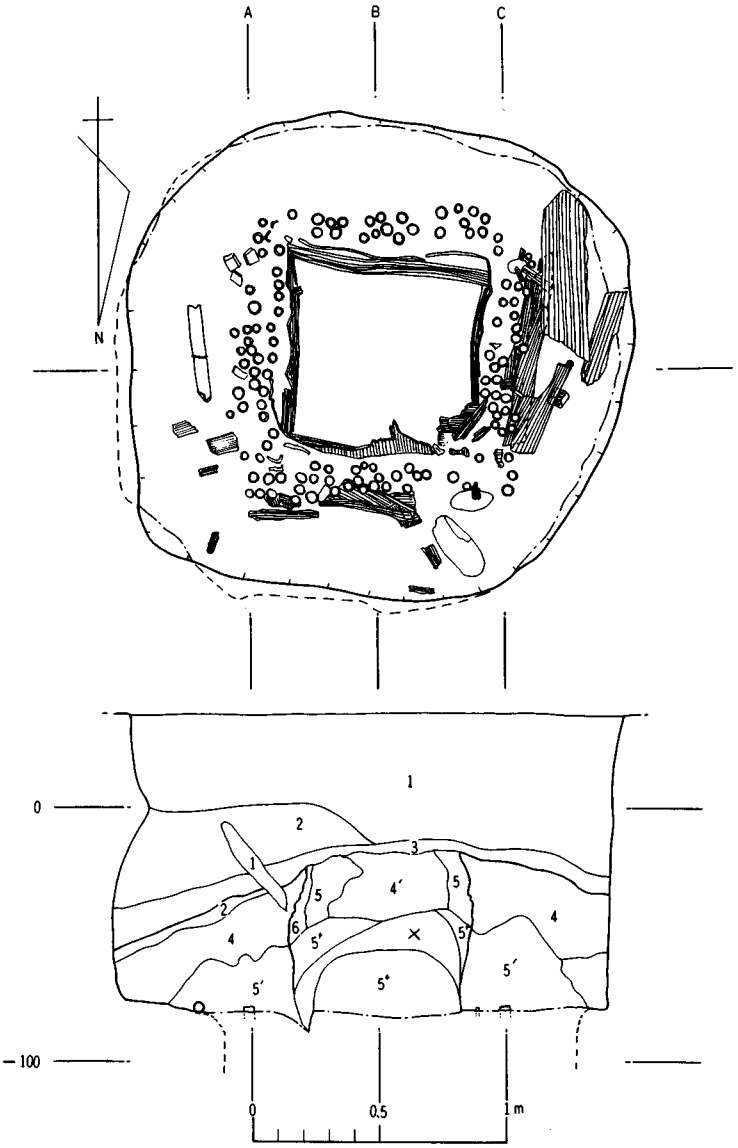
5．井 戸 址

a．1 号 井 戸 址（J1W）

本遺構は調査区の南寄り、4号溝の北に位置する。

直径 190～ 210cmの円形を呈する土坑が、深さ55～80cmに掘り込まれ、さらにその中央部は一辺70cm前後のほぼ正方形に掘り込まれている。方形の掘り込みの深さは60cmを計る。土坑の下部には内法70cm、方形の横桟が組まれ、横桟の外周には各々4枚の板材を井戸側として縦に配している。板材の外側には添板としてそのすき間を埋めるように小板材を当てがっている。さらにその外部には20cmの幅内に竹材を突きさしている。これら縦に配された板材および竹材の上端は切断あるいは加工された面が全く無い。このことから、井戸枠および、水捌用の竹組はさらに上方へ連続していたと考えられる。

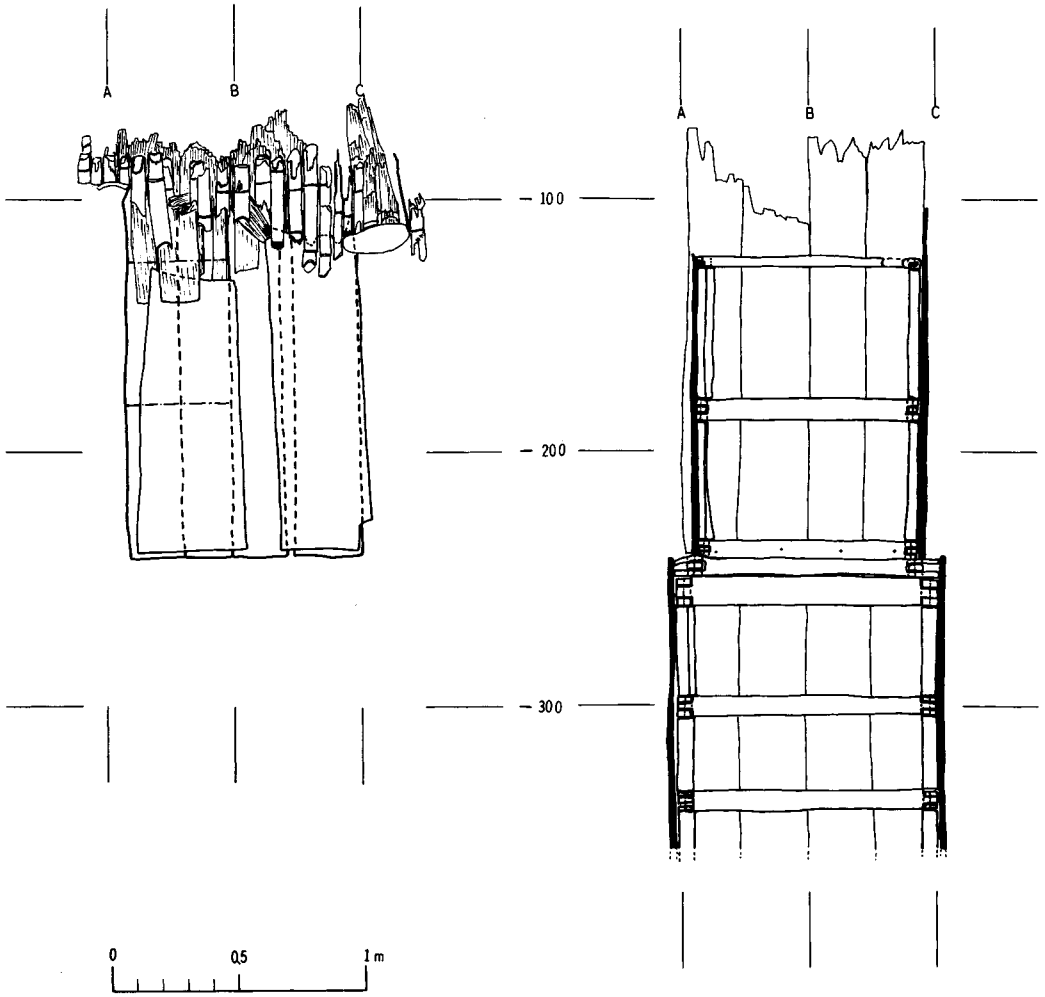
横桟は7段まで確認された（最下部まで到達していない為上位の横桟から順次1～7段と呼称する）。1段桟は破壊がはげしいが、材の横幅6cm、縦幅 4.5cmを計る。各材の組み方はほぞ組みであるが、北・南両面が凹、東・西両面が凸材



第 45 図　1号井戸址（1）平面の土層

である。組み部には竹釘が打ち込まれている。2段桟は横幅5cm、縦幅9cmを計る。組み方は1段桟と同様であり、やはり竹釘が打ち込まれている。2段桟の四隅には一辺5cm四角で長さ53cmの角材を縦に配置し、それに1段桟を乗せている。縦の支柱材と桟材の接合は、釘等は使用されておらず、単に乗せられているだけである。3段桟は横幅 4.5cm、縦幅7cmを計る。組み方は1・2段桟と同様である。2段桟から3段桟に至る支柱は、一辺5cm四角で長さ48cmを計る。1～3段桟は同一規格でつくられており外法87cm、内法78cmを計る。4段桟は3段桟に接しており、横幅6cm、縦幅 6.5cmを計る。組み方は上段の桟と同様であるが、ほぞが、材の横幅の倍切り込まれており、凹材の先端が外にはみ出すようになっている。つまり、北・南に配された材が長さ 104cmあり、東・西に配された材の長さは93cmあるものの、内法は81cm、外法は93cmを計るのみである。3段桟との外法差は各辺3cm有り、そこに、上端に至る縦材を乗せている。3段桟には縦材1枚に付き1本鉄釘（角釘）が打たれており縦材を固定している。

5段桟は4段桟に接しており横幅6cm、縦幅11cmを計る。組み方は上段のものと逆であり、北・南両面が凸材、東・西両面に凹材が配されている。内法は91cm、外法 103cmを計る。6段桟は横幅



第 46 図　1号井戸址（2）上段・北面・立面(左)同北面徐去後立面(右)

6cm、縦幅8cmを計る。組み方は5段桟と同様である。5段桟から6段桟に至る支柱は6cm四角で長さ35cmを計る。7段桟は横幅6cm、縦幅8cmを計る。組み方は5・6段桟と同様である。6段桟から7段機に至る支柱は6cm四角で長さ29cmを計る。さらに下部へ連続しているのであるが、周辺土層が軟弱な為、周辺の壁が崩れて危険であるのでここで作業を中止した。

さて、本井戸址は、最下段まで調査はされていないが、一応以下のことが要約しうる。

①各段横桟はほぞ接合されており、その枠自体の接合の為には竹釘が使用されていること。②そのうち1～3段桟は北・南両面が凹材であり東・西両面が凸材を配していて、5～7段桟がその逆であること。③4段桟は組み方が上段と同様であり上段の井戸側となっている板材を乗せている反面、北・南両面の凹材の長さは下段と同一であり、下段の井戸側板材の最上接合点となっているなど、まさに上・下段の接点の役割を果たしていること。④上段・下段別々に各辺4枚の縦板材を使用して井戸側を構成しており、板材の下端は鉄釘（角釘）で枠材に接合されていること。⑤上段と下段で内法（外法）に差があり、前者が小であること。⑥各段桟を連結する支柱は下方に従って短くなっていくこと。等の構築法をみることができた。

以上は、木材で構成された、井戸枠自体の特色であるが、上端土坑部における特色は、一括して⑦上部は円形の土坑であり、その中央部に板材を用いた方形の枠を有する。また、上端の枠組周囲には竹を縦につきさして水捌を備えていることである。

土層は以下のとおりである。

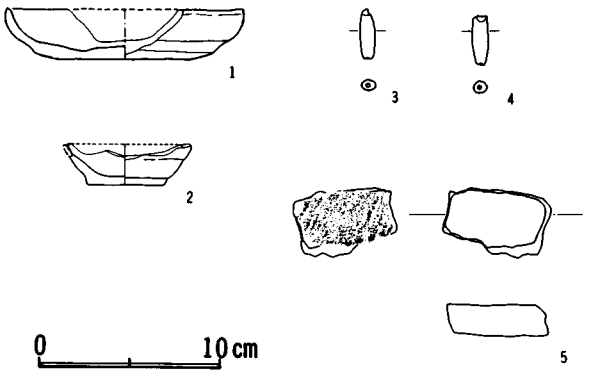
1……木炭混入茶褐色粘土。
2……茶褐色粘土。
3……鉄分の凝固した層。
4……灰褐色粘土。
4′……黄褐色粘土・灰褐色粘土混在層。
5……青色粘土。
5′……やや黒ずんだ青色粘土。
5″……黒ずんだ青色粘土。
×……空洞。

本址出土遺物はかわらけ杯（47図1）手づくねかわらけ杯（47図2）の他、小形土錘（47図3・4）瓦（47図5）がみられる。また鞴の口と思われるもの（ＰＬ54）が出土しており、4号溝から出土したものと復元されている。

出　土　遺　物

1．かわらけ杯。推定口径13.2、底径7.0、高さ2.9cmを計る。全体に強く内湾しており丸味を帯びる。径が大きく高さの低い形態をとる。全体に水拭きを施しており、整形痕は不明である。体部下位に強くナデた痕がみられる。胎土は細かく淡黄色を呈する。

2．かわらけ手づくね杯。口径7.0、底径4.3、高さ2.3cmを計る。平底から



第47図　1号井戸址　出土遺物

外傾する体部へ移行する。上位に移行するにしたがって、序々に器肉が薄くなり口唇部は尖る様になる。胎土は細かく緑がかった黄白色を呈する。

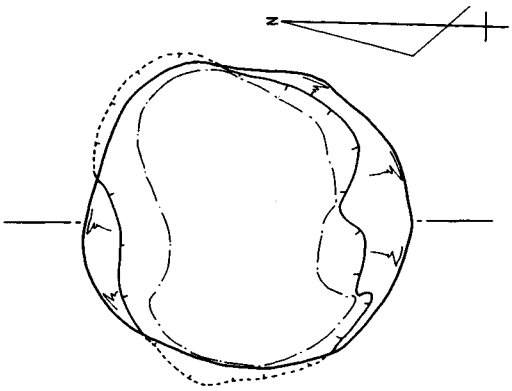
3．4．土錘。小形品である。

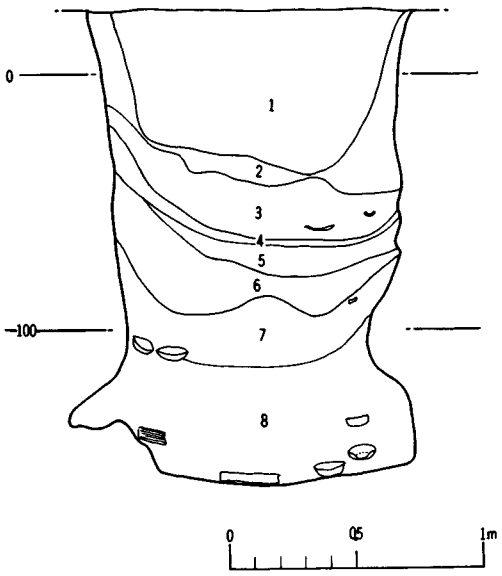
5．瓦。厚さ 1.6cmを計る。表面は擦痕があり裏面は撚糸文が付される。胎土は粗く、表面が黒色を呈する以外は灰白色を呈する。

b．2 号 井 戸 址（J 2 W）

この土坑は、東西 1.2m、南北 1.3mのほぼ円形で、深さは1.85mである。概円筒形であるが、底から1/3程度の所で北東部と西部が拡がっている。

覆土の土層は、第1層が焼土・木炭及び土器の木片を多量に含む淡黄褐色土で、下部に砂が少し含まれる。第2層は、1層から3層への漸移層であり、1層に較べ木炭の含有量が増し小さな土器片が含まれる。第3層は、木炭・灰を多量に含む黒色の灰の層である。第4層は、焼土層で、5層は3層とほぼ同様である。6層は、前の4・5層に較べ灰の含有量は少くなるが、下部に灰層をもつ。7層は、木炭層であり6層以上に灰の含有量が少くなる。8層は、7層と同様であるが、崩れた壁土の細粒を多量に含んでいる。





第 48 図　2 号 井 戸 址

出土遺物は1・2層ではかわらけ小片のみで、3層になって下部が欠けた土器が出土している。その後、5・6層ではあまり遺物がみられなかったが7・8層で完形または一部欠損した土器が、多数出土している。8層の底の部分では木片や竹・青石なども出土した。

出 土 遺 物

1～21はかわらけ杯。22～24かわらけ小型杯。

1．口径13.3、底径 7.0、高さ 3.9cmを計る。切り残しの段を有する平底から腰が強く張り出し、内湾しつつ直立する体部へ移行する。口縁はほぼ直立し丸味をもつ。内面底部中央は凹む。外面底部中央は直径 1.8cm、深さ4mmの渦巻状の穴が穿たれている。全体に厚く作られている。底部右回転糸切り。体部は水挽き痕を残す。外面下位は横方向のナデ、内面底部の周辺は指頭によるナデが強く施されている。胎土は非常に細かく、淡黄褐色を呈する。

2．口径11.7、底径 5.8、高さ 3.6cmを計る。

平底から外傾する体部に移行し口縁部はわずかに直立気味になる。口縁はつまみ上げられ尖ってくる。内面底部中央は凹む。外面底部中央に6×12cmの長方形の穴が穿たれている。糸切りの後外周部を削りにより調成、体部外面は水挽きののち横方面のナデがずい所に見られる。内面体部は水挽き痕をのこす。内面底部周辺は指頭によるナデを施している。胎土は細かく黄褐色を呈する。内面口縁部に煤の付着がみられる。

3．口径12.1、底径 6.4、高さ 3.8cmを計る。平底の底部から内湾する体部へなめらかに移行する。口縁部はほぼ直立する。内面底部中央は盛り上りを持つ。底部右回転糸切り。体部は内面に水挽き痕を残すが外面は水拭きを施しており、ほとんどその痕跡を残さない。内面底部周辺は指頭によるナデが施されている。胎土は非常に細かく黄白色を呈する。

4．口径12.5、底径 6.4、高さ 3.7cmを計る。切りのこしの段を有する平底から内湾する体部に移行する。口縁部はほぼ直立する。内面底部中央は盛り上りをもつ。外面底部中央にわずかな凹をもつ。底部右回転糸切り。体部は全体に横のナデが加えられており、体部下半は水拭きを施す。内面底部周辺は指頭によるナデが強く施されている。砂粒を多く含み青味がかった黄白色を呈する。

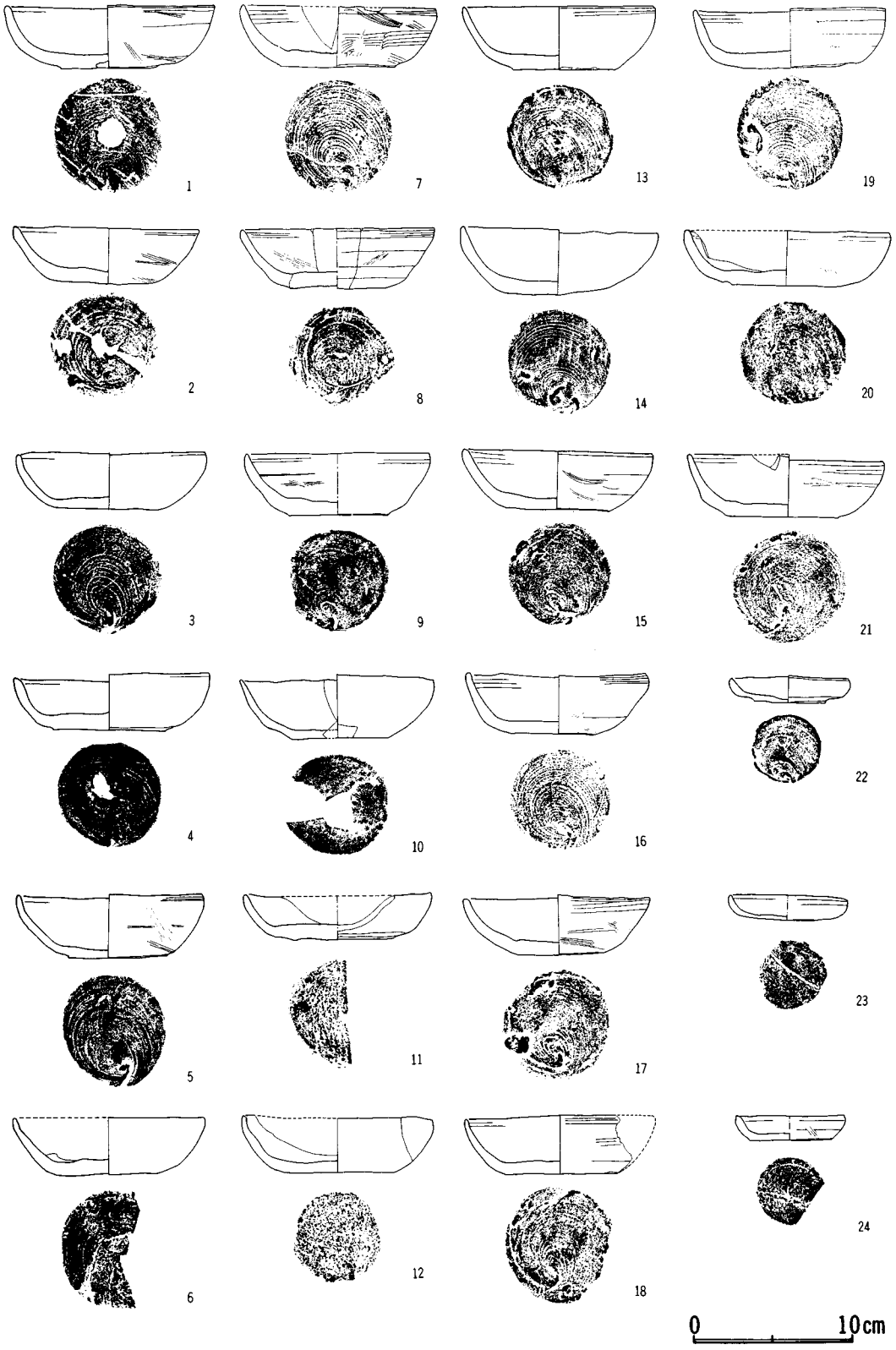
5．口径11.9、底径 6.5、高さ 4.1cmを計る。わずかに切り残しをもつ平底の底部からゆるやかに内湾する体部に移行する。口縁はほぼ直立しつまみ上げられており先端部は尖る。内面底部中央は凹む。底部右回転糸切り。体部は外面に水拭きを施し内面は横のナデを施す。内面周辺部は指頭によりわずかにナデられている。胎土は細かく、淡黄色を呈する。

6．口径12.2、底径 6.5、高さ 3.7cmを計る。若干上げ底風な平底の底部からわずかに内湾しながら外傾する体部へ移行する。口縁はつまみ上げられて直立する。内面底部はほぼ水平。底部右回転糸切り。内面底部周辺には凹みが有り、指頭によってナデが施されたと思われる。全体に表面が、剝離しており成形痕はほとんどのこっていない。胎土は細かく淡黄色を呈する。

7．口径12.4、底径 7.0、高さ 3.8cmを計る。切り残しを有する平底の底部から腰がわずかに張り内湾する体部へ移行する。口縁はつまみ上げられてはいるが丸く仕上げられほぼ直立する。内面底部中央は凹む。全体に厚く作られている。底部右回転糸切り。体部は回転ナデの痕跡をよく残し、外面は水拭きを加える。内面底部周辺は指頭によるナデが施されている。胎土は細かく黄白色を呈する。

8．口径12.3、底径 6.1、高さ 3.8cmを計る。平底の底部から腰がわずかに張り外傾する体部へ移行し、口縁は直立気味になる。口縁はつまみ上げられ尖り気味になっている。内面底部中央は若干盛り上がる。底部は右回転糸切り。体部は内外面共水挽き痕が明瞭に残っている。部分的に斜のナデを施す。内面底部周辺は指頭によるナデを施している。胎土は細かく、淡黄色を呈する。

9．口径11.8、底径 6.4、高さ 3.9cmを計る。切り残しをもつ平底底部から内湾する体部に移行する。口縁部はつまみ上げられている。全体に厚く作られている。右回転糸切り。体部上半は内面のみ水挽き痕がわずかに残る。体部外面はほぼ全体に水拭きされており、水挽き痕を全く残さない。内面底部周辺は指頭によるナデが施されている。胎土は細かく、内面は赤褐色を帯びた淡黄色、外面は黒ずんだ淡黄色。



第 49 図　2 号 井 戸 址 出 土 遺 物

10．口径12.4、底径 6.2、高さ 4.0cmを計る。平底の底部から内湾する体部へ移行する。口縁はつまみ上げられておりほぼ直立する。内外面共水拭きが施され底部切離しも不明である。内面底部周辺はわずかに凹をもち指頭によるナデが加えられたものと思われる。胎土は細かく、淡黄色を呈する。

11．口径12.0、底径 6.4、高さ 2.9cmを計る。切り残しの段を有する。平底の底部から腰が強く内湾する体部へ移行する。口縁はほぼ直立し丸味をもつ。内外面底部共水拭きが施され、全体に丸味をもつ。内面底部周辺は大きく凹み、指頭によるナデが強く施されている様である。胎土は細かく淡黄色を呈する。

12．口径12.0、底径 6.0、高さ 3.7cmを計る。平底の底部から腰がわずかに張り内湾する体部へ移行する。口縁はやや丸く仕上げられておりほぼ直立する。内外面底部共水拭きが施され全体に丸味をもつ。しかし内面底部周辺はわずかに凹をもち指頭によるナデが加えられたものと思われる。胎土は細かく淡黄色を呈する。

13．口径12.2、底径 6.4、高さ 3.9cmを計る。切り残しをもつ平底の底部から内湾する体部へ移行する。口縁は丸味をもつ。内面底部中央は若干ふくらむ。底部右回転糸切り。体部は水挽き痕をのこす。内面はナデが加えられその痕跡が消されている。内面底部周辺は指頭によるナデが加えられている。胎土は細かく淡黄色を呈する。

14．口径12.5、底径 6.3、高さ 4.2cmを計る。わずかに切り残しの段を有する平底から、わずかに腰が張り内湾する体部へ移行する。口縁は丸く仕上げられておりほぼ直立する。底部右回転糸切り。体部は全面水拭きを加える。内面底部周辺にはその後指頭によるナデが加えられている。胎土は細かく、淡黄色を呈する。

15．口径12.2、底径 6.2、高さ 3.7cmを計る。若干の切り残しを有する。平底の底部から内湾する体部に移行する。口縁は丸く仕上げられておりほぼ直立する。全体に厚く作られている。底部右回り回転糸切り。体部は内外面共水拭きが加えられており、水挽き痕は明瞭でない。内面底部周辺は指頭によるナデが施されている。胎土は細かく淡黄色を呈する。

16．口径11.7、底径 6.3、高さ 3.9cmを計る。切り残しをもつ平底の底部から腰が若干張り内湾する体部へ移行する。口縁はつまみ上げられておりほぼ直立するが丸味をもって仕上げられている。底部は右回転糸切り。体部は水挽き痕を残す。外面はそれにナデを加えている。内面底辺は指頭によるナデが施されている。胎土は細かく淡黄色を呈する。

17．口径11.8、底径 6.0、高さ 3.8cmを計る。切りのこしを有する平底の底部から内湾する体部に移行する。口縁は丸く仕上げられておりほぼ直立する。全体に厚く作られている。底部は右回転糸切り。体部は水挽き痕を残すが、内外面共水拭きを施し、大部分消されている。内面は特に多くナデが加えられている。内面底部周辺は指頭によるナデが施されている。胎土は細かく淡黄色を呈する。

18．口径12.0、底径 6.2、高さ 3.8cmを計る。平底の底部から内湾する体部に移行する。口縁はつまみ上げられほぼ直立する。全体に厚く作られている。底部右回転糸切り。体部は水挽き痕をそ

のままのこす。内面底部周辺は指頭によるナデが施されている。胎土は細かく淡黄色を呈する。

19．口径12.1、高さ 3.7cmを計る。切り残しの段を有する平底の底部から腰が強く張り出し大きく内湾した体部へ移行する。口縁はほぼ直立し丸味をもつ。全体に厚く作られている。底部右回転糸切り。体部は水挽き痕を残している。外面の一部にはナデを加えている。内面底部周辺は指頭によるナデが強く施されている。胎土は細かく淡黄色を呈する。

20．口径13.0、底径 6.8、高さ 3.6cmを計る。切り残しの段を有する平底の底部から腰が強く張り出し大きく内湾した体部へ移行する。口縁はほぼ直立して丸味をもつ。全体に厚く作られている。底部右回転糸切り。体部は水挽き痕を残している。外面の一部にはナデを加えている。内面底部周辺は指頭によるナデが施されている。胎土は細かく淡黄色を呈する。

21．口径12.5、底径 6.9、高さ 3.9cmを計る。わずかに切り残しをもつ平底の底部から内湾する体部へ移行する。口縁は丸く仕上げられている。底部右回転糸切り。体部は水挽き痕を残している。外面の一部にはナデを加えている。内面底部周辺は指頭によるナデが施されている。胎土は細かく淡黄色を呈する。

22．口径 7.7、底径 4.3、高さ 1.8cmを計る。切り残しをもつ平底の底部から腰が大きく張り内湾する体部に移行する。先端部はつまみ上げられていて尖っている。底部右回転糸切り。全体にナデが加えられ詳細は不明であるが、内面底部周辺は凹んでおり指頭によるナデが加えられたと思われる。胎土は細かく黒ずんだ黄白色を呈する。

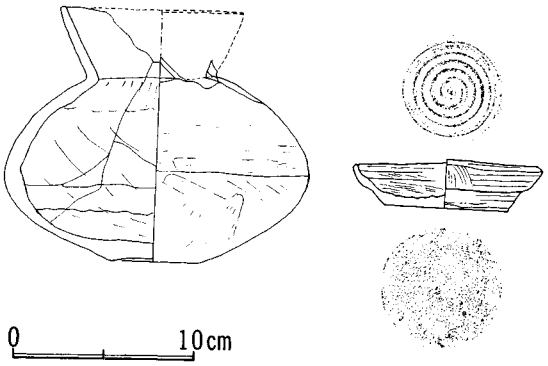
23．口径 7.6、底径 4.5、高さ 1.7cmを計る。若干上げ底風な底部から腰が大きく張り内湾する体部に移行する。先端部はつまみ上げられていて尖っている。底部右回転糸切り。体部は水挽き痕が残る。内面底部周辺は指頭によるナデが施されている。胎土は細かく淡黄色を呈する。

24．口径 7.0、底径 4.2、高さ 1.6cmを計る。切り残しをもつ平底の底部から腰が大きく張り内湾気味の体部に移行する。先端部はつまみ上げられていて尖る。底部右回転糸切り。体部は水挽き痕が残るが外面は指頭によるナデが施されている。胎土は細かく黒ずんだ淡黄色を呈する。

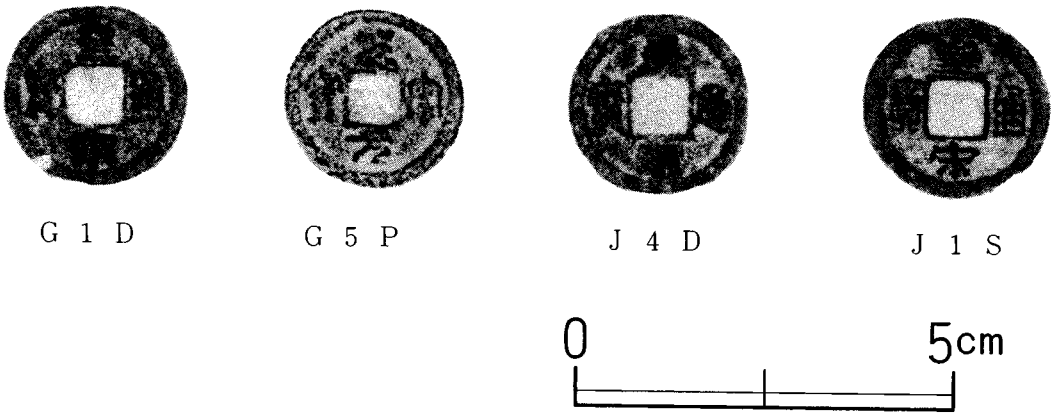
6．遺 跡 周 辺 出 土 遺 物

1．壺。推定口径10.2、底径 4.8、括れ径 7.2、胴部最大径16.8、高さ14.0cmを計る。上げ底風の底部から、倒卵状に大きく脹らむ胴部へ移行する。頸部で鋭く括れ、口縁は直線的に外傾する。口唇部は若干内湾気味になる。口縁部は横ナデ、胴部上半は横の削り様のナデ、下半は横あるいは縦の削り様のナデが施されており、胴部中央でわずかに稜をもつ。内面上位は指頭による縦のナデ、中位以下はヘラ状工具による斜あるいは横のナデが施されている。胎土は細かいが、砂粒を多量に含みざらつく。外面は赤味を帯びた淡黄褐色、内面胴部は赤褐色を呈する。

2．かわらけ杯。常光院北堀出土。



第 50 図　遺跡周辺出土の遺物



第 51 図　出 土 古 銭 拓 影

V．考　察

1．出　土　遺　物

中条遺跡群の権現山・常光院東両地区から出土した遺物は、土師器・須恵器・灰釉・かわらけ・その他陶器類等多種類に及ぶ。これらの出土遺物について、順次分類し、若干の検討を加えてみたい。なお、出土遺構名は略名（例言７）を使用する。

a．土　師　器

壺　形　土　器

Ｇ１Ｈから２点、Ｊ５Ｈから２点出土している。その他、Ｊ５Ｈ－４、周辺出土－１は坩形土器であり、ここでは一応除外する。

Ⅰ……Ｇ１Ｈ－８

大きく外傾し、横ナデが施される復合口縁から、丸味をもつ胴部へ移行する。口縁部全体は比較的短く、復合部幅と頸部幅がほぼ同一である。

Ⅱ……Ｇ１Ｈ－９、Ｊ５Ｈ－５

胴部が球形に脹れる。Ｇ１Ｈ－９例の胴部は多少つぶれた球形を呈し、最大径を中位にもち、斜・横の削りが丁寧に施されている。Ｊ１Ｈ－５例の胴部は下位のみ保存しているにすぎないが、同様の脹らみをもつものである。Ｇ１Ｈでは９の他、同種の胴部破片がみられ、その内には櫛状工具によって斜のナデを施しているものもある。９の口縁は、鋭い稜をもって大きく外反する二重口縁であり、上部幅は広いが、下部幅が狭いため、全体では短いものである。

Ⅲ……Ｊ５Ｈ－６

小さな平底から、やや大きな脹らみをもつ胴部へ移行する。小型の壺である。

なお、Ｊ５Ｈ－４の坩は、上げ底から、つぶれた球形の胴部、滑らかに括れてわずかに外傾する口縁へ移行する形態をとるものである。周辺出土－１の坩は大型であり、上げ底から倒卵形の胴部、鋭く括れて外傾する口縁へ移行する。口縁はわずかに内湾し、短い。

甕　形　土　器

Ｇ１Ｈから７点、ＧＭから１点、Ｊ１Ｈから３点、Ｊ２Ｈから２点、Ｊ３Ｈから３点、Ｊ３Ｐから２点、Ｊ４Ｐから１点、Ｊ７Ｐから３点、Ｊ８Ｐから１点、Ｊ３Ｓから２点が実測可能であった。

Ⅰ……Ｇ１Ｈ－１・２・３・５・６

口縁は短く、直線的に外傾し、内面に丸味をもち、器肉を減ずる。鋭角的な括れから、最大径を中位もしくは、それよりやや上方にもち、脹らむ胴部へと移行する。２は括れ幅が小さく、形態的には壺に近い。

Ⅱ……Ｇ１Ｈ－４・７

口縁は外反し、器肉を減じない。胴部への移行は滑らかであり、胴部はあまり脹らみをもたない。最大径を胴部中央やや上位にもつ。

Ⅲ……GM－5

縦に長く、大きな脹らみをもつ胴部から鋭く括れ、わずかに外反する厚手の口縁へ移行する。

Ⅳ……J3H－5

大きく外傾する口縁から、ほとんど脹らみをもたない胴部へ移行する。最大径を口縁にもち、胴部最大径をその上位にもつ。口縁は横ナデ、胴部は縦のヘラ削りが主体であり、上端および他の一部に斜のヘラ削りを加えている。

Ⅴ……J2H－3、J3H－3・4

口縁は、全体では大きく外反する形態をとるが、中位で角度の変換をみせる。肩部が張り、あまり脹らみをもたない胴部である。最大径は胴部上位にもつ。口縁は二重の横ナデ、胴部は横あるいは斜の削りを施している。

Ⅵ……J3P－4、J4P－1、J8P－1

コの字状の口縁から、上位に脹らみをもつ胴部へ移行する。胴部上位は横のヘラ削り、中位および下位は、縦のヘラ削りを施している。

Ⅶ……J7P－3・4

口縁は、下位が内傾し、上位が外反する。胴部は肩が張る形態をとる。口縁は三度の横ナデ、胴部上位は横のヘラ削りが施されている。

Ⅷ……J2H－4

台付甕である。口縁は短く、外面に脹らみをもって外反する。胴部は上位に脹らみをもって、直線的に台部へ収束する。台部は、裾に向けて大幅に器肉を減じ、内面中央が平担面をもたない。口縁は横ナデが施されているが、括れ上位まで、胴部上位に施している横の削りが及んでいる。胴部中位および下位は縦のヘラ削りが施されている。台部は全面横ナデが施されている。

Ⅸ……J1H－24・25、J3P－5、J7P－5、J3S－9・10

台付甕である。口縁は下半がほぼ直立し、上半は外傾する。全体で外反するような形態をとる。胴部は球形に脹らむ。台部は胴底部と同一の器肉に整えられ、内面天井に平担面を造り出している。口縁は二度の横ナデ、胴部上半は横のヘラ削り、下半は縦のヘラ削り、台部は横ナデが各々施されている。なお、台部内面の天井部はナデによって造り出されている。

Ⅹ……J1H－26

台付椀というべきものである。台が低く、全体に器肉が薄い。胴部下位はわずかに脹らみをもつ。台部は天井に平担面をもち、滑らかに開く。胴部下半は、縦あるいは斜のヘラ削りが施されている。台部整形はⅨ類と同一である。

杯 型 土 器

G1Dから1点、J3Hから1点、J4Hから2点、J6Pから2点、J9Pから1点、J3Sから2点出土している。

Ⅰ……G1D－1

口縁はわずかに内傾し、口唇内面に窪みをもつ。蓋受けの稜は明瞭であり、丸底へ移行する。典

型的な須恵器模倣杯である。

II……Ｊ３Ｈ－１、Ｊ６Ｐ－１・２

全体に丸味をもつ。口縁は横ナデが施されており、ほぼ直立する。体部はヘラ削りが施されている。

III……Ｊ９Ｐ－１

丸味をもつ底部から、腰が張り、上位がほぼ直立する体部から口縁下位へ移行する。口縁上位は、さらに一段外方へ張り出し直立する。胴部下位から底部はヘラ削り、上位はこれにナデが加えられる。口縁は二重の横ナデが施されている。

IV……Ｊ４Ｈ－１、Ｊ３Ｓ－２

丸味をもつ底部から、腰が張り、外傾する体部へ移行する。口縁はさらに大きく外傾する。口縁は横ナデ、体部から底部は全面ナデが施されている。

V……Ｊ４Ｈ－２、Ｊ３Ｓ－１

平底から、脹らみをもつ体部、外反する口縁へと移行する。底部は右回転糸切りによって切り離されている。体部はナデ、口縁部は横ナデが施されている。Ｊ４Ｈ－２は、Ｊ３Ｓ－１に比して腰が張り、口径も大きい。また、いわゆる土師器と異なり、土師質とよぶべきものである。

高 杯 型 土 器

Ｇ１Ｈから８点、ＧＭから３点、Ｊ５Ｈから３点出土している。

I……Ｇ１Ｈ－13・16・17・18

脚はほとんど脹らみをもたず、直線的であり、下位の開きもわずかである。裾は湾曲して下方へ広がる。杯部は稜をもつが、体部がわずかに内湾している為、全体に丸くみえる。杯・脚の接合はほぞ接合である。脚部外面は縦のヘラ削りのままのもの、ナデを加えるものの二者がある。内面は全面ナデのもの、上半は指頭によるナデつけを施すものがある。また脚中央に円孔を穿つものもある。４例のうち２例が外面に朱塗されている。

II……Ｇ１Ｈ－11、Ｊ５Ｈ－１・３

形態はＩ類と同様であるが、ホゾ接合されていないものを区別した。杯部は直線的に外傾するものと、わずかに内湾するものがある。３例中２例に朱塗されている。

III……Ｇ１Ｈ－12・15、Ｊ５Ｈ－２

脚部にわずかな脹らみをもつ。杯部は明瞭な稜をもち、体部は外反する。脚部外面は、縦の磨きおよび磨き様のナデを施す。内面は、ホゾ接合されているものはヘラナデ、そうでないものは、上半に指頭によるナデつけ、下半にナデが施されている。裾部は湾曲して外方へ開く。全例朱塗されている。

IV……Ｇ１Ｈ－４、ＧＭ－９

直線的に下方へ開く脚部から、鋭角的に括れ、直線的に開く大きな裾部へ移行する。脚外面はナデによって縦のヘラ削り痕を消している。内面はヘラによるナデが施されている。ホゾ接合である。胎土自体が朱色を呈している。ＧＭ－７の高杯杯部はおそらく本類に属するものと思われる。

Ⅴ……GM－8

脚部が大きく開く、短く水平に広がる裾部へ移行する。全体に丁寧なナデが施され、朱塗されている。

b．須 恵 器

出土須恵器については、皿・杯・椀の形態分離がはなはだ不明瞭であるので、ここでは器高と口径の比率によって区分した。この比率は、器高÷口径×100 の計算式によって算出したものであり、数値が小さければ皿、大きければ椀に各々近づくものとした。具体的な数値の区別は、皿≦20（口径：器高＝5：1）、20＜杯≦33（口径：器高＝3：1）、33＜椀とした。

杯 型 土 器

GMから1点、G1Dから1点、J1Hから4点、J2Hから1点、J3Hから1点、J6Hから1点、J3Pから1点、J2Sから1点、J3Sから2点出土している。

Ⅰ……G1D－7　　15遺

底部全面回転ヘラ削りであり、腰が強く張り外傾する体部から口縁へ直線的に移行する。全体に浅い形態をとる。

Ⅱ……GM－3

底面は全面に回転ヘラ削りされている。この底面からほとんど水平に腰が張り出し、体部から口縁にかけてわずかな角度をつけて外傾する。

Ⅲ……J3H－2

底面は右回転糸切り後、周辺部を回転ヘラ削りしている。体部は底面から直接約45度に外傾する。体部に水挽き痕を残している。本例は白色針状物質を含有している。

Ⅳ……J1H－3、J2H－1、J2S－1

底面は回転糸切りのままであるが、J2H－1例は、体部下半のナデが底部周辺にまで及んでいる。体部は脹らみをもって外傾し、口縁部はわずかに外反する。底径：口径≒1：2であるが、J1H－3例は底径がやや大である。本類は全て白色針状物質を含有する。

Ⅴ……J6H－2、J2S－2、J3P－1

底面は回転糸切りのままであり、上げ底状になっている。腰に丸味をもち、体部は外傾する。口縁は短く外反する。

Ⅵ……J3S－3

底面が回転糸切りのままで、上げ底状になっているが、体部・口縁はⅢ類と同様である。

Ⅶ……J1H－1・2・4

底面は回転糸切りのままで、上げ底状になっている。体部はわずかな脹らみをもち外傾し、口縁は大きく外反する。

椀 形 土 器

J4Hから3点、J1Sから1点、J3Sから1点出土している。

Ⅰ……J4H－3・5

底面は回転糸切りのままで、ほぼ平底である。体部から口縁にかけて一直線となって外傾する。形体的に杯形土器に近いものである。

II……Ｊ４Ｈ－６、Ｊ１Ｓ－２、Ｊ３Ｓ－４

底面は回転糸切りのままで、ほぼ平底であるが、上げ底を呈するものもある。体部はわずかに脹らみをもち、口縁はわずかに肥厚し、外反する。

高台椀形土器

Ｇ１Ｄから１点、Ｊ１Ｈから11点、Ｊ４Ｈから２点、Ｊ６Ｈから１点、Ｊ３Ｐから１点、Ｊ７Ｐから２点、Ｊ３Ｓから４点出土している。全体に生焼けが多い。

Ⅰ……Ｊ４Ｈ－７・８

高台は低く、ほぼ直立する。体部から口縁のつくりは、椀形土器II類と同一である。

II……Ｊ１Ｈ－６・10、Ｊ６Ｈ－１、Ｊ３Ｓ－５

高台はあまり高くなく、ほぼ直立する。Ⅰ類に比して、体部の脹らみが大きく、口縁の外反の度合も大きい。

III……Ｊ１Ｈ－５・９・11・12、Ｊ３Ｓ－６

高台はわずかに開き、端部を丸く仕上げている。体部は脹らみをもち、口縁は外反する。いずれもII類より、若干その度合が強い。

Ⅳ……Ｇ１Ｄ－８、Ｊ１Ｈ－７・８・14・15、Ｊ３Ｓ－８、Ｊ３Ｐ－２、Ｊ７Ｐ－１・２

高台が八の字状に開き、高い。椀のつくりはIII類と同様である。大型品も含まれる。

Ⅴ……Ｊ１Ｈ－13、Ｊ３Ｓ－７

高台部はⅣ類と同様であるが、椀は腰が張り、強い丸味をもつ。大型品に限られている。

皿形土器

Ｊ１Ｈから７点、Ｊ４Ｈから１点出土している。

Ⅰ……Ｊ１Ｈ－16・17

平底から、ほぼ直線的に大きく外傾する体部へ移行する。口縁は短く、ほぼ水平に外反する。深いつくりであり、杯形土器に近い。

II……Ｊ１Ｈ－18、Ｊ４Ｈ－９

底面が上底を呈し、径が小さくなるが、他のつくりはⅠ類と同様である。

III……Ｊ１Ｈ－19・20

つくりは全てII類と同一であるが、口径・底径共に大きく、皿としての感が強い。口径は15cmを超えるものである。

Ⅳ……Ｊ１Ｈ－21

全体の計測値はIII類とほぼ同一であるが、全面に丸味をもつものである。

Ⅴ……Ｊ１Ｈ－22

平底であり、体部から口縁部全体が外反している。最も浅い形態をとる。

c．か わ ら け 杯

本調査で最も出土量の多い土器群である。かわらけの出土した遺構は、G１D、G４D、J２P、J１D、J２D、J３D、J４D、J１W、J２Wである。G１Dでは、多量し出土したものの、すでに溶解しかけているものが大半であり、図示し得たものは、５点にすぎない。J４Dでは、かわらけのすき間に土が入り込んでいるような感を受けるほど多量に出土したが、ほとんどが細片に破砕されており、特異な状況を呈するものである。こうして出土したかわらけのうち、図示可能なものは、全体でわずかに44点にすぎない。

出土したかわらけは、整形技法・形態等から、７群14類に区分される。しかし、各群・類に共通する要素も多い。胎土はＩ群を除いて各群共に微細粒である。色調は各群共淡黄褐色を呈するものが多い。底面にみられる糸切り痕は、Ｉ群が左回りであるのを除いて、他は全て右回転である。また、見込み周辺に指頭による押圧ナデを施す技術も、ほとんどの個体にみられるものである。しかし、底面に板状の圧痕をもつものは一例もない。

Ｉ　群（周辺出土－２）

左回転糸切りの平底である。体部下半は直線的に外傾し、一条の沈線をはさんで上半は内湾する。口唇はほぼ直立した恰好となる。見込み内面には、左回転の水挽き痕を残す。見込みを除いて他の部分は全面横のナデが丁寧に施されている。胎土は粗く、砂粒を多量に含有する。口径10.3～10.8cm、底径 6.8cm、高さ 2.4cmを計り、口径と高さの比率は、22.2～23.3を示す（50図－２）。

Ｉ群は他の群と最も異なる群である。本文中に詳細を記していないので、ここで詳細まで述べたものである。なお、本例の出土地点は、中条氏館跡の北堀・北壁で、壁に直接接した位置からであり、昭和56年度の北堀確認の為の試掘で発見されたものである（註－１）。

II　群

腰が強く張り、内湾する体部から、直立し丸く仕上げられる口縁へ移行する。

Ａ　類（Ｇ１Ｄ－３・５、Ｊ２Ｐ－４、Ｊ１Ｗ－１、Ｊ２Ｗ－11）

口径と高さの比率は22～25を示し、浅い形態をとる。見込みの厚さに比して体部が薄い。水拭きを加える。

Ｂ　類（Ｊ２Ｐ－２・３、Ｊ２Ｗ－１・４・19・20）

口径と高さの比率は28～30を示し、Ａ類に比して深味をもつ。見込みとほぼ同一の器肉の厚さをもち、Ａ類より腰がさらに強く張る。その結果、口縁の直立の度合が増す。

Ｃ　類（Ｊ２Ｗ－22・23・24）

Ｂ類をそのまま小型化したものであるが、見込に比して体部の器肉の方が厚くなる特徴を示す。口径と高さの比率は22～23を示す。

Ａ類は全て水拭きが加えられるのに対して、Ｂ・Ｃ類は部分的なナデが加えられる。

III　群

全体に器肉が厚く、内湾する体部からほぼ直立する口縁へ移行する。内面は円を描くように丸味をもって仕上げられている。

A　類（Ｊ２Ｗ－７・15・17）

口径と高さの比率は30～32を示す。口縁部が丸く仕上げられており、水拭きおよびナデを加える。口縁はほぼ直立する。

B　類（Ｊ２Ｗ－９・14）

口径と高さの比率は33～34を示す。口縁部はつまみ上げられて直立し、口唇部が尖ってくる。全面に水拭きを加える。

Ⅳ　群

底径が大きい一群である。体部は湾曲し、口縁は短く直立する。

A　類（Ｊ１Ｄ－１、Ｊ３Ｄ－１）

底径・口径共に大きく、口径と高さの比率は23～26を示し、浅い形態をとる。外面に横のナデが加えられ、同一の器肉を維持する。

B　類（Ｇ１Ｄ－２・４、Ｊ２Ｐ－５）

体部の湾曲がA類より少く直線的であり、口縁はつまみ上げられてわずかに直立する。口縁へ移行するに従い器肉を減ずる。口径と高さの比率は28～29を示す。

C　類（Ｊ２Ｗ－10・13・21）

腰の部分で屈曲し、口縁にかけて外傾する形態をとる。口縁にかけて除々に器肉を減じる。口径と高さの比率は31～32を示す。

Ⅳ群はA類からC類へ除々に底径を減じ、逆に器高を増す。この結果、C類が最も口縁の開いた形態となる。整形技法ではA類とB・C類で異なる。A類は器肉を減ずることなく、口唇を丸く仕上げているのに対し、B・C類はつまみによって器肉を減じ、口唇が尖り気味となる。

Ⅴ　群

体部はわずかに脹らみをもちながら外傾し、深い形態をとる。

A　類（Ｇ４Ｄ－１、Ｊ４Ｄ－１）

見込みと体部にほとんど器肉の厚みに差が無く、口唇は丸く仕上げられている。形態的にⅡ群B類と似る。口径と高さの比率は31を示す。

B　類（Ｊ２Ｗ－３・５・６・12・16・18）

見込みと比べて体部の器肉は薄くなり、口唇にかけてその度合を増す。口唇はつまみあげられて直立する。口径と高さの比率は30～34を示す。

Ⅵ　群

外傾する体部をもつ。

A　類（Ｊ２Ｗ－２・８）

器肉は厚く、口唇は丸味をもった三角形を呈する。口径と器高の比率は31を示す。

B　類（Ｊ２Ｐ－６・７・８）

A類を小型化したものであるが、口径と器高の比率が低く、皿形に近いものである。このうち7は、口唇がつまみあげられ、Ⅳ群のB類を小型化したものとした方が良いかもしれない。

Ⅶ 群（G1D－6、J1W－2）

手づくねの小型かわらけである。口径が小さく、器高が大きい。よって口径と器高の比率は33～36と高い。

d．出土遺物の年代

以上、以表的な器種について区分してきたが、出土量も多いものでなく、また、全てが時期的に連続するものでもない。本遺跡の土器組成も充分ではないが、ここでは、区分された土器群を、古墳時代には土師器・須恵器、真間・国分期は須恵器杯形土器、中世はかわらけを中心として、他遺跡と比較検討しながら各々の所属時期を考えていくこととする。

1．古墳時代中・後期の土器

壺・甕・坩・高杯形土器の各種がある。

壺形土器Ⅰは、横ナデが施された比較的短く外傾する復合口縁であり、やや退化した状況を呈するが、復合部と頸部が同長であり、和泉期でもさほど新しい段階には下らない。類例は、愛宕遺跡7号住居址（註2）、女堀遺跡1号住居（註3）出土遺物の中にみられる。Ⅱはほとんど球形を呈し、和泉期の特色を示すが、二重口縁の形態が明瞭であり、あまり退化したものではない。また、球形胴であるもののわずかに下脹れ状を呈すること、同時出土の破片に櫛状工具によるナデが施されている事等により、五領期的要素を強く残しているものであるといえる。

土師器甕形土器Ⅰ・Ⅱは共に和泉期の全般にみられる形態であり、胴部の脹らみ等からその中間位置に属するものと思われる。類例は、古川端遺跡22号住居（註4）出土遺物を始め、多くの遺跡にみることができる。

Ⅲは明瞭なくの字状の口縁であり、やや長い球形胴を有することから、鬼高盛行期を当てることができる。

土師器高杯形土器は、Ⅰ～Ⅳに和泉期の特色をよく表わしている。その中でⅠは、脚に円孔を穿ったものがあり、五領期的要素を残している。Ⅴは五領期に比定されるものである。

2．権現山古墳出土の頸部に補強帯をもつ須恵器大甕

須恵器大甕の口縁と胴部の接合部に、補強の為の凸帯をもつものであり、群馬・埼玉の北関東を中心にみられるものである。窯址では、群馬県太田市金山窯址群の菅ノ沢窯址（註5）、八幡窯址（註6）、入宿窯址（註7）、亀山窯址（註8）等、今までのところ、太田市の金山窯址群に限られている。集落址では、群馬県只上遺跡（註9）、群馬県大道東遺跡（註10）、群馬県下郷遺跡(註11）、埼玉県大久保山遺跡（註12）、埼玉県舞台遺跡（註13）その他にみられる。古墳出土例としては、群馬県富岡5号墳（註14）、群馬県引間1号墳（註15）、埼玉県十二ヶ谷戸3号墳・15号墳（註16）、埼玉県長沖8号墳（註17）等がみられる。また、北関東以外では、千葉県香取郡坂並白貝18号墳（註18）、陶邑KM28－Ⅱ号窯（註19）例があるのみである。初現は富岡5号墳であり、6世紀半、終末は引間の古墳であり、8世紀前半の年代が与えられる（註20）。

補強帯甕の頸部には2～5帯の波状文が周り、その上下を隆線もしくは、沈線で区画している。

最下段には波状文帯をもつものと、もたないものがある。口唇部は、内面に条線をもつものと、端部にもつものがある。また口縁直下の文様体の最上段に、沈線もしくは隆線をもつものと、もたないものがある。新古によって形態・技法にそれほど差がみられないが、古いほど端部の稜線が明確なものであり、新しくなると丸味を帯びるようである。また、波状文帯も古いほど丁寧に施されている。本例と共通する要素をもつ例として舞台5号住居址を掲げることができる。

舞台5号住居址の土師器杯は、口縁部が内湾し、口唇部を外方へつまみ出したもので、外面下半をヘラ削り、内面を丁寧なヘラ磨きを施し、朱塗している。甕は口縁が下半でほぼ垂直になり、上半で直線的に開き、あまり脹らみをもたず縦ヘラ削りされている。伴出している須恵器高杯および、同期に比定される、同1号住居址蓋から陶邑II－3段階と考えられ、6世紀の第4四半世紀に位置づけられる。しかし、本址出土の補強帯甕には、鉤状の把手を付した提瓶が共伴しており、舞台5号住居より一段階後出する。陶邑II－4段階に比定され、7世紀初頭の年代を与え得る（註21）。

3．真間・国分期の土器

須恵器杯形土器は七類に区分された。Iは、底面全体に回転ヘラ削りを施すもので、体部から口縁が直線的に外傾し、浅い形態をとるものである。類例は水深遺跡第40号住居址出土遺物中にみられる（註22）。40号住居址出土遺物には、かえりのある蓋、大きく外反し胴部に縦のヘラ削りを施す土師器長甕、上位に横のヘラ削りを施す丸甕、底部をヘラ削りによって丸く仕上げる土師器杯等が伴出している。また、立野遺跡出土の土器群の中にも類例がみられる（註23）。立野遺跡出土の一群にはかえりの消失した須恵器蓋もかなり含まれる。こうして須恵器蓋のかえりが消滅しかけ、新しい状況を呈しようとする時期に当ると考えられ、7世紀末～8世紀初頭の年代が与えられる。

IIは底面全面に回転ヘラ削りを施すもので、体部全体が直立に近い角度で外傾する。類例はあまり無いが、わずかに前内出2号窯出土遺物にみられる（註24）。前内出2号窯は8世紀後半に比定されている。

IIIは糸切り後周辺部回転ヘラ削りを加えており、体部が直線的に外傾するものである。類例は、水深遺跡20号・37号住居址出土遺物、山田遺跡16号住居址出土遺物（註25）、滝遺跡5号住居址出土遺物（註26）等にみられる。いずれも、くの字状口縁をもち、胴部上半に横ヘラ削りを施すものと、大きく外反する口縁から胴部に縦ヘラ削りを施すものの二種類の土師器甕が共伴している。前者は本文の土師器甕Ⅳに当る。また、ほぼ同時期と考えられる遺跡から、胴部上位に横ヘラ削りをもち、肩の張る、土師器甕Ⅴ、体部下半にヘラ削りを加え丸く仕上げる土師器杯（本土師器杯II）も出土している。滝遺跡5号住居址出土須恵杯には本例と同様、白色針状物質が含まれている。

Ⅳは底面糸切りのままであり、白色針状物質を含有する。形体的には新久A－1窯出土遺物と同類（註27）であるが、山田遺跡23号住居址出土遺物中にも同類がみられる。23号住居址出土遺物にみられる須恵器杯は大部分が周辺にヘラ削りを加えるものであるが、そのうち2例のみ糸切りのままのものを加えている。また、土師器甕は、コの字状口縁の前段階のもので、口縁下半に直立部分をもつものである。これらのことから本例は9世紀の半に近い前半代であろうと考えられる。

Ⅴ～Ⅶは全て底面糸切りのままであり、口縁の外反の度合、体部の脹らみ等異なる要素もあるが、

底径が小さくなり、ほぼ同一時期の所産と考えられる。ただ、新久窯址出土遺物と比較してみると、Ⅴ・ⅥがA－1・2窯に、ⅦがD－1窯に対比されることから、Ⅶが若干後出するものであろうか。いずれにせよ、各遺跡でⅤ～Ⅶの須恵器杯と伴出する土師器甕は、コの字状の口縁をもつもので、9世紀半から後半の時期のものである。

Ⅳの時期と同一期の、中堀遺跡1号住居・3号住居出土遺物中（註28）に、本文土師器杯Ⅳがみられる。1号住居は、3号住居と同時期であるが、先行する要素が多く、本文土師器杯Ⅳを含む。Ⅴは土師質であり、別考する。

須恵器皿形土器Ⅰ・Ⅱは、杯Ⅴ～Ⅶに共伴する。高台椀は、Ⅰ～Ⅲが杯Ⅴ・Ⅵに、Ⅳ・Ⅴが杯Ⅶにそれぞれ共伴する。

灰釉J2H－2は、猿投・黒笹7号窯生産と考えられ、9世紀前半代の年代が与えられる。J3S－11は、折戸10号窯生産と考えられ、前例とほぼ同時か、わずかに後出する。9世紀半の年代が与えられる（註29）。

真間・国分期の土器群は、権現山地区では検出されておらず、当期は未使用であったと思われる。また、常光院東区では、羽釜が一点も発見されておらず、その時期が限定される。

4．中　世　の　土　器

今回出土のかわらけは、全て内湾する体部をもつことを特色としている。埼玉県内では武良内遺跡（註30）出土品の中に内湾する体部の例をみることができる。神奈川県では、鎌倉市の光明寺裏遺跡（註31）、同東勝寺遺跡（註32）、千葉県では市原市の南総中学遺跡（註33）で類例がみられる。

さて、今回調査した遺構の中で、最も多量にかわらけを出土したものはJ4Dであるが、図示されたものは一点のみである。かわりに、出土した大半が図示し得た遺構は、J2Wである。J2W出土かわらけの、Ⅱ－B、Ⅲ－A・B、Ⅳ－C、Ⅵ－A類については、光明寺裏Ⅱ類と同一である。しかし、Ⅱ－A・C、Ⅴ－B類については類例をみることができない。Ⅱ－A・C類は、体部の内湾の度合が強く、口縁がほとんど直立する形態をとる類である。この要素は光明寺裏Ⅱ類の中にも一部見ることができ、若干先行する要素であると言えよう。Ⅴ－B類については、口唇部をつまみ上げて直立させるものである。このように口唇部先端を尖らせる技法は、埼玉県田木山遺跡出土例（註34）にみられ、埼玉県における地域的な技法といわれる（註35）。このような技法がすでに、光明寺裏Ⅱ、もしくは、それより若干古い時期に具有されていたとすることができる。

光明寺Ⅱ類より若干古いものとしたⅡ－A類は、G1D、J2P、J1Wにおいても検出されている。G1D、J2Pについては、共にJ2WでみられないⅣ－Bを共伴している。J2Pはさらに、J2WでみられるⅡ－B類、J2Pにのみ出土しているⅥ－B類を共伴している。ⅣB類を出土したG1Dには常滑甕、渥美片口が出土しており、それらから一応の年代が得られる。常滑甕は、口縁端部が上下に強く突出し、常滑Ⅲ期に比定される。片口も同時期である（註36）。よってG1Dは、13世紀後半とすることができる。J2Pも同一要素が多く、同一時期と思われる。G1D、J2Pに多くみられたⅣ－B、Ⅵ－Bの類例は、南総中学遺跡に一括出土しているものである。

南総中学遺跡出土例に類似するものとしてＪ１Ｄ、Ｊ３Ｄ出土遺物があり、これも、南総中学遺跡出土遺物をとおして、Ｇ１Ｄ、Ｊ２Ｐと同一時期であるとし得る。

以上を要約し、かわらけを出土した遺構を年代順に配置すると、Ｊ１Ｄ・Ｊ３Ｄ・Ｇ１Ｄ・Ｊ１Ｗ→Ｊ２Ｐ→Ｇ４Ｄ・Ｊ４Ｄ・Ｊ２Ｗとなる。そして、Ｊ１Ｄの13世紀後半からＪ２Ｗの（神奈川県多宝律寺の類例がわずかにみられることから－註37）13世紀末～14世紀初までの間とすることができる。

また、Ｉ類とした、中条氏館跡北堀出土のかわらけは、その出土状況から、館の創設期に伴うものとして、12世紀後半の年代が与えられるものである。

2．まとめ

本調査の成果は、いままで記してきたとおりである。その中から二・三の点についてまとめてみる。

権現山古墳は、直径約37ｍを計る円墳である。本墳はすでに削平されており、主体部の形態は不明であるが、墳丘部中央やや南寄りに南北 6.7、東西 5.6ｍの範囲に小礫の集中が見られ、横穴式石室の存在を想起させる。本墳は、北面周溝部から発見された須恵器補強帯甕、提瓶によって、6世紀終末～７世紀初頭の年代が与えられている。新しい時期をとって、本墳は７世紀初頭に築造されたものと成し得る。

さて、本墳は大規模な円墳でありながら、埴輪は一片も検出されておらず、すでに埴輪が消滅した時期のものであると言える。しかし、埼玉地方（熊谷市上中条は旧埼玉郡に属する）の当時期の古墳には、依然として埴輪施設を有する例がある。

行田市野畑１号墳は、安山岩礫の面取りされた材を用いた、方形に近い胴張りのある横穴式石室であり、周辺に埴輪片が散っていた。（第１図中№８北西×印－註38）

行田市酒巻１号墳は、全長50ｍの前方後円墳であり、安山岩礫の面取りされた胴張りのある、二基の横穴式石室をもつものである。２・３号墳は円墳であり、荒川の礫を使用した横穴式石室をもつ。２号墳は短冊形、３号墳は胴張りをもつものである。この３基はいずれも埴輪を有し、石室構造・副葬品から、７世紀前半代に位置づけられている（註39）。

これらの古墳は、現利根川の右岸からわずかな距離に位置するものであり、石室には利根川系と、荒川系両者の石材を用いているなど、各々の属性は複雑である。位置からして、東毛地域との関連性も注視しなくてはならないと思われ、一既に北埼地方全般に７世紀前半まで埴輪をもつとは言えないであろう（註40）。

いずれにしても、当地域で、７世紀初頭に埴輪施設をもたない、37ｍ級の円墳が存在したことは、今後、当地域で古墳の推移をみるうえで、重要な意味をもつものである。

中世の遺構は、出土遺物の検討によって、13世紀後半代に集中することが判明した。本遺跡は、中条氏館址の東に隣接する地域であり、当然、館址と関連をもつものである。

長承元年（1132年）、中条常光は、国司に任ぜられ、没する保延三年（1137年）までこの地に居住した。常光の館跡は、現在の熊谷市大字上中条字光屋敷にあって、字名にその名を残している。現状では、北面土塁の一部が残存している。常光の長子は、有家であり、保元物語によると、中条新五と称し、弟新六と共に保元の乱に奮戦したと記されている。有家の子は家長といい、治承四年（1180年）の石橋山の合戦に際して、有家と共に頼朝方について参加して以来信頼を受け、幕府開設後、評定衆の一人として活躍したといわれる。また家長は、貞永式目の制定に携わり、嘉禎二年（1235年）に没している。常光院は建久三年（1192年）、家長が祖父常光の菩提を弔うため、自らの邸内（中条氏館）に建立したものに始まるといわれる。以来、関東における天台宗の名刹として現在に至っている（註41）。

中条氏館は、家長が居住したもので、その建立は12世紀後半であると考えられている。常光院二十三世住職、邦教上人が延享二年（1745年）に書き記した古図－第52図－と現状を比較すると、現寺域・農協の敷地・北および東側の畑地が、各々道路・水路によって画されておりよく一致する。当域の東北部は、水路が敷地に沿って曲折しているが、曲折して北へ伸びる水路は、東西に伸びる北側水路と覆土が異り、浅間Ａ火山灰層が大量に堆積している。よって、北へ伸びる水路から東の部分は、浅間Ａ山灰の降下よりわずか前に拡張され、水路も掘削されたものと考えられる－第53図－。その年代は、恐らく、古図の記された延享二年の直前であったろうと考えられる（註42）。

本調査で常光院東地区としたのは、東縁の、現在南北へ伸びる農道となっているが、東側の土塁であった地点から約35～50ｍ離れた後世に拡張された地域に当るわけである。

検出された当期の遺構は、土坑・井戸・溝である。井戸址は、横桟・支柱・縦板材による井戸側によって井戸枠をつくっているＪ１Ｗと、円形土坑素掘りのＪ２Ｗがある。溝は、覆土・出土遺物の内容共に各々大きく異り、各溝址の性格が異なることを意味する。Ｊ１Ｄは礫が多量であり、遺物も多種に及ぶ。Ｊ２Ｄは逆に遺物の出土がごくわずかであり、溝も浅い。Ｊ３Ｄの覆土はほぼ全面泥炭層であり、遺物の出土も少ない。これらとは全く異なり、Ｊ４Ｄは溝中がかわらけの小片で満たされるという状況を呈していたのである。このうち、Ｊ１ＷとＪ４Ｄから鞴口が出土しており、当地で鍛治が行なわれていたことを示すものである。

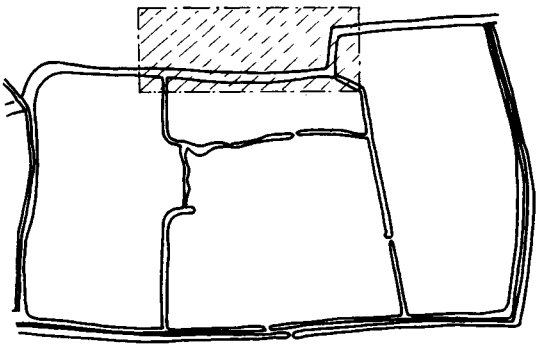
寛延二年（1749年）造立の常光墓誌には、

矣院東舊有荒陵安常光碑乱世喪唯存一跌石耳元録季中先主智堂改葬于此未補廃而避世……

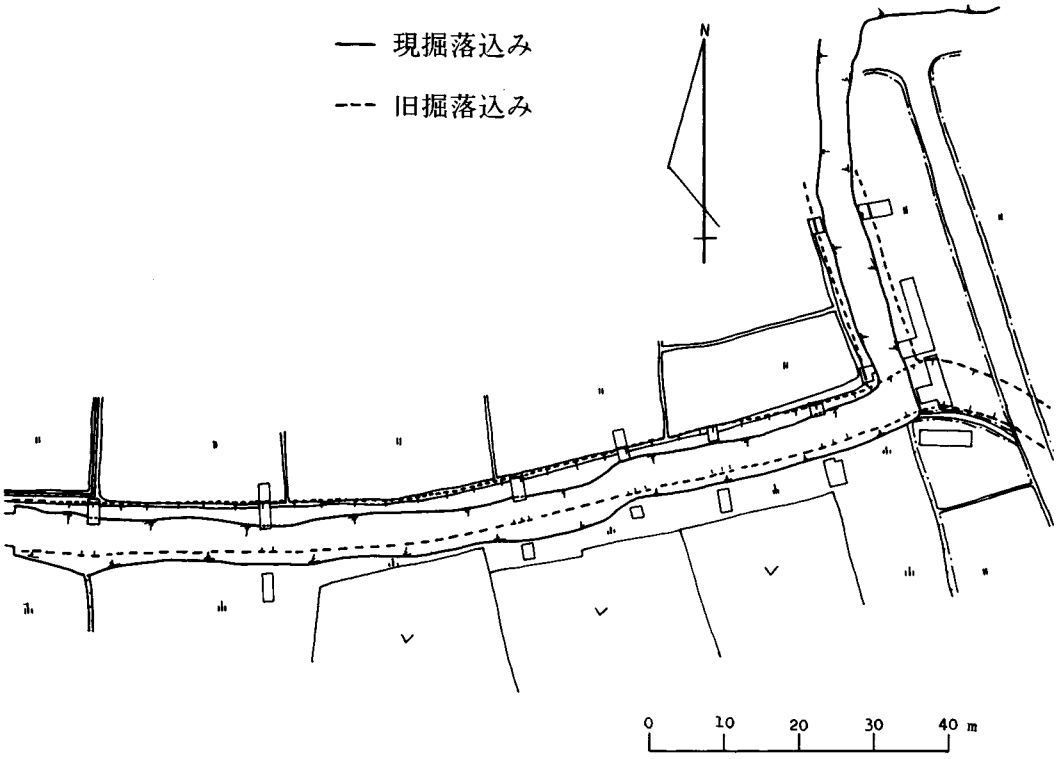
とある。このうち智堂は十九代住職である。また元文三年（1738年）の常光院由来には、

保延三年夏五月一日依病薨有一愛童見公之喪痛哭不止終公俱卒……

とあって、常光公の威徳を誇示したものであるにせよ、この愛童を葬った塚は、常光公自身の墓と同一地域に位置した可能性が高い。また、この愛童を葬った塚は稚児塚とよばれるという。こうして考えてくると、邪推であるかもしれないが、当初には古墳名であると思われた、稚児塚・権現塚の名称はそのまま、愛童と常光公の墓址名であったのではなかろうかと考えられるのである。



第 52 図　延享二年　古図



第 53 図　中条氏館址北掘試掘坑配置及び溝址復元

権現山地区で検出された遺構のうち、G1D、G4DG、G4Pは明らかに墓地であり、当地区が墓地として使用されていたことを物語るものである。

中世の遺構はこのように、常光院東地区では集落址としての性格をもち、権現山地区では墓地としての性格をもつという区別がつけられるのである。

常光院東地区は、現常光院を含めて、竹の内という小字名がついているが、古くは、館の内と書くものもあって、J1H−10にみられる「宅」の墨書と関連性をうかがわせる。また、出土遺物の中に、鞴・漆器・J4H覆土中に発見された磚状土製品（写真図版54）等が含まれており、一般集落とは異質である。

さて、新編武蔵風土記稿埼玉郡之条に、

上中条村は江戸より十六里の行程なり、太田庄或は忍庄とも唱ふ、按に上野国世良田長楽寺に蔵する、建長四年七月五日佐衛門尉時家がうけたまはれる文書に、水田一町在武蔵国中条保内水越郷、古政所南深町と云々……と記されている。水越は、現常光院（家長居住館址）と光屋敷（常光が居住した館址）の間に狭まれた地域の小字名である。これらのことから、北は光屋敷から南は竹の内まで一帯が当地の政治の中心地であったことがうかがわれ、調査した常光院東地区は、この一部を構成するものであると言える。

しかし、調査によって検出された中世の遺構・遺物の年代決定は、未だ編年すら充分に成されていないかわらけと、わずかな伴出陶器を用いており、充分なものであると言えない。今後資料の増加を待って、再検討しなくてはならないであろう。

周 辺 の 遺 跡 参 考 文 献

1．熊谷市史編纂委員会　「熊谷市史」前編　昭和39年

2．――1に同じ

3．――1に同じ

4．寺社下博『鎧塚古墳』熊谷市教育委員会　昭和56年

5．昭和56年度発掘調査、昭和57年度報告書刊行予定

6．――1に同じ

7．「埼玉県遺跡地名表」埼玉県教育委員会　昭和37年

8．柳田敏司「とやま古墳」埼玉考古学会　昭和42年

栗原文蔵「行田市酒巻古墳群について」埼玉県地域研究会発表要旨　昭和44年

栗原文蔵他「斉条第5号墳発掘調査報告－水田下にある特異な古墳」行田市教育委員会　昭和39年

9．――7に同じ

10．――7に同じ

11．『埼玉県土器集成4』埼玉考古学会　昭和51年

12．小川良祐・金子真土「池守・池上遺跡発掘調査の概要」資料館報10　埼玉県立さきたま資料館　昭和55年

13．並木隆他「中条条里遺跡調査報告書」昭和52年度熊谷市埋蔵文化財調査報告　熊谷市教育委員会　昭和54年

14．斉藤国夫「池守遺跡発掘調査概要」行田市文化財調査報告書7、8集　行田市教育委員会　昭和54年

15．塩野博「行田市星宮他皿尾遺跡の土器」埼玉考古学4号　昭和44年

16．寺社下博「中条遺跡群・中島遺跡」昭和54年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書　熊谷市教育委員会　昭和55年

17．――7に同じ

註 お よ び 参 考 文 献

1．試掘調査は、中条氏館址の北面溝の掘削時期を明確にすることを目的として、埼玉県文化財保護課によって実施されたものである。資料の掲載を快諾して下さった、県文化財保護課井上・杉崎両氏に謝意を表します。

2．駒宮史朗・大和　修『本郷東・愛宕』埼玉県遺跡発掘調査報告書第7集　埼玉県教育委員会　昭和51年

3．小泉功・増田逸朗「川越市女堀遺跡」『埼玉孝古』第15号　埼玉考古学会　昭和51年
4．小久保徹他『東谷・前山２号墳・古川端』埼玉県遺跡発掘調査報告書第16集　埼玉県教育委員会　昭和53年
5．倉田芳郎「群馬県太田市菅ノ沢遺跡の窯址群」『日本考古学協会第38回総会研究発表要旨』日本考古学協会　昭和47年
駒沢大学考古学研究会『菅ノ沢遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ』再版　昭和53年
6．駒沢大学考古学研究会『八幡窯址』　昭和44年
7．駒沢大学考古学研究会『群馬県太田市入宿窯址』　昭和44年
8．梅沢重昭「群馬県太田市亀山窯址」『日本考古学年報』18号　昭和40年
9．千葉基次他「利根川中流域左岸の古墳・歴史時代」『利根川－自然・文化・社会－』　昭和46年
10．――註９に同じ
11．巾隆之他『下郷』群馬県教育委員会　昭和55年
12．早稲田大学本庄校地文化財調査室『大久保山Ⅰ』　昭和55年
13．谷井　彪他『田木山・弁天山・舞台・宿ヶ谷戸・附川』埼玉県遺跡発掘調査報告書第５集　埼玉県教育委員会　昭和49年
14．外山和夫『富岡五号墳』群馬県立博物館　昭和47年
15．神戸聖語他『引間遺跡』高崎市教育委員会　昭和54年
16．駒宮史朗他『青柳古墳群発掘調査報告書』埼玉県遺跡調査会報告書第19集　昭和48年
17．菅谷浩之他『長沖古墳群』児玉町文化財調査報告書第一集　昭和55年
18．村田一男『千葉県香取郡多古町坂並白貝古墳発掘調査報告』昭和53年
19．中村　浩『陶邑Ⅰ』大阪府文化財調査報告書第二八輯　大阪文化財センター　昭和51年
20．酒井清治「房総における須恵器生産の予察（Ⅰ）」『史館』第13号　昭和56年
21．井上　肇「７世紀の杯形土器について」『紀要－６』埼玉県立博物館　昭和54年
22．栗原文蔵他『水深』埼玉県遺跡調査会　昭和47年
23．水村孝行・井上尚明『児沢・立野・大塚原』埼玉県遺跡発掘調査報告書第28集　昭和55年
笹森建一「埼玉県における奈良時代の土器の変遷とその様相」『シンポジウム盤状杯』東洋大学未来考古学研究会・相武古代研究会　昭和56年
24．小川良祐他『前内出窯址』埼玉県遺跡調査会報告第24集　昭和49年
25．谷井　彪他『山田遺跡・相撲場遺跡発掘調査報告書』埼玉県遺跡発掘調査会報告第18集　昭和48年
26．笹森建一「埋蔵文化財の調査（Ⅱ）」『郷土史料第24集』上福岡市教育委員会　昭和55年
27．坂詰秀一『武蔵新久窯跡』雄山閣　昭和46年
高橋一夫「国分期土器の細分・編年試論」『埼玉考古』第13、14号　埼玉考古学会　昭和50年
星野達雄「いわゆる『国分式土器』について」『原始古代社会研究』３　昭和52年

28．大和　修他『中堀・耕地安・久城前』埼玉県遺跡調査報告書第15集　昭和53年

29．愛知県陶磁資料館『猿投窯』　昭和56年

30．金子真土氏に御教示を得た。

31．斉木秀雄他『光明寺裏遺跡』東京都北区教育委員会　昭和55年

32．大三輪龍彦『東勝寺遺跡発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会　昭和52年

33．松井孝宗・綿貫邦男他「千葉・南総中学遺跡」『先史』10　駒沢大学考古学研究室　昭和53年

34．――註13に同じ

35．大江正行「群馬県と周辺地域の中世土師質土師皿」『群馬考古通信』第７号　群馬県考古学談話会　昭和55年

36．赤羽一郎「常滑」『世界陶磁全集』３　小学館　昭和52年

常滑・渥美については、酒井清治氏の御教示によるところが多い。

37．池田大輔他『多宝律寺遺跡発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会　昭和52年

38．塩野　博「埼玉古墳群とその周辺」『鉄剣を出した国』学生社　昭和55年

39．――註38に同じ

「酒巻古墳群」『新編埼玉県史－資料編２』　昭和57年

40．金井塚良一「埴輪消滅の意味するもの」『古代東国史の研究』埼玉新聞社　昭和55年

41．中条氏および館址については、

『熊谷市史－前編』昭和39年、藤野三吉『中條氏と条光院』昭和16年、

日下部朝一郎『新編熊谷風土記稿』等を参考にした。

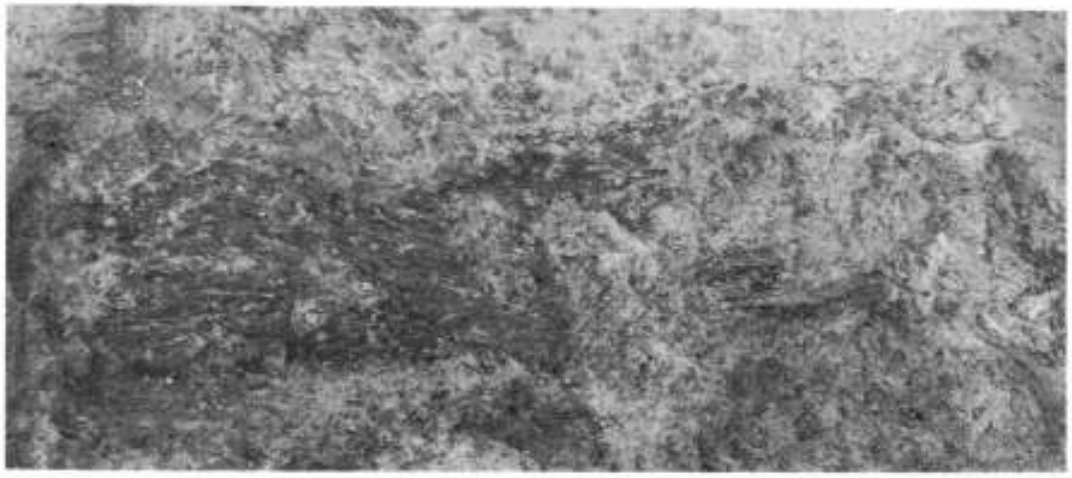
42．これらは註１に記した試掘調査で確認されている。寺域を拡大した為に図を記したことも考えられる。現行の堀は、北壁が埋没し、南壁が削除された状況を呈する。

なお、Ｊ１Ｗに用いた、井戸に関する用語は、小都　隆「草戸千軒町遺跡の井戸Ｉ」『調査研究ニュース』第４巻　広島県草戸千軒町遺跡調査研究所　昭和52年を使用したものである。

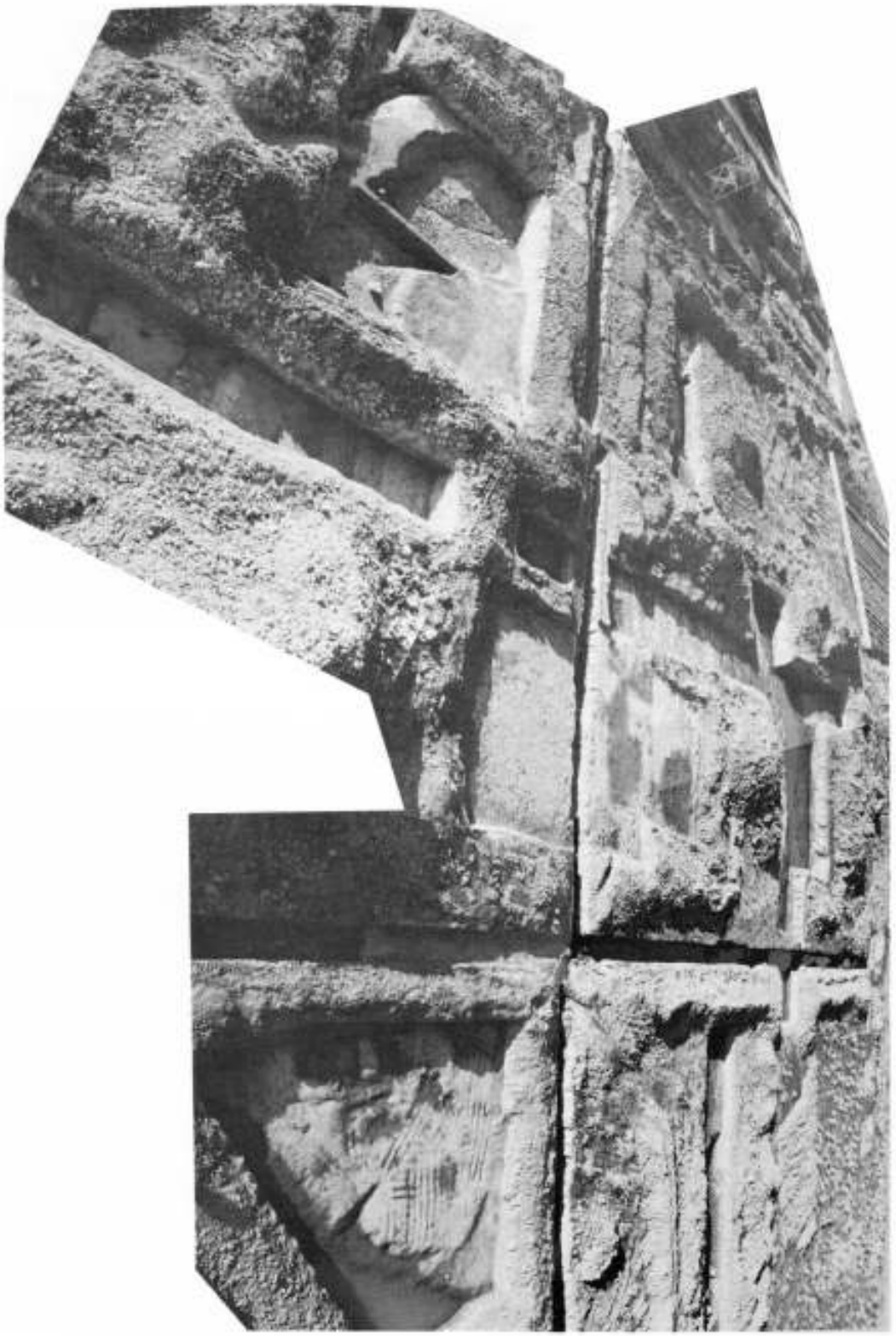
1．航　空　写　真

2．G1H（上・全景、下・東壁焼土）

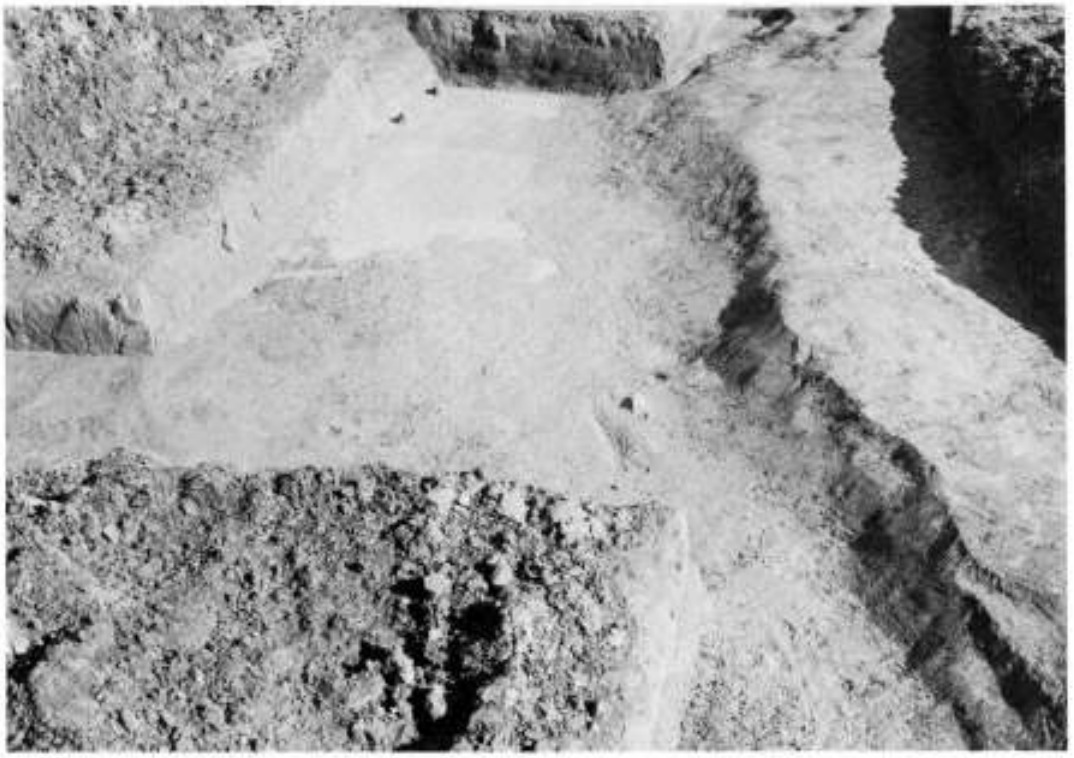
3．G1H（上・南半遺物出土状況、下・同拡大）



4．G1H（上・中・下・炭化材及び焼土出土状況）

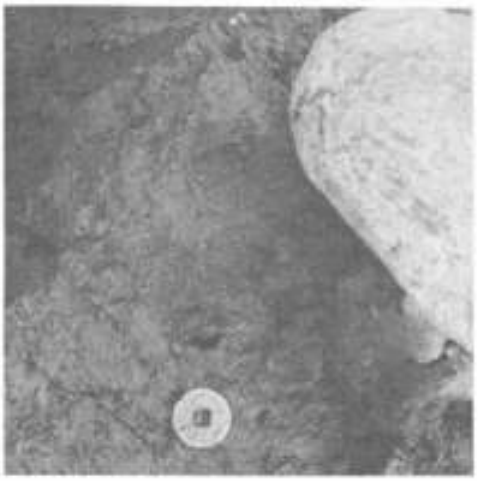


5．GM・全　景



6．GM周溝（上・北面、下・西南面）

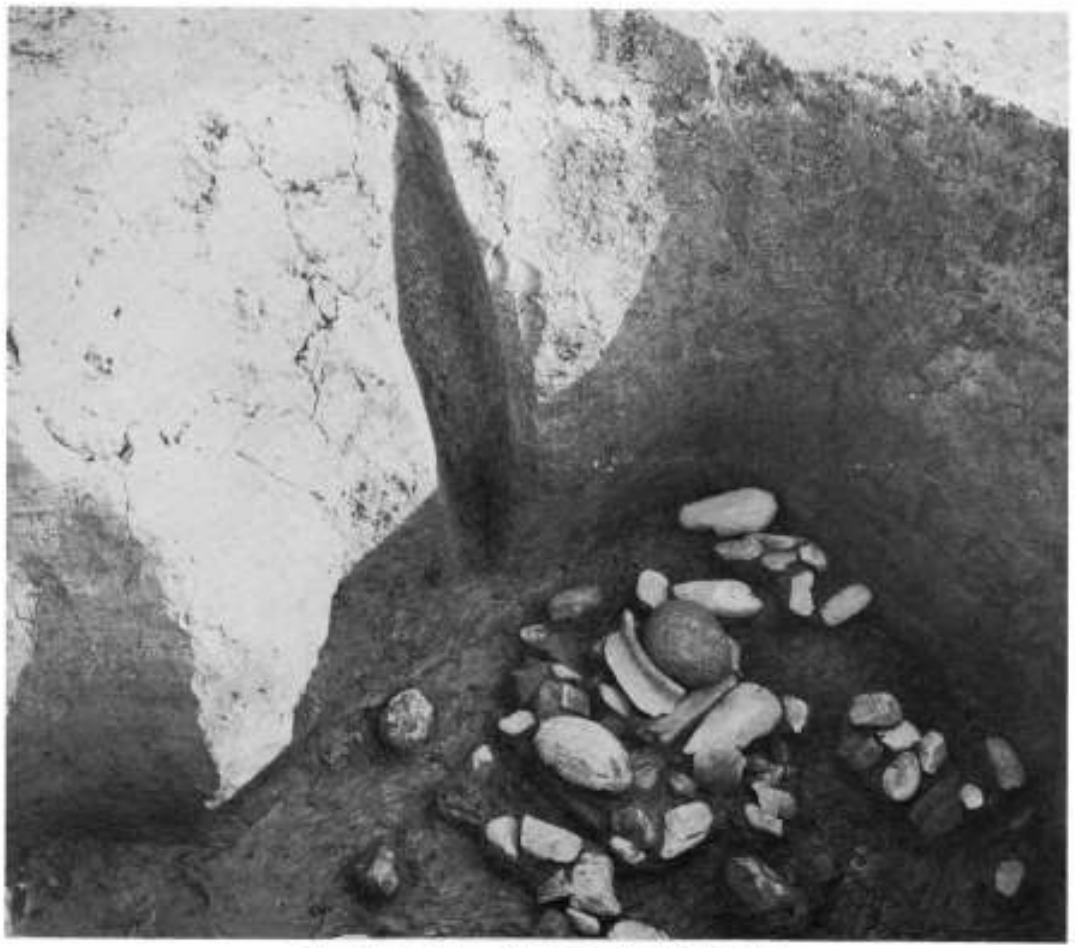
7．GM（上・主体部、下・須恵器大甕出土状況）



8．G1D（左上・全景、右上・中・下遺物出土状況）

9. 上・G2－3D、 G1－2P、下・G4D、G5P

10. 上・G5P、下・G4DG



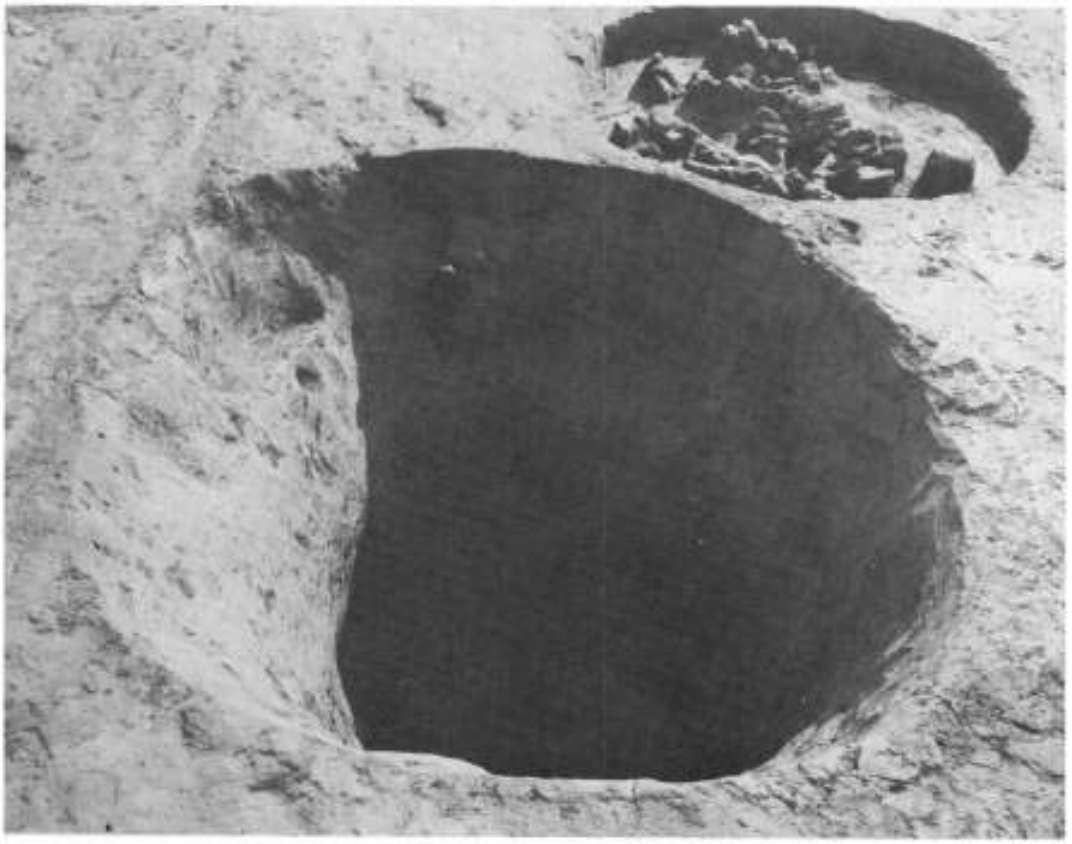
11．G４P（上・全景、下・遺物出土状況）

12．調査区全景（上・稚児塚、下・常光院東）

13. 上・J 1、3 H、下・J 1 H遺物出土状況

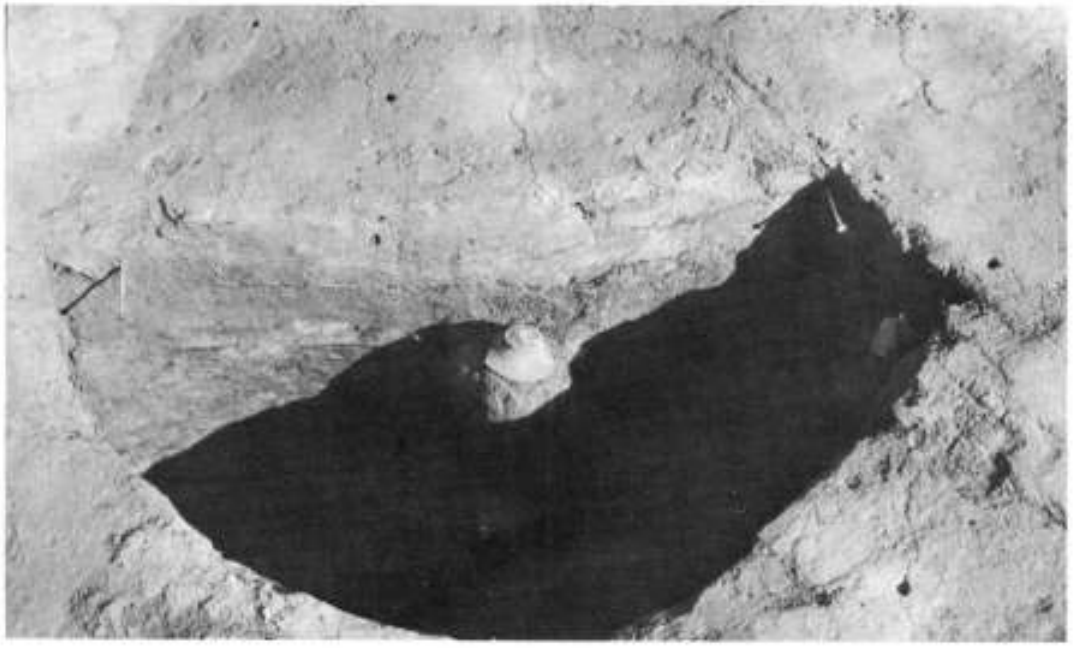
14．上・Ｊ２Ｈ（左全景、右遺物出土状況）下・Ｊ３Ｈカマド

15．Ｊ４Ｈ（上・全景、中・貯蔵穴内遺物出土状況、下・遺物出土状況）



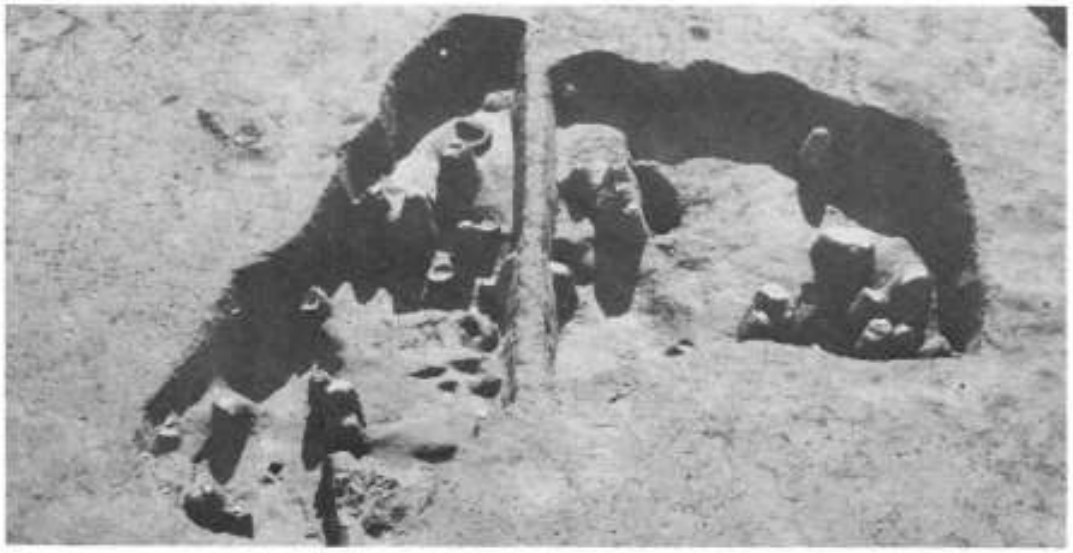
16. 上・J5H、下・J1P

17. J 2 P（上・土層、下・全景）

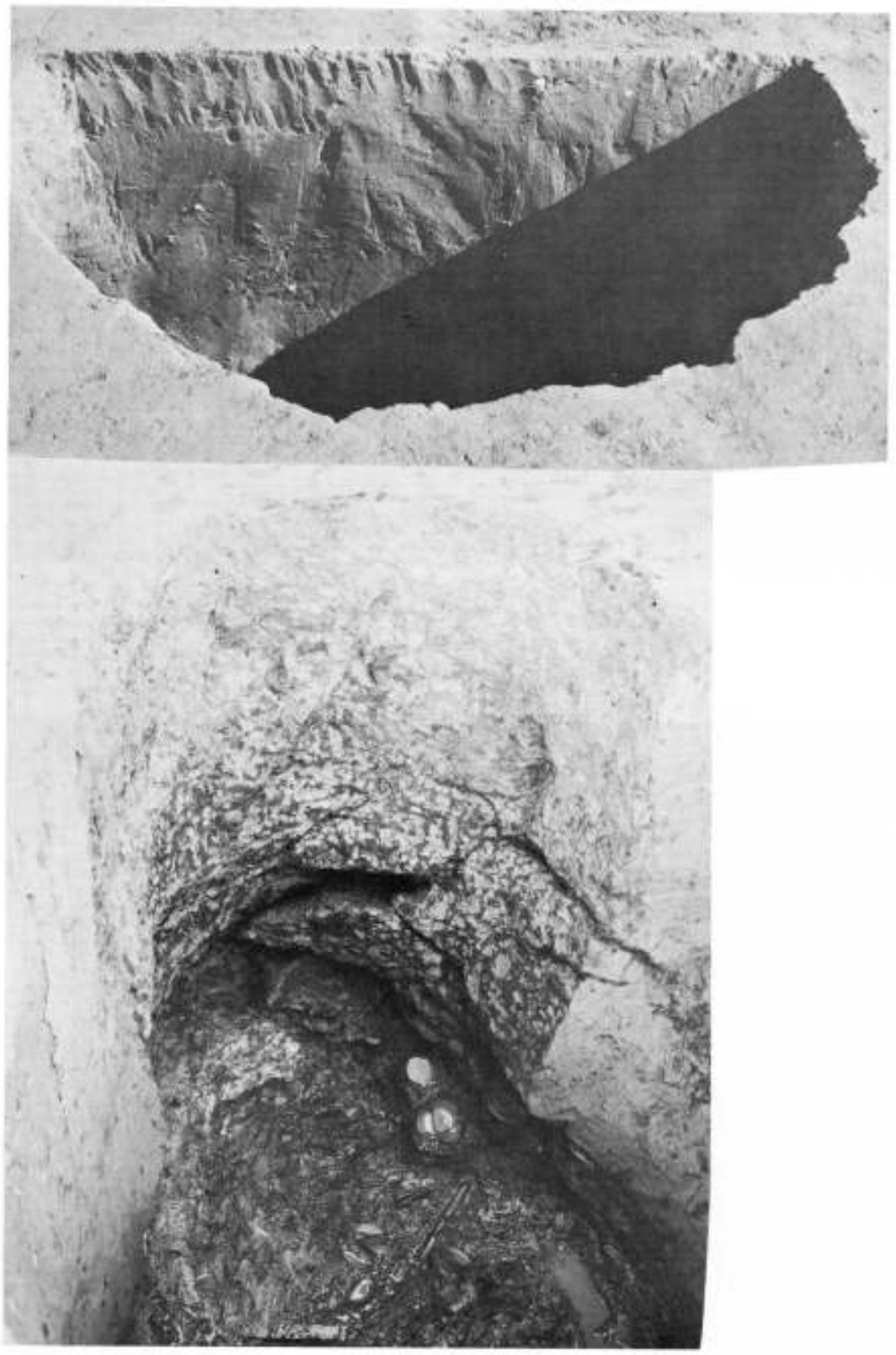


18. J 3 P（上・土層、下・全景）

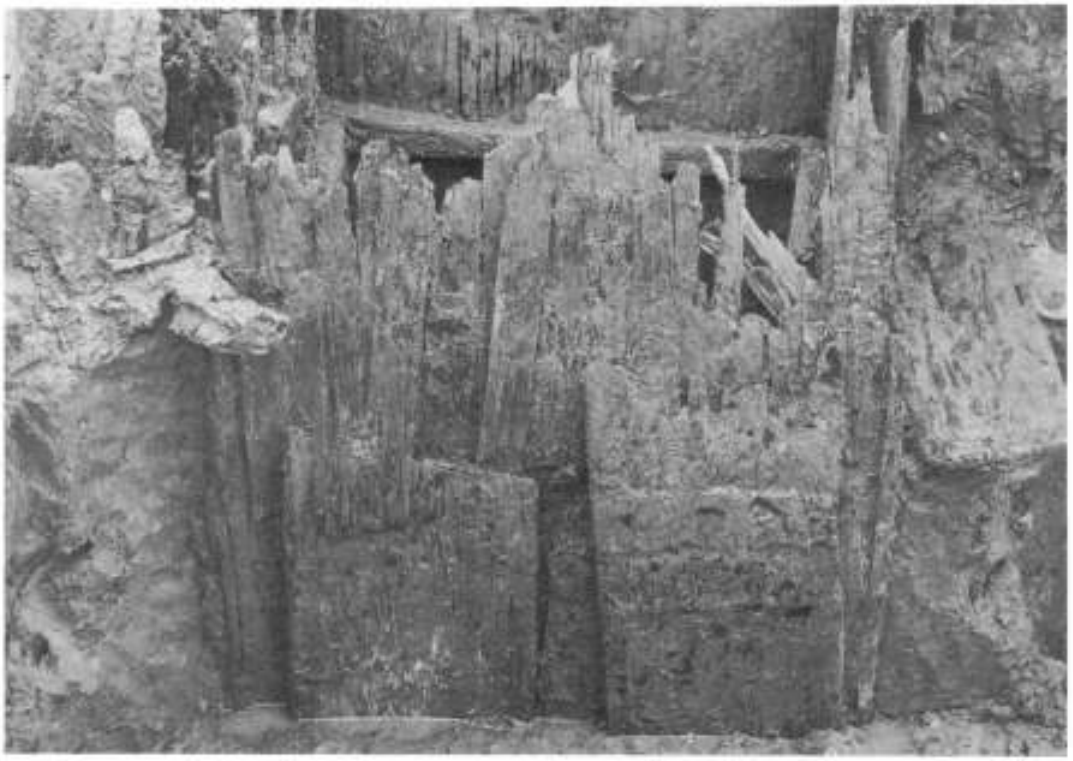
19. 上・J 5 P、下・J 7 P



20．Ｊ３Ｓ（上・全景、中・下・遺物出土状況）

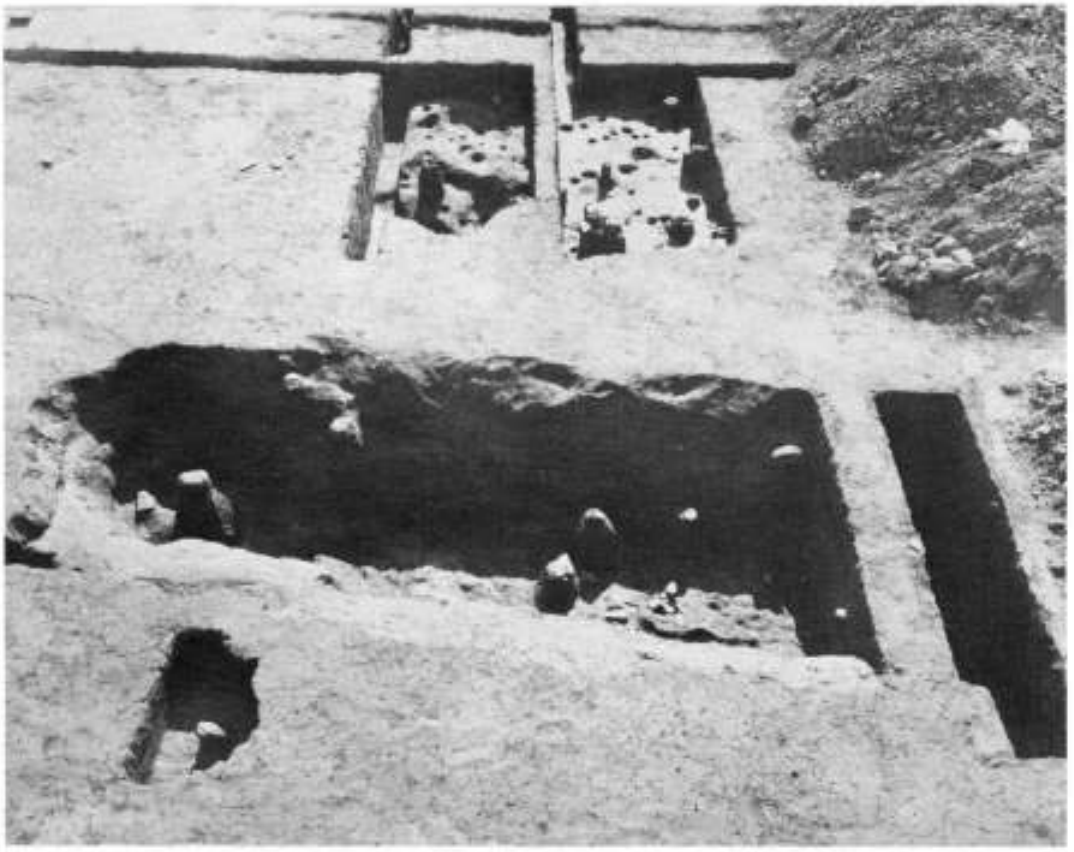


21. 上・Ｊ１Ｗ土坑、下・Ｊ２Ｗ全景



22. J 1 W（上・上面全景、下・上面井戸側）

23. J 1 W 横 桟 組 方

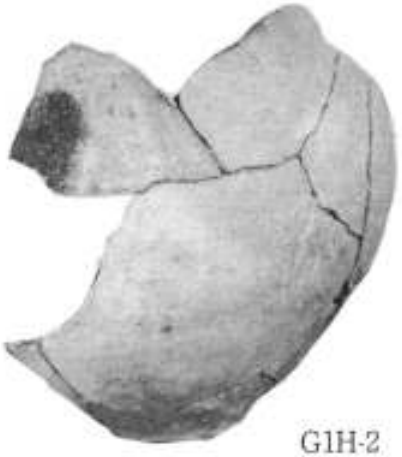


24. 上・J1D・J1S、下・J2D

25．上・Ｊ３Ｄ、中・同遺物出土状況、下・Ｊ４Ｄ

G1H-1

G1H-4



G1H-2

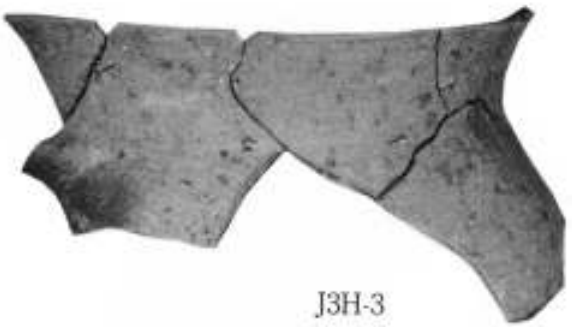
G1H-5

G1H-3

G1H-6

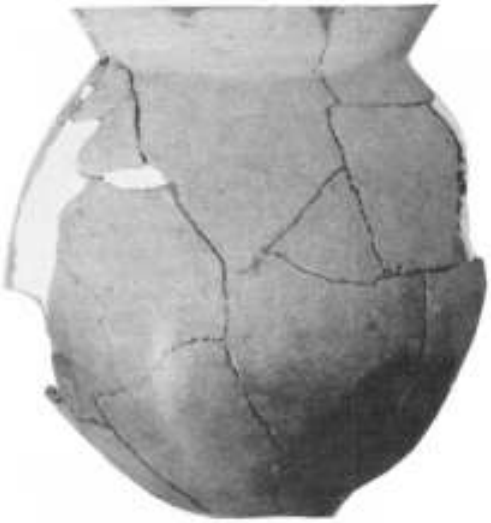
26. 土　師　器　甕 (1)

G1H-7



J3H-3

J3H-4



GM-1

J3H-5

27. 土　師　器　甕 (2)

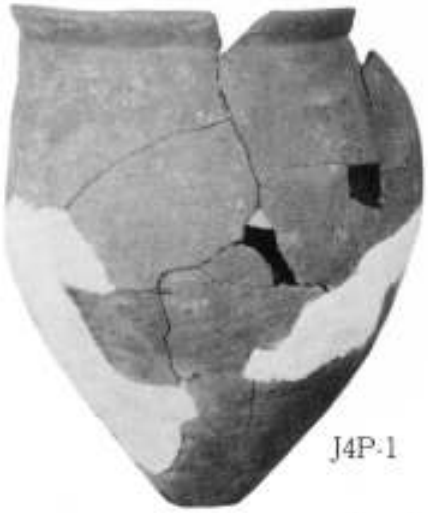
J2H-3

J7P-3

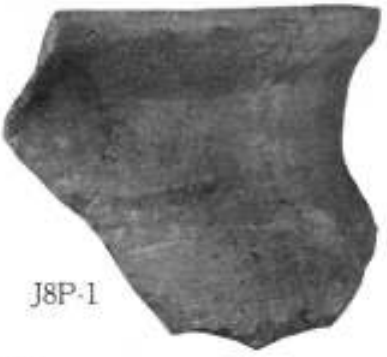
J7P-4

J3P-4

J7P-5



J4P-1



J8P-1

28. 土　師　器　甕 (3)

J2H-4

J1H-24

J1H-25

J3S-9

J3S-10

G1H-26

J3P-5

29. 土　師　器　甕 (4)

G1D-1

J3S-2

J4H-1

J9P-1

J4H-2

J3H-1

J3S-1

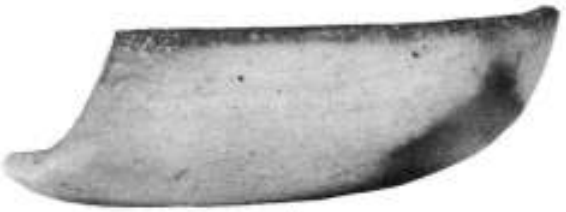
J6P-1

30. 土　師　器　杯

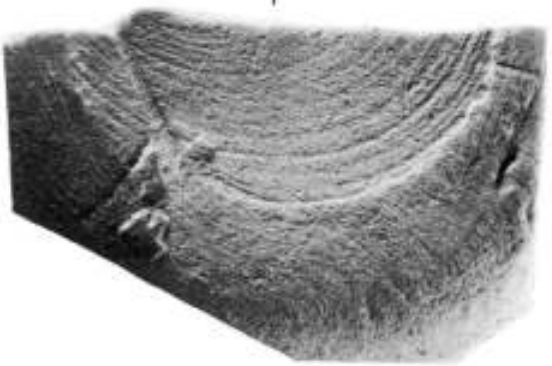
J4H-2

J2P-8

J3S-1



J3S-2



J1H-24

31．土師器杯底面及び内黒杯

G1H-11

J-5H-3

G1H-12

GM-7

G1H-18

GM-8

32. 土 師 器 高 杯 (1)

GM-9

G1H-15

J5H-1

G1H-13

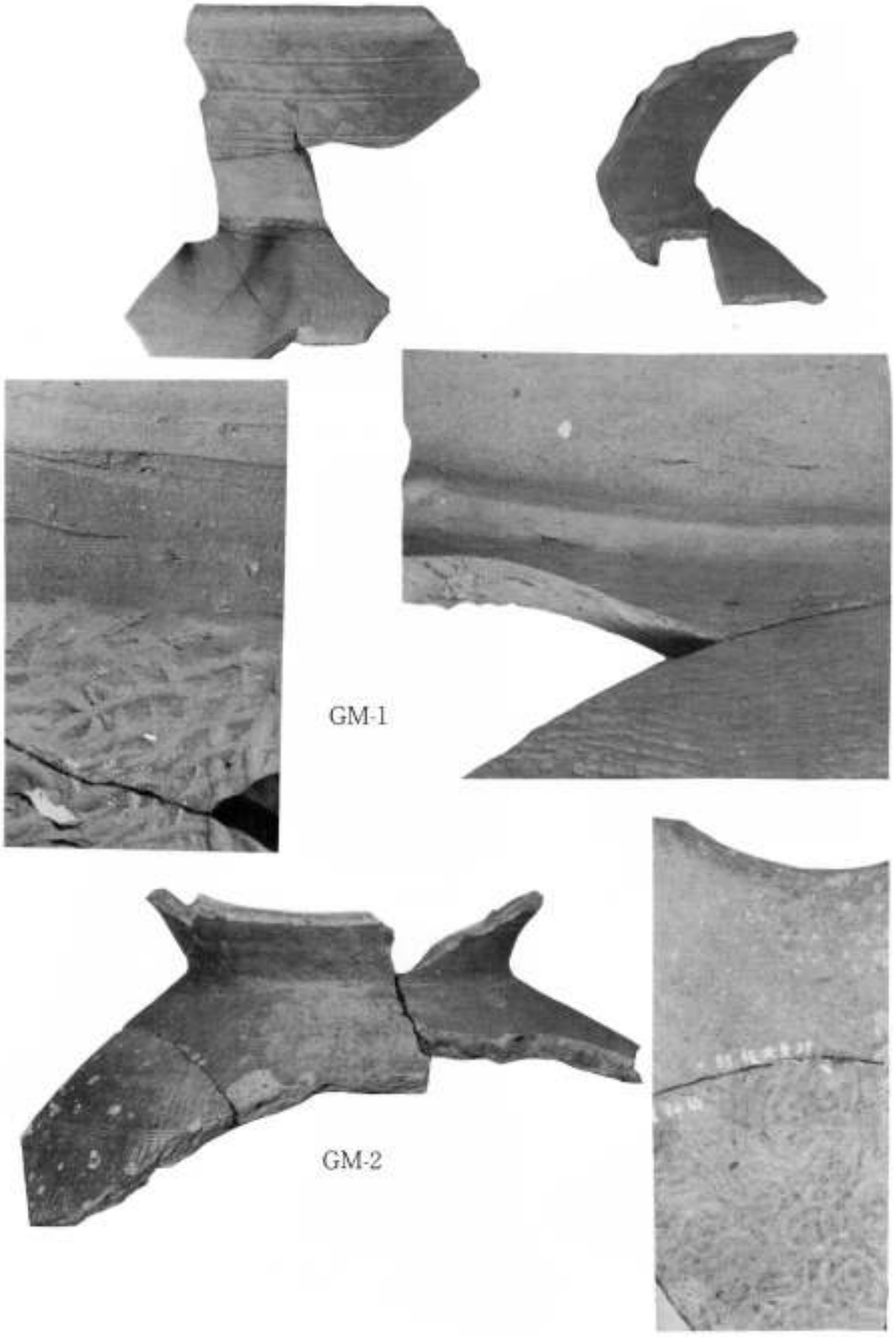
G1H-16

J5H-2

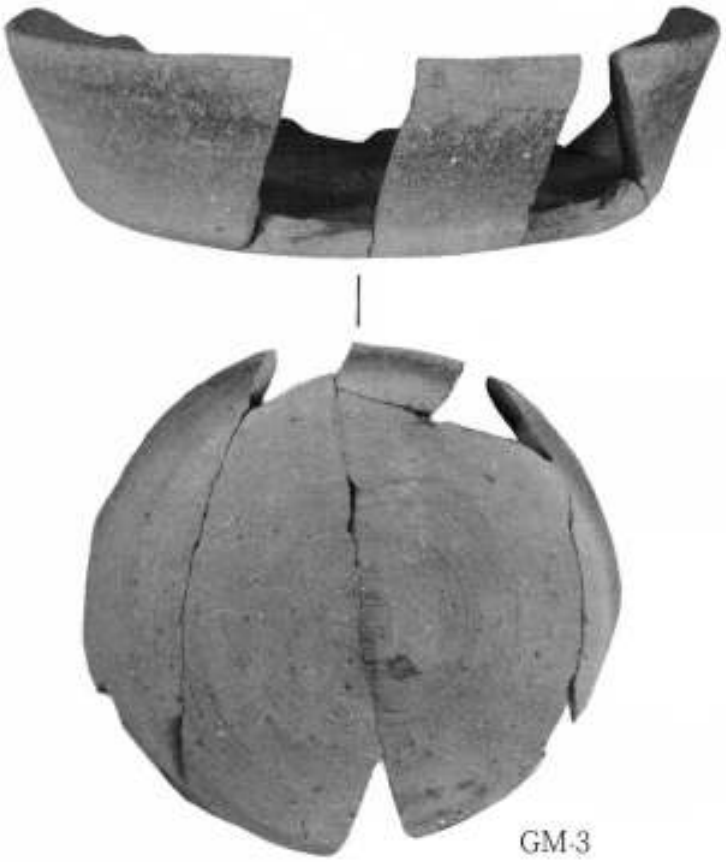
G1H-14

G1H-17

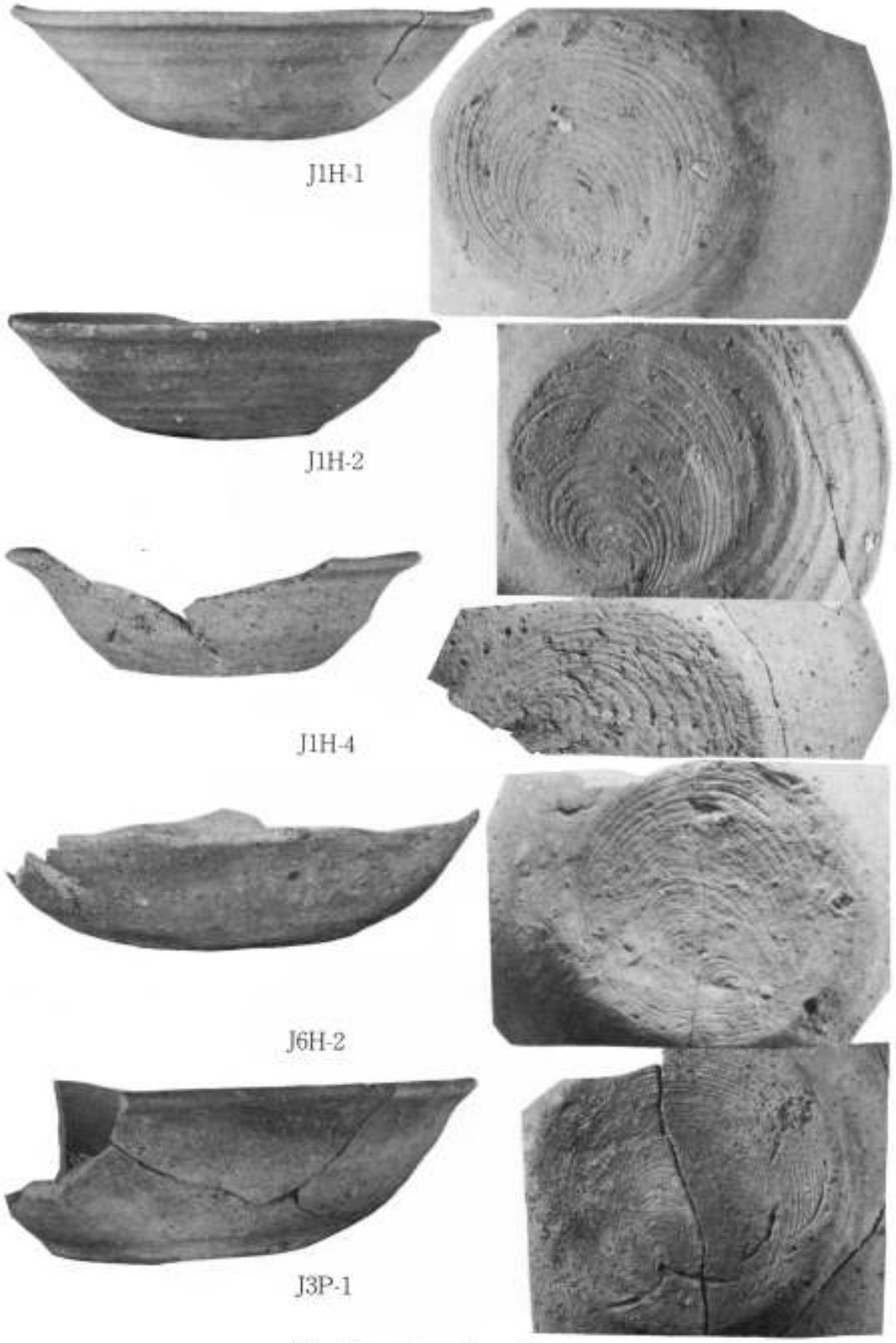
33. 土 師 器 高 杯 (2)



34. 須　恵　器　甕



35. 須　恵　器　杯 (1)



36. 須　恵　器　杯 (2)

J1H-3

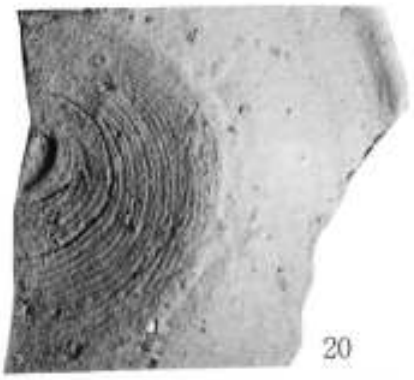
J2H-1

J3H-2

J2S-1

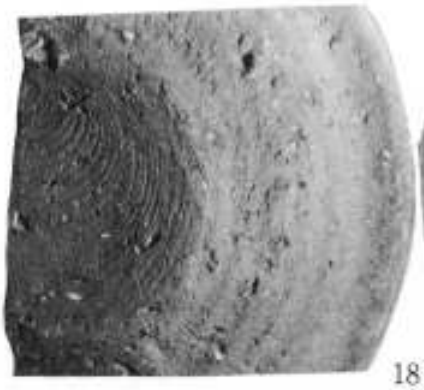
37. 須　恵　器　杯 (3)

16


20

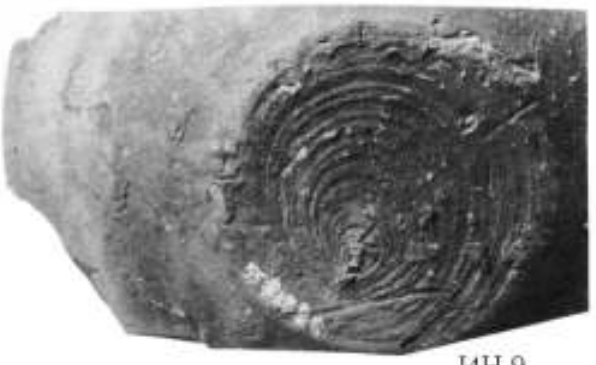
17

21


18

22

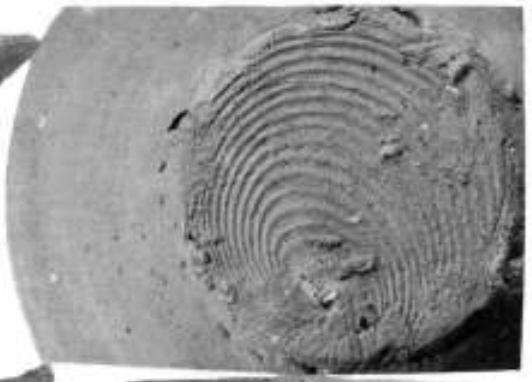
19


J4H-9

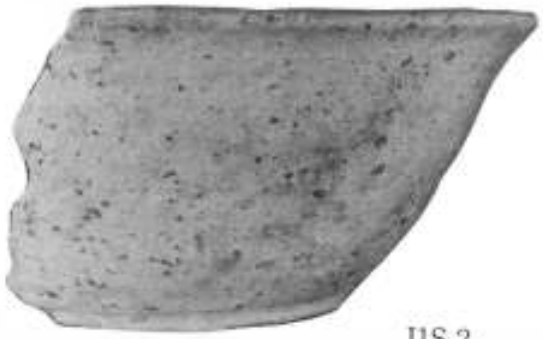
38．須恵器皿　Ｊ１Ｈ－16～22、Ｊ４Ｈ－９

J4H-3

J4H-5



J4H-6

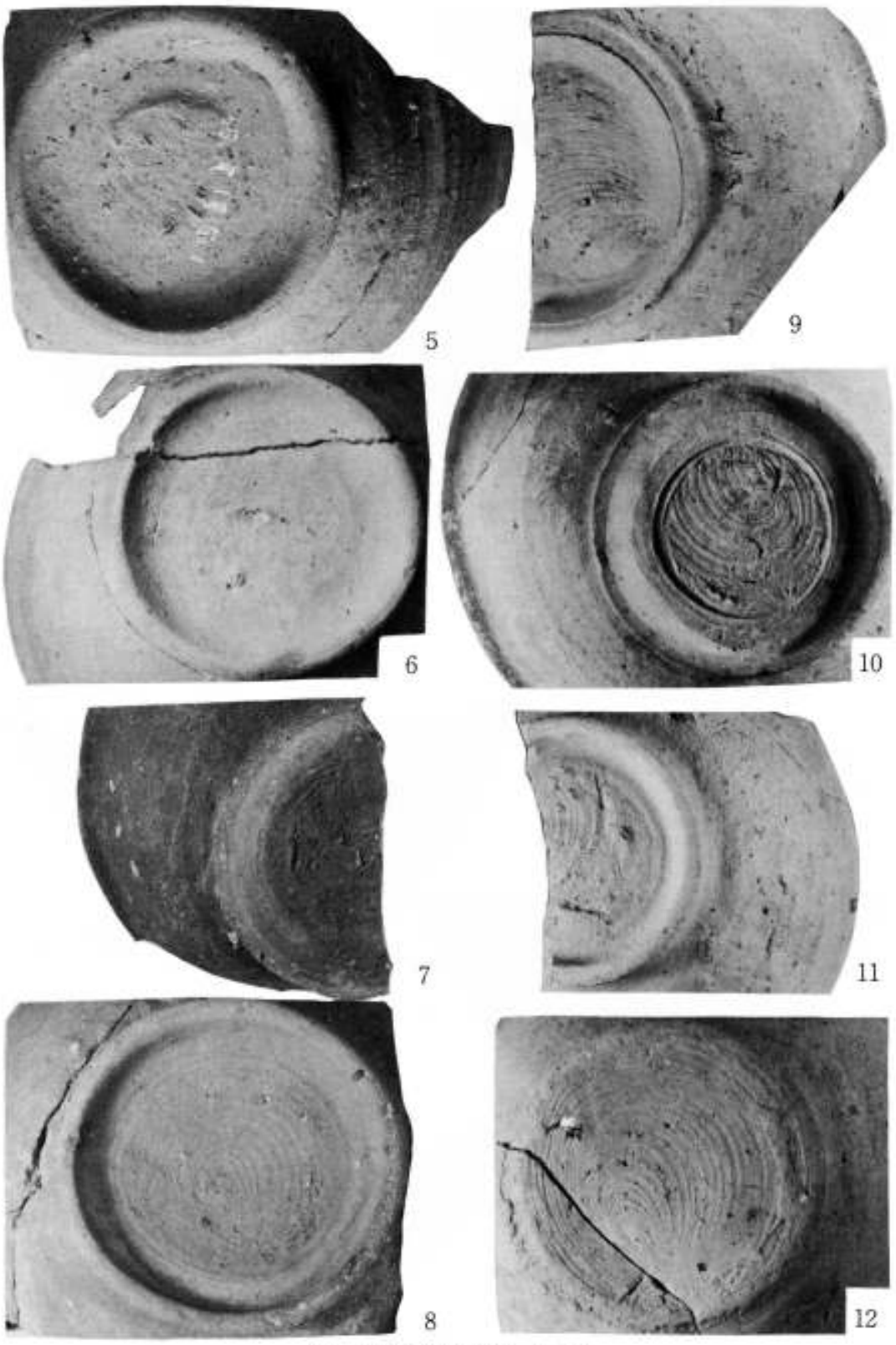


J1S-2

J3S-4

39. 須　恵　器　椀

40．須恵器高台椀（1） J 1 H



41．須恵器高台椀 (2) J 1 H

J4H-7

J3S-5

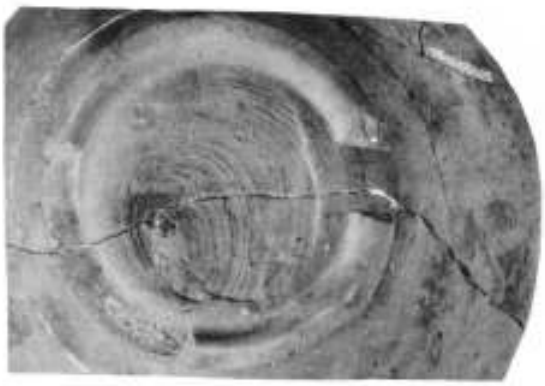
J4H-8

J3S-6

J6H-1

J3S-8

42. 須恵器高台椀 (3)



J4H-7

J3S-5

J4H-8

J3S-6

J6H-1

J3S-8

43. 須恵器高台椀 (4)

J1H-13

J1D-8

J1H-14

J3S-7

J1H-15

J3P-2

44. 須恵器高台椀 (5)

J1H-13

J7P-1

J1H-14

J7P-2

J3S-7

45. 須恵器高台椀 (6)

J2H-2

J3S-11

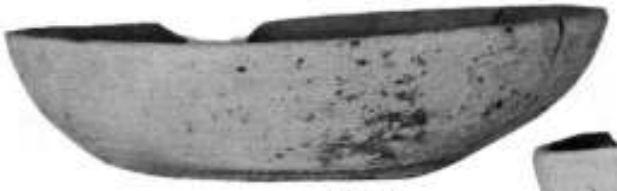
J1D-3

J1S-1

J3P-3

J4H-4

46. 灰釉陶器・須恵器蓋


J2P-4

J2W-20

J2P-2

J2W-22

J2P-3

J2W-24

J2W-15

J2W-1

J2W-17

J2W-4

J2W-14

J2W-19

47. かわらけII－A・B・C、III－A・B類

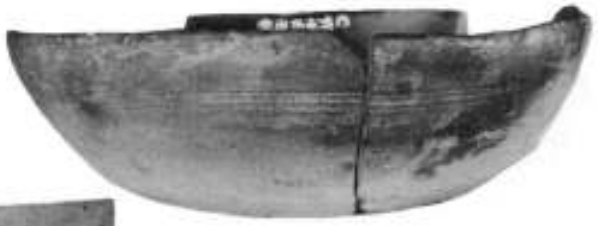
J3D-1

J2W-13

G1D-2

J2W-21

G1D-4



G4D-1

J2P-5

J4D-1

J2W-10

48. かわらけⅣ－A・B・C、Ⅴ－A類

J2W-3

J2W-2

J2W-5

J2P-6

J2W-12

J2P-7

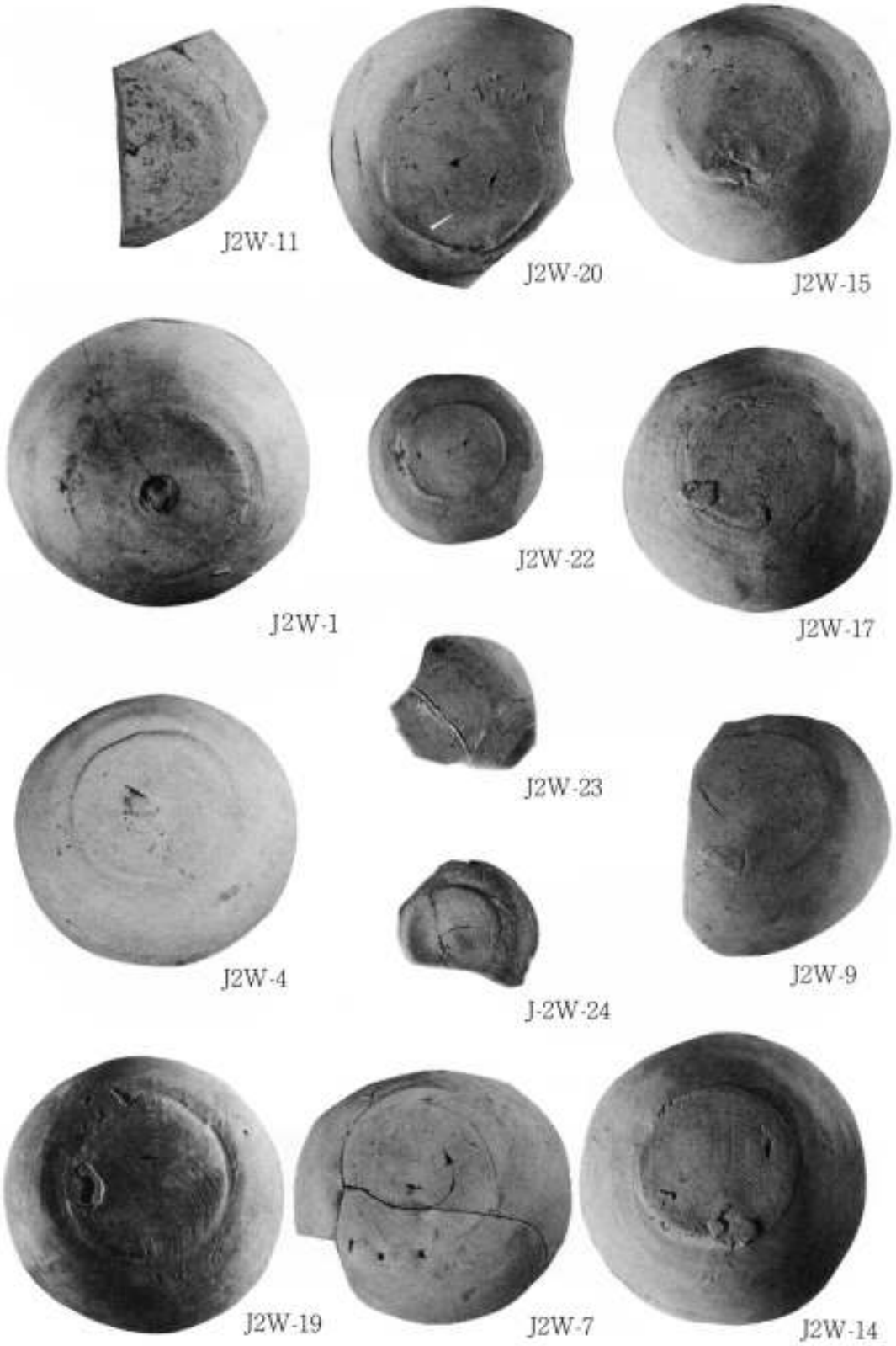
J2W-16

G1D-6

J2W-18

J1W-2

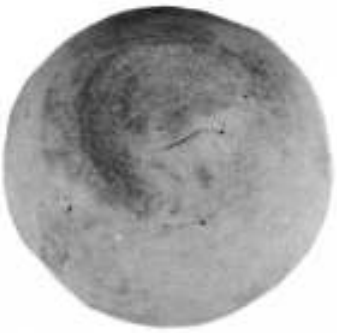
49. かわらけ V－B、VI－A・B、VII類


J2W-11
J2W-20
J2W-15
J2W-1
J2W-22
J2W-17
J2W-23
J2W-4
J-2W-24
J2W-9
J2W-19
J2W-7
J2W-14

50. か わ ら け 底 面 (1)

J2W-10

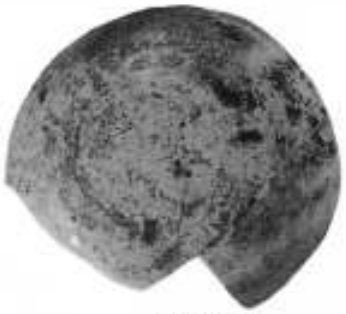
J2W-16



J2W-3

J2W-13

J2W-18

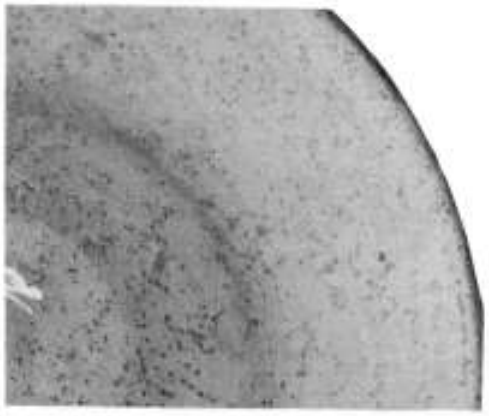


J2W-12

J2W-21

J2W-2

51. か わ ら け 底 面 (2)



J2W-4

J2W-7

J2W-20

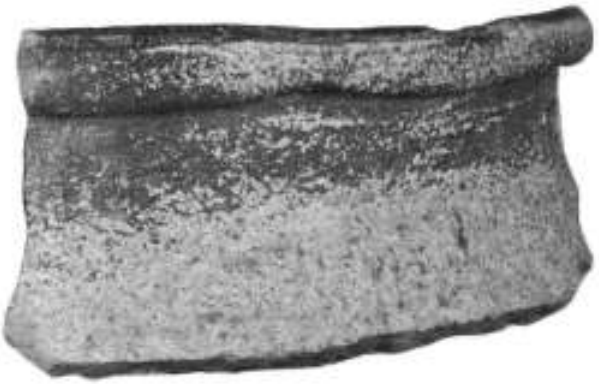
J1D-7

J2W-19

J1D-8

52、かわらけの整形技法（左・見込み周辺、右・外面）

J4P-1



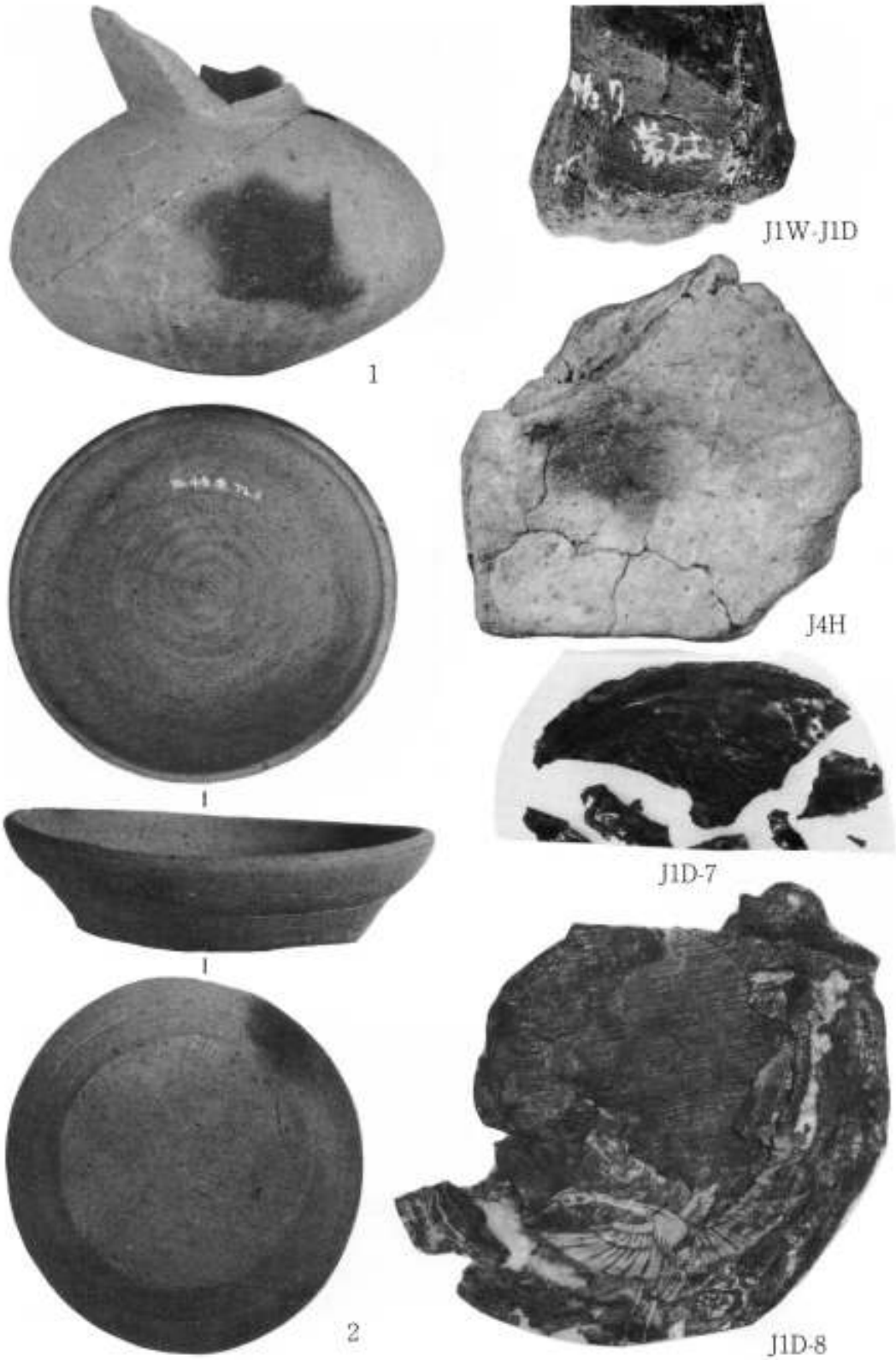
J4P-2

J1D-6

J1D-10

G1D-12

53. 中　世　陶　器



54．周辺出土遺物及び漆器

昭和56年度　熊谷市埋蔵文化財調査報告書
中条遺跡群Ⅲ　権現山古墳・常光院東遺跡

昭和57年３月31日発行

編集・発行　埼玉県熊谷市教育委員会

印刷所　有限会社　誠光社印刷所
埼玉県熊谷市大字原島１１６５－１
電話（0485）２１－２５１４（代表）